

(表紙)

吉 貴 公 自 寶 永 三 年 八 月  
繼 豐 公 至 同 四 年 五 月

追 舊 記 雜 錄 卷 三 十 八

2294 綱貴公御女龜姫君傳中 詳二年十月

寶永三年之秋 大納言家久公見大姉生前所<sub>レ</sub>愛之宇津山  
蕪一詠三和歌一首<sub>一</sub>、

色つきぬ涙のみさへこの秋ハ  
かゝる蕪葉もむかししのへと

吉貴公御譜中

正文在文庫

明十五日例月之御禮無之<sub>レ</sub>間、不及登城候、以上、

井上河内守 (正考)

朱力キ 寶永三年 八月十四日

松平薩摩守殿

大久保加賀守 (忠増)  
稻葉丹後守 (正通)  
秋元但馬守 (稻朝)  
土屋相摸守 (政直)

2296 全上

一筆令啓達候、其表弥御無<sub>レ</sub>吳<sub>レ</sub>哉、承度存<sub>レ</sub>、隨<sub>レ</sub>領所  
之鮭二尺令進覽之<sub>レ</sub>、猶期後音之時<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

朱力キ 寶永三年 八月十五日

松平薩摩守殿

人、御中

水戸中納言 網條判

2297 吉貴公御譜中

正文在文庫

御馬一疋被獻之候、首尾好遂披露<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

朱力キ 寶永三年 八月十八日

政直判

松平薩摩守殿

土屋相摸守 政直

2298

全上

御馬一疋被獻之外、首尾好遂披露候、恐々謹言、

朱力半  
寶永三年 八月十八日

正永判

松平薩摩守殿

本多伯耆守  
正永

2299

吉貴公御譜中

爲年頭之祝詞使者浦添親方被差渡之、如佳例目錄之通贈給之、欣然之至、猶期後喜之時候、恐惶不宣、

朱力半  
寶永三年 八月廿五日

少將吉貴御判

謹上 琉球國司

2300

(近衛家久室)  
去冬英光院仕合付、爲悔被差越使翰之段、入念儀外、

恐惶不宣、

少將吉貴御判

朱力半  
寶永三年 八月廿五日

謹上 琉球國司

2301

全上

芳札令披閱候、其國弥平安珍重、於我等無吳事、間、可易芳慮、被入念示諭、殊更石之手鑑二帖・木蘭一鉢饋給之、且又城普請付、以別翰目錄之表被贈與之、旁懇篤之至令祝着、恐惶不宣、

朱力半  
寶永三年 八月廿五日

少將  
吉貴御判

琉球國司  
回報

2302

全上

芳札令披見、渡唐之琉船去歲歸帆之節遭逆風、土佐國江漂着、萬端首尾好、段相聞、入念、紙面、殊以使、者目錄之通贈給、欣然之至、恐惶不宣、

朱力半  
寶永三年 八月廿五日

少將吉貴御判

謹上 琉球國司

2303

芳翰令披見、當春從 公方様御肴致拜領、爲嘉儀、使者前川親方被差越、殊目錄之表被相贈之、令怡悅、恐

惶不宣、

朱力年  
寶永三年 八月廿五日

少將吉貴御判

謹上 琉球國司

2304  
全上

芳簡令披見外、去歲大清國に差渡り進貢使、北京首尾好相仕廻令歸帆、満足之由尤之事、依之以使者目錄之表被相贈之、入念儀過當之至外、恐々不宣、

朱力年  
寶永三年 八月廿五日

少將吉貴御判

謹上 琉球國司

2305  
全上

來簡令披見外、當春從 公方様御着致拜領外爲嘉儀、別錄之通被相贈之、令怡悦外、恐々不宣、

朱力年  
寶永三年 八月廿五日

少將吉貴御判

回復 讀谷山王子

2306  
全上

來簡令披見外、當春從 公方様御着致拜領外爲嘉儀、別錄之通被相贈之、令怡悦外、恐々不宣、

朱力年  
寶永三年 八月廿五日

少將吉貴御判

回復 中城王子

2307  
全上

爲年甫之佳慶來札、殊別楮之通被相饋、欣然之至外、猶期後喜之時外、恐々不宣、

朱力年  
寶永三年 八月廿五日

少將吉貴御判

回復 讀谷山王子

2308  
全上

爲年甫之嘉慶芳簡、殊別楮之通被相饋、欣然之至外、猶期後喜之時外、恐々不宣、

吉貴公御譜中

朱力キ  
寶永三年  
八月廿五日

少將吉貴御判

回復 中城王子

全上

英光院仕合付ゐ、爲悔被差越紙面之趣、入念事々、恐々

不宣、

朱力キ  
寶永三年  
八月廿五日

少將吉貴御判

謹上 讀谷山王子

2310

全上

英光院仕合付ゐ、爲悔被差越紙面之趣、入念事々、恐々

不宣、

朱力キ  
寶永三年  
八月廿五日

少將吉貴御判

謹上 中城王子

正文在文庫

家來伊勢兵部儀、明廿八日五半時 御城江可被差出候、

以上、

朱力キ  
寶永三年  
八月廿七日

井上河内守

大久保加賀守

稻葉丹後守

秋元但馬守

土屋相摸守

松平薩摩守殿

2312

繼豊公御譜中

正文在琉球國國司

卯月五日從

讀谷山王子樣尊札拜見仕候、

太守樣御事當春從

公方樣御着被成御拜領外爲御祝儀 鍋三郎樣江御目錄之

通御進上之外付ゐ、江府江遂披露候處、被入念儀被思召

外、此旨宜預洩達外、恐々謹言、

朱力キ  
寶永三年  
八月廿八日

新納市正

久珍判

三司官

2313 全上

卯月五日從

讀谷山王子様尊札拜見仕候、

鍋三郎様は爲年始之御祝儀、御目錄之通御進上外段、江

府に遂披露外處、被入念儀被 思召外、此旨宜預洩達外、

恐く謹言、

寶永三年

八月廿八日

新納市正

久珍判

三司官

2314 吉貴公御譜中

伊勢兵部貞榮者世當家之舊臣也、貞榮五代之祖兵部貞昌

以來每繼目奉レ調ニ於

將軍家ニ之先蹤也、以故先レ是吉貴奉レ訴レ之、是歲寶永三

年八月二十七日執政下ニ奉書于吉貴ニ、翌二十八日使下ニ貞

榮ニ登 營上、乃於ニ白書院ニ拜ニ謁于

大樹綱吉公及儲君 家宣公ニ獻ニ上御太刀一腰・銀馬代・

時服ニ領、鳥居播磨守忠救勤ニ奏者ニ、同日登ニ 西之丸ニ

獻ニ納御太刀一腰・銀馬代於 家宣公ニ、堀左京亮直利爲ニ

奏者ニ也、

2315 正文在文庫

明朔日例月之御禮無之外間、不及登 城候、以上、

寶永三年

八月晦日

井上河内守

大久保加賀守

稻葉丹後守

秋元但馬守

土屋相摸守

松平薩摩守殿

2316 吉貴公御譜中

正文在文庫

一筆令啓達外、其表弥御無爲外哉承度存外、隨而領所之

魁ニ二尺令進覽之外、猶期後音之時外、恐く謹言、

朱力本

寶永三年

九月朔日

水戸中納言

綱條判

松平薩摩守殿

人々御中

2317 吉貴公御譜中

正文在文庫

爲重陽之祝儀小袖五到來、歡覺候、委曲井上河内守可述

外也、

朱力キ

寶永三年

九月七日

御印

薩摩少將殿

全上

2318

爲重陽之御祝儀、以使者如目錄被獻之外、首尾好遂披露候、恐く謹言、

朱力キ

寶永三年

九月七日

本多伯耆守  
正永判

小笠原佐渡守  
長重判

松平薩摩守殿

全上

2319

いよく此上萬端御しゆひよく相すミまいらせ外ハ、

御れん中様御満そくニおほしめされ外へくり、此よしよく申入へくりやうことの御事ニ御さ外、めてたくかしく、

御れん中様より申せとの御事ニ御さ外、こん度(吉貞女)満姫様

御事

(近衛家略)

左府様御猶子にあそハされ、後々近衛大納言様ハ御婚禮御とのへあそハし外やうに、左府様より前方仰進られ外所に、其御方様より御願被成り御事御えんりよのわけ御尤ニおほしめし外ゆへ、左府様より傳奏衆まで仰入れ外由

御れん中様にも仰進られ外、さためて其御程にも仰られ外ハんと覺しめし外、めてたくかしく、

朱力キ

寶永三年

鳴津かけゆさま(久世)

鳴津たて刀さま(仲休)

る申給へ

ひて

つほね

吉貴公御譜中

2320

松平薩摩守妹

隠岐守世母(定次)

松平刑部江

右縁組仕度奉願外、以上、

朱力キ

寶永三年

九月廿一日

薩摩守取次

石野八兵衛(範恭)

刑部取次 (正冬)  
中根壹岐守

松平大隅守家久娘ハ  
松平隱岐守定行勝山

妻

家久養女ハ

勝山後妻

勝山嫡子

松平隱岐守定頼娘老

松平薩摩守綱久

妻

綱久嫡子

松平薩摩守綱貴老

定頼嫡 松平隱岐守定長

甥

當薩摩守老  
(吉 貴)

當隱岐守

從弟達

當松平越中守娘老

當薩摩守

妻

2321 吉貴公御譜中

芳札令披見外、

太守様江爲年始之御祝儀練蕉布十端進上之外段、於江戸達 貴聞首尾能相納外、恐々謹言、

朱力キ

寶永三年

九月廿六日

種子嶋藏人

久時判

新納市正

久珍判

嶋津大藏

久明判

幸地親方

2322

全上

貴札致拜見外、去藏

太守様江年甫之御祝儀被仰上外付、御書并御目錄之通被遣之外、御請御紙上之趣到江府達 貴聞外、恐惶謹言、

朱力キ

寶永三年

九月廿六日

種子嶋藏人

久時判

新納市正

久珍判

嶋津大藏

久明判

朱力キ  
寶永三年  
九月

中城王子様

2323

全上

貴札致拜見外、去歲

大守様江年甫之御祝儀被仰上外付、御書并御目錄之通被

遣之外、御請御紙上之趣到江府達 貴聞候、恐惶謹言、

朱力キ

寶永三年 九月廿六日

種子嶋藏人

久時判

新納市正

久珍判

鳴津大藏

久明判

讀谷山王子様

2324

全上

貴札致拜見外、去歲御繼目之御祝儀被仰上外付、從

太守様御書并御目錄之通被遣之外、御請之趣到江府達

貴聞外、恐惶謹言、

朱力キ

寶永三年 九月廿六日

種子嶋藏人

久時判

新納市正

久珍判

鳴津大藏

久明判

讀谷山王子様

2325

全上

貴札致拜見外、去歲 御繼目之御祝儀被仰上外付、從

太守様御書并御目錄之通被遣之外、御請之趣到江府達

貴聞候、恐惶謹言、

朱力キ

寶永三年 九月廿六日

種子嶋藏人

久時判

新納市正

久珍判

鳴津大藏

久明判

中城王子様

2326

全上

貴札致拜見外、去歲御名替之御祝儀被仰上外付、從

太守様御書并御目錄之通被遣之外、御請之趣到江府達

貴聞外、恐惶謹言、

朱力キ

寶永三年 九月廿六日

種子嶋藏人

久時判

新納市正

久珍判

鳴津大藏

久明判

中城王子様



全上

貴札致拜見外、去歲御名替之御祝儀被仰上外付、從  
太守様御書并御目錄之通被遣之外、御請之趣到江府達  
貴聞外、恐惶謹言、

朱力キ  
寶永三年 九月廿六日

種子嶋藏人 久時判

新納市正 久珍判

鳴津大藏 久明判

讀谷山王子様

全上

貴札致拜見外、去歲御任官之御祝儀被 仰上外付、從  
太守様御書并御目錄之通被遣之外、御請御紙上之趣到江  
府達 貴聞外、恐惶謹言、

朱力キ  
寶永三年 九月廿六日

種子嶋藏人 久時判

新納市正 久珍判

鳴津大藏 久明判

讀谷山王子様

全上

貴札致拜見外、去歲御任官之御祝儀被 仰上外付、從  
太守様御書并御目錄之通被遣之外、御請御紙上之趣到江  
府達 貴聞外、恐惶謹言、

朱力キ  
寶永三年 九月廿六日

種子嶋藏人 久時判

新納市正 久珍判

鳴津大藏 久明判

中城王子様

全上

芳札令披見外、  
太守様御看御拜領之爲御祝儀、練蕉布三端・燒酎一壺進  
上之外段、到江府達  
貴聞首尾能相納外、恐々謹言、

朱力キ  
寶永三年 九月廿六日

種子嶋藏人 久時判

新納市正 久珍判

鳴津大藏 久明判

2332

2331

幸地親方

御札致披見外、

全上

太守様御着御拜領之爲御祝儀、官香五把・練蕉布五端・  
燒酎一壺進上之外段、到江府首尾克遂披露外、恐々謹言、

朱力半

寶永三年

九月廿六日

種子嶋藏人

久時判

新納市正

久珍判

鳴津大藏

久明判

越來按司

全上

(近衛家久室)

英光院様御逝去付の御香奠被獻之外、御紙上之趣致承知、

御目錄之通深固院江首尾能相納、被入御念外段、到江府

太守様達 貴載外、恐惶謹言、

朱力半

寶永三年

九月廿六日

種子嶋藏人

久時判

新納市正

久珍判

中城王子様

鳴津大藏

久明判

2333

全上

英光院様御逝去付の、御香奠被獻之外、御紙上之趣致承  
知、御目錄之通深固院江首尾能相納、被入御念外段、到  
江府 太守様達 貴聽外、恐惶謹言、

朱力半

寶永三年

九月廿六日

種子嶋藏人

久時判

新納市正

久珍判

鳴津大藏

久明判

讀谷山王子様

2334

全上

英光院様就御逝去御悔被申上度之由、紙面之趣到江府

太守様達 貴聞外、恐々謹言、

朱力半

寶永三年

九月廿六日

種子嶋藏人

久時判

新納市正

久珍判

2335

幸地親方

鳴津大藏  
久明判

全上

芳札令披見外、

太守様御着御拜領之爲御祝儀、練蕉布三端・燒酎一壺進上之外段、到江戸達 貴聞外、恐々謹言、

朱力キ  
寶永三年  
九月廿六日

種子嶋藏人  
久時判

新納市正  
久珍判

鳴津大藏  
久明判

池城親方

2336

全上

芳札令披見外、

太守様江爲年始之御祝儀、練蕉布十端進上之外段、到江府首尾能達 貴聞外、恐々謹言、

朱力キ  
寶永三年  
九月廿六日

種子嶋藏人  
久時判

2337

池城親方

新納市正  
久珍判  
鳴津大藏  
久明判

全上

英光院様御逝去付御悔被申上度由、紙面之趣到江府太守様達 貴聞外、恐々謹言、

朱力キ  
寶永三年  
九月廿六日

種子嶋藏人  
久時判

新納市正  
久珍判

鳴津大藏  
久明判

池城親方

2338

全上

英光院様御逝去付御悔被申上度由、紙面之趣到江府太守様達 貴聞外、恐々謹言、

朱力キ  
寶永三年  
九月廿六日

種子嶋藏人  
久時判

新納市正  
久珍判

識名親方

鳴津大藏  
久明判

2339

芳札令披見外、

太守様江爲年始之御祝儀、練蕉布十端進上之外段、於江

戸達 貴聞首尾能相納外、恐々謹言、

朱力半

寶永三年

九月廿六日

種子嶋藏人

久時判

新納市正

久珍判

嶋津大藏

久明判

識名親方

2340

全上

芳札令披見外、

太守様御看御拜領之爲御祝儀、練蕉布三端・焼酎一壺進

上之外段、到江府達 貴聞首尾好相納外、恐々謹言、

朱力半

寶永三年

九月廿六日

種子嶋藏人

久時判

新納市正

久珍判

2341

繼豊公御譜中

正文在琉球國識名親方

芳札令披見外、

太守様御看御拜領之爲御祝儀

鍋三郎様江練蕉布三端・焼酎一壺進上之外段、及披露首

尾能相納外、恐々謹言、

朱力半

寶永三年

九月廿六日

種子嶋藏人

久時判

新納市正

久珍判

嶋津大藏

久明判

識名親方

鳴津大藏  
久明判

2342

全上

芳札令披見外、

鍋三郎様江爲年始之御祝儀、練蕉布十端進上之外段、於

江戸達 貴聞首尾能相納外、恐々謹言、

朱力<sup>キ</sup>  
寶永三年 九月廿六日

種子嶋藏人  
久時判

新納市正  
久珍判

島津大藏  
久明判

識名親方

2343 全上

正文在琉球國幸地親方

芳札令披見外、

鍋三郎様は爲年始之御祝儀、練蕉布十端進上之外段、於

江戸達

貴聞首尾能相納外、恐々謹言、

朱力<sup>キ</sup>  
寶永三年 九月廿六日

種子嶋藏人  
久時判

新納市正  
久珍判

鳴津大藏  
久明判

幸地親方

2344 全上

正文在琉球國池城親方

芳札令披見外、

鍋三郎様は爲年始之御祝儀、練蕉布十端進上之外段、到

江府首尾能達

貴聞外、恐々謹言、

朱力<sup>キ</sup>  
寶永三年 九月廿六日

種子嶋藏人  
久時判

新納市正  
久珍判

鳴津大藏  
久明判

池城親方

2345 全上

芳札令披見外、

太守様御肴御拜領之爲御祝儀

鍋三郎様は練蕉布三端・燗酎一壺進上之外段、及披露首

尾能相納外、恐々謹言、

朱力<sup>キ</sup>  
寶永三年 九月廿六日

種子嶋藏人  
久時判

新納市正  
久珍判

2346

池城親方

正文在琉球國幸地親方

芳札令披見外、

太守様御看御拜領之爲御祝儀

鍋三郎様<sup>ニ</sup>練蕉布三端・燒酎一壺進上之外段、到江府達

貴聞外、恐々謹言、

<sup>朱力キ</sup>

寶永三年 九月廿六日

鳴津大藏  
久明判

種子嶋藏人  
久時判

新納市正  
久珍判

鳴津大藏  
久明判

幸地親方

2347

全上

正文在琉球國越來按司

御札致披見外、

太守様御看御拜領之爲御祝儀

鍋三郎様<sup>ニ</sup>官香五把・練蕉布五端・燒酎一壺進上之外段、

首尾能達 貴聽外、恐々謹言、

<sup>朱力キ</sup>

寶永三年 九月廿六日

種子嶋藏人  
久時判

新納市正  
久珍判

鳴津大藏  
久明判

越來按司

2348

吉貴公御譜中

正文在文庫

御用之儀外間、明四日四時可有登 城候、以上、

<sup>朱力キ</sup>

寶永三年 十月三日

井上河内守

大久保加賀守

稻葉丹後守

秋元但馬守

土屋相摸守

松平薩摩守殿

2349

吉貴公御譜中

寶永三年九月二十一日以妹於菟姫配<sup>ニ</sup>偶于豫州松山城主

松平隱岐守定直之嫡男松平刑部定英<sup>一稟</sup>三子

將軍家一也、同年十月四日吉貴受三奉書二登二 玉城一、元老各列座、秋元但馬守喬朝傳二 台命二曰、所三如レ願許二 婚嫁二也、乃禮謝而出三於營一、

## 正文在文庫

かすく御めてたく思しめしり、なをく御念入ま  
いらせられり御ふみのやう、何も御まんそくの御事  
と御さり、此よしよく心えりて申せとの御事ニ御さ  
りまゝ、何もよろしく御申入りへくり、めてかしく、  
薩摩守様より御ふみ被下り、まつく

御二御所様御機嫌よくならせられりまゝ、御心やすく思  
しめしりやうに御申入りへくり、さては  
さつまの守様御妹子様御縁組御ねかひあそはしり所ニ、  
今日首尾よく 仰出せられ、かたしけなく思しめしりよ  
し、誠にめてたさ幾萬々年といわる思しめしり、  
さつまの守様も御機嫌よくならせられり御事、めてか  
しく、

朱力半

寶永三年十月四日

鳴津勘解由殿

ひて

同 帶 刀殿 御返事 つほね  
なをく御念入まいらせられり御ふみのやう、何も  
ひろういたしまいらせり御事ニ御さり、よく心えま  
いらせりて申せとの事ニ御さりまゝ、何もよろしく  
御申あけりへくり、めてかしく、

さつまの守様より御ふみ下されり、まつく  
御二御所様御機嫌よくならせられりまゝ、御心やすく思  
しめしりやうに御申入りへくり、さては 薩摩守様 御  
妹子様御縁組御ねかひあそはしり所ニ、今日首尾よく仰  
出せられり御事、かたしけなく思しめしりとの御事ニ  
て、御ふみのやうひろういたしまいらせり、誠にめてた  
さ幾まん々年といわる入奉りりへくり、めてかしく、

朱力半

寶永三年十月四日

鳴津勘解由殿

梅小路

同 帶 刀殿

御返事

松むら

吉貴公御譜中

正文在文庫

全上

さつまの守様も御機嫌よく御座なされり御事、かすく御めてたくそんしまいらせり、なをく御念入まいらせられり御ふみのやう、何もよく心えまいらせりて申せとの御事ニ御さりまゝ、此よしよろしく御申上りへくり、かしく、

薩摩守様より御ふみ下されり、まつく

御二御所様御機嫌よくならせられりまゝ、御心やすく思しめさせられりやうニ御申上りへくり、さてはきのふ御簾中様

さつまの守様御妹子様御縁組、首尾よく相濟まいらせられり、めてたさ迄ニ さつまの守様 奥様へ御もくろくの通進しられりへ者、かたしけなく思しめしりとの御事にて、御ふみのやうひろういたしまいらせり、誠にめてたさ萬々年といわる思しめしり、めてかしく、

朱カキ 寶永三年十月六日

嶋津勘解由殿 梅小路  
同 帶 刀殿 御返事 松むら

さつまの守様も御機嫌よく御座なされ、かすく御めてたく存奉りまいらせり、なをく御念入まいらせられり御事、何も御まんそくに思しめしり通、よく申せとの御事ニ御さりまゝ、何もよろしく御申上りへくり、かしく、

さつまの守様より御ふみ被下り、まつく

御ふた御所様御機嫌よくならせられりまゝ、御心安思しめさせられりやうニ御申上りへくり、さてはきのふ御簾中様より 薩摩守様 奥様へ御妹子様御縁組、首尾よく相濟まいらせられり、御しうき、御もく録之通まいらせられりへ者、かたしけなく思しめしりとの御事にて、御ふみのやうひろういたしまいらせり、誠にめてたさ萬々年といわる思しめしり、めてかしく、

朱カキ 寶永三年十月六日

嶋津勘解由殿 ひて  
同 帶 刀殿 御返事 つほね

全上

さつま守様御満そくに覺しめしりハんとめてたくお



ほしめし外、幾まんく年も御はんしやうの御事外  
て覺しめし外、御末々のめてたさかきりあらずとい  
わる入せられ、此御もくろくの通 さつま守様へ  
御簾中様より被給、めてたさよろしく御ひろう被成  
へくり、めてたくかしく、

御簾中様より申せと仰られ外、まつく

御ふた御所様弥御機嫌よく成らせられ外、御心やす  
くおほしめさせられ外様ニ御申上外へくり、  
薩摩守様にも弥御機嫌よくならせられ外、きかせられ  
度覺しめし外、さやうニ御さ外へハ さつま守様御妹子  
さま御ゑん組、御しゆひよく 松平刑部様へ  
仰出させられ外御事、數くめてたく思召外、めてたく  
かしく、

朱カキ  
寶永三年十月六日

鳴津勘解由さま ひと  
鳴津帯刀さま つほね  
人々

全上

御事にて、御ふみのやうひろういたしまいらせ外へ

ハ、御念入まいらせられ外御事ニ思しめし外、此よし  
よく心えまいらせ外て申せとの御事ニ御さ外ま、  
何もよろしく御申上外へくり、めてかしく、

さつまの守様より御ふみ下され外、まつく

御ふた御所様御機嫌よくならせられ外、御心やすく  
思しめし外やうニ御申入外へくり、

薩摩守様にも御機嫌よく御さなされ外御事、數く御め  
てたくそんしまいらせ外、さては ゑいかう院様御一め  
くりニ付

御簾中様より御見廻仰られ外御事迄ニ、御もく録之通

(元久藩守)  
やう和院様 信證院様こまいらせられ外へ者、

さつまの守様かたしけなく思しめし外との、めてかし  
く、

朱カキ  
寶永三年十月六日

鳴津勘解由殿 ひと  
同 帯 刀殿 つほね  
御返事

御事にて、御ふみのやうひろういたしまいらせ外、御

念入まいらせられ外御事ニそんしまいらせ外、何も

2357

よく心えまいらせりて申せとの御事ニ御さりまゝ、  
此よしよろしく御申入まいらせり、めてかしく、

薩摩守様より御ふみ下されり、まつく

御二御所様御機嫌よくならせられりまゝ、御心やすく思  
しめしりやうに御申入りへくり、

さつまの守様にも御機嫌よく御座なされ、かすく御め  
てたくそんしまいらせり、さては 英光院様御一めぐり

に付、御簾中様より御見廻仰られり御事までニ やう和  
院様 信證院様へ、御もくろくの通まいらせられりへ考、

さつまの守様かたしけなく思しめしりとの、めてかし  
く、

朱カキ  
寶永三年十月六日

鳴津勘解由殿

梅小路

同 帶 刀殿

松むら

御返事

吉貴公御譜中

正文在文庫

芳翰披覽、如來教先頃地震此邊少く之儀無事り、懇情之  
至今滿悦り、謹言、

2358

朱カキ  
寶永三年 仲冬初九

薩摩少將殿

繼豊公御譜中

正文在琉球國中城王子

貴札致拜見り、

太守様舊冬御繼目之爲御祝儀

鍋三郎様は御太刀、目錄之通御進上り段、於江戸可達

貴聞り、恐惶謹言、

朱カキ  
寶永三年 十月十日

中城王子様

新納市正

久珍判

2359

全上

貴札致拜見り、

太守様舊臘御任官之爲御祝儀

鍋三郎様は御太刀、目錄之通御進上り段、於江戸可達

貴聞り、恐惶謹言、

朱カキ  
寶永三年 十月十日

中城王子様

新納市正

久珍判

(近衛家久)  
(花押)  
No.10

全上

貴札致拜見外、

太守様舊冬御名替之爲御祝儀

鍋三郎様江御太刀、目錄之通御進上候段、於江戸可達

貴聞外、恐惶謹言、

朱力半

寶永三年 十月十日

新納市正

久珍判

中城王子様

吉貴公御譜中

芳翰令披見外、去冬首尾能繼目被 仰出外、爲祝儀使者

越來按司被差渡、殊御太刀・馬代并目錄之通贈給之、入

念外段令祝着外、恐惶不宣、

朱力半

寶永三年 十月十六日

少將吉貴御判

謹上 琉球國司

吉貴公御譜中

正文在文庫

就令着城外預御札、過當之至存外、其表愈御無爲之旨、

珍重之事外、恐々謹言、

朱力半

寶永三年 十月廿五日

水戸中納言

綱條判

松平薩摩守殿

御報

吉貴公御譜中

正文在文庫

今度其方妹、松平刑部江嫁娶之事被蒙嚴命之由、珍重思

給外、仍呈嘉札外、謹言、

朱力半

寶永三年 上冬廿五

(近衛家配)

(花押 No4)

薩摩少將殿

全上

今度其方妹、松平隱岐守嗣主江嫁縁之事被蒙嚴命之由、

目出思給外、仍呈嘉札外、謹言、

朱力半

寶永三年 初冬廿五

(花押 No10)

薩摩少將殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

重陽之御内書可相渡外間、明日五半時 御城に家來可被差出外、以上、

朱力年 寶永三年 十月廿六日 井上河内守

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

頃日其方妹松平刑部方に縁邊之事被蒙鴻命之由、玆重思給外、仍呈嘉札外、謹言、

朱力年 寶永三年 仲冬廿五鳥 (近衛基勝) (花押 No.3)

薩摩少將殿

吉貴公御譜中

口上覺

私娘近衛左大臣殿養娘に被成、因大納言殿一所に御座外(家久)様ことの御願、傳奏衆を以私平紀伊守殿に被仰込外由、御沙汰に外、右之通取組外ハ、其分け可申事外得共、未何様共御聞不被成外、弥取組申答外哉、委細可被聞召

旨、家來被召寄被仰聞外趣、承知仕外、私養娘近衛大納

言殿に先年縁組被 仰付、去年夏婚禮相調申外處、同年冬相果申外、其後從左大臣殿私到國元内、こゝ被仰越外

者、私先祖以來由緒及有之事外間、引續私娘に被成、又

く大納言殿一所に被成度由に付、養娘相果間及無之外處、引續又く其取組仕外儀旁遠慮多存外間、私外者御願申上

間敷旨申達外得者、自分達慮外段者尤思召外、左外ハ、

菟角從近衛殿御願可被成由、内々こゝる者傳承外得共、未極る被仰越外儀無御座外、究る被仰越候ハ、尤得御内意、

何れ之筋に及御差圖次第可仕と存罷在外、以上、

朱力年 寶永三年 十一月 松平薩摩守

2365

吉貴公御譜中

正文在文庫

よろしく披露致まいらせ外得者、めてたく御満そくに覺しめさせられ外よし、よくく申せとの御事にて御さ外、此よし御申上外へく外、さつま守様もいよく御機嫌よく御座外哉、一入めてたく覺しめさせられ外、右の通よろしく御申上外へく外、めてたくかしく、

さつま守様より御ふミ下されり、

御簾中様いよいよ御機嫌よく成らせられめて度思しめさせられりよし、さやうに御座り得者

近衛左大臣様より さつま守様御姫様御猶子に被遊、御ゆく〜ハ

近衛大納言様へ御婚禮あそはし度覺しめさせられり、京都において御奏衆へその段仰入させられ さつま守様へも

左大臣様より仰被進りよし、それこ付こん日井上河内守殿へ御ねかいあそはしり由、御ふミの趣則、めてたくかしく、

朱力キ  
寶永三年

嶋津勘解由殿

ひて

嶋津帯 刀殿

つほね

御返事

全御譜中

正文在文庫

御用之儀外之間、明廿九日四時可有登 城外、以上、

朱力キ  
寶永三年

十一月廿八日

井上河内守

大久保加賀守

稻葉丹後守

秋元但馬守

土屋相摸守

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

寶永三年丙戌十一月二十八日吉貴受奉書登レ營、執政土

屋政直・秋元喬朝・稻葉正通・大久保忠増・井上正岑各列

座而述ニ 台命一曰、應ニ 近衛左大臣家熙公之願ニ許下

愛子滿姫於爲ニ 家熙公之養女ニ備ニ儲嗣 家久公之好

逵也、因吉貴奉レ禮ニ謝之、乃出レ營、

全御譜中

正文在文庫

仰出させられり御事、幾まん〜年と御めてたくそ

んしまいらせり、さつまの守様いよ〜御機嫌よく

御座被成、御めてたく存まいらせり、めてたくかし

く、

薩摩守様方御ふミ被下り、御ひえ〜敷御さりか、まつ

2372

く  
御ふた御所様弥機嫌よく成らせられ、めて度覺しめさせられよし、さてはこん日 さつまの守様御本丸へ御登城の御事にて 御姫様御事 近衛左大臣様御願ニ付 近衛大納言様へ御縁組御首尾能 仰出させられり由、御ふみの趣披露申上りへくり、ま事ニ御するくと御しゆひよく、めてたくかしく、

朱カキ(ママ)  
寶永八年

嶋津勘解由殿

梅小路

同 帶 刀殿

まつ村

御返事

なをく御しうき御もくろくの通進上被成、めてたく幾萬々年もかきりあらぬ御悦事のミといわる思しめしり、此よしよく心えまいらせりて申せとの御事ニ御さひま、何もよろしく御申入りへくり、かし

さつまの守様より御ふみ下されり、此度 御姫様御事 近衛大納言様へ御縁組首尾よく相濟まいらせられり、めてたさと御座りて 御簾中様へ御もくろくの通進上被

2373

成、則ひろういたしまいらせりへハ、めてたく思しめしり、ことのほかひえくしく御座りへとも 御二御所様御機嫌よくならせられりま、御心易思しめしりやうに御申入りへくり、 さつまの守様御機嫌よく御座被成、かすく御めてたくそんしまいらせり、めてかしく、

朱カキ  
寶永三年

嶋津勘解由殿

ひて

同 帶 刀殿

つほね

御返事

何もくしゆひよく御さひ御事

此御前様にて大かたならず御悦被遊り、めて度御まん足ニ思しめしり、誠ニ幾まんく年御機嫌共よくならせられ思しめさせられり御ま、御はんしやう御長久被遊御悦事のミと祝いらせられり御事にて 御さひ、なをく御姫様御事 近衛大納言様は御ゑんくミ御しゆひよく仰出し御さひ御事、めて度さ仰つくし御まん足ニ思しめしり、なをく御ふみのやう御ねん入まいらせり御事、御まん足ニ思しめしり、

よく心えりて申せとの御事にて御さり、此よしよろしく御申入りへくり、めてかしく、

さつまの守様より御ふみ下されり、ことの外ひえまいらせりへ共、いよく

此御ふた御所様御機嫌よくならせられりまゝ、御心やすく覺しめしりやうに御申入りへくり、

さつまの守様御ふた所様御機嫌よく御座被成り御事、めて度思しめしり、さてはこん日 御姫様御事

近衛左大臣様御ねかい被遊り御通こしゆひよく仰出し御座りて、

さつまの守様かたしけなく思しめしりとの御事にて、御ふみの趣則ひろういたしまいらせりへハ、御まん足に覺しめしり、めてたくかしく、

朱力キ  
寶永三年

嶋津勘解由殿

ひて

同 帶 刀殿

つほね

御返事

2374  
全上

なをく御祝義御目錄之通進上被成、めてたさ幾久

しく萬く年もといわる入奉りまいらせり、此よしよく心えまいらせりて申せとの御事にて御座りまゝ、何もよろしく御申入りへくり、かしく、

薩摩守様より御ふみ下されり、此度 御姫様 近衛大納

言様へ御縁組御首尾よく相濟まいらせられ、めてたく思しめしりとの御事にて

大納言様へ御目錄之通進せられ、則ひろういたしまいらせり、まつくことのほかひえくしく御座りへ共

御二御所様御機嫌よくならせられりまゝ、御心やすく思しめしりやうに御申入りへくり、 薩摩守様御機嫌よく

御さなされり御事、かすく御めてたくそんしまいらせり、めてかしく、

朱力キ  
寶永三年

嶋津勘解由殿

梅小路

同 帶 刀殿

松むら

御返事

2375  
全上

思しめしりとの御事にて、御禮御ふみのやう御念入まいらせり御事、かすく御めてたく思しめしり、

誠に幾萬く年もかきりあらぬ御めてたさのミとい  
わる入奉りまいらせり、此よしよく心えまいらせり  
て申せとの御事ニ御さけまゝ、何もよろしく御申入  
りへくり、かしく、

さつまの守様より御ふミ被下り、ことのほかひえくしく  
御座りへとも

御ふた御所様御機嫌よくならせられりまゝ、御心やすく  
思しめしり様ニ御申入りへくり、さつまの守様いよく  
御機嫌よく御座なされ、御めてたく存まいらせり、さて  
は此度 御姫様御事

近衛大納言様へ御縁くミ 仰出されり、御めてたさまで  
こ 御簾中様より さつまの守様 おく様へ御もくろく  
の通進せられりへ者、かたしけなく、めてかしく、

朱カキ  
寶永三年

鳴津勘解由殿

梅小路

同 帶 刀殿

御返事

松むら

全上

御事にて、御禮御ふみのやう御念入まいらせり御事

と、かすくめてたく御まんそくニ思しめしり、誠  
ニ幾久しく萬く年御機嫌よく御長久御はんしやう  
被遊、めてたさのミといわる思しめしり通、よく心  
えまいらせりて申せとの御事ニ御さけまゝ、何もよ  
ろしく御申入りへくり、めてかしく、

薩摩守様より御ふミ下されり、ことのほかひえくしく  
御座りへ共

御二御所様御機嫌よくならせられりまゝ、御心易思しめ  
しりやうニ御申入りへくり、

さつまの守様いよく御機嫌よく御座なされ、御めて度  
そんなまいらせり、さては此度 御姫様御事

近衛大納言様へ御縁組仰出されり御めてたさ迄こ、  
御簾中様

さつまの守様 おく様へ御もくろくの通進せられりへ  
者、かたしけなく思しめしりとの、めてかしく、

朱カキ  
寶永三年

鳴津勘解由殿

ひて

同 帶 刀殿

御返事

つほね



吉貴公御譜中

正文在文庫

追申陽和院殿傳筆被達被下由、辱存外、何委首尾  
 克相濟御大慶之由、御尤存外、御内存之段兼、承置  
 外段、且暮如何と存外處、如此結構成被仰出外様達  
 御本望、誠以於下官大慶難述筆舌外、

去月十八日之愚書相達、御返翰、殊以 貴様御息女左大  
 臣殿依御願此度爲御猶子左大將殿御縁組之事、廿九日於  
 營中老中列座被仰付之旨被申渡外、貴様御願委不被仰上  
 之處、右之次第外聞實儀難有思食外段、御尤千萬千秋萬  
 歲御大慶令推察外、則此趣御兩公に達御聽外、同前御滿  
 悦之事外、猶又宜様可申進之旨仰候、恐惶謹言、

朱力キ  
寶永三年

十二月七日

平松中納言

時方

松平薩摩守殿

御再答

吉貴公御譜中

正文在文庫

如來書何方委無恙、珍重此事外、然老内く所願之義、首  
 尾好於關東其邊委被蒙鴻命外之事、誠以欣幸之至、千秋

萬歲同悦外、早速被示聞丁寧之趣外、謹言、

朱力キ

寶永三年

季冬七鳥

(花押 No.3)

薩摩少將殿

芳簡落掌、先以勇健之由、珍重思給外、此邊無恙候、然  
 老内く所願之儀、首尾好於關東其邊委被蒙 鴻命外之事、  
 誠以欣幸之至、千秋萬歲同悦外、早速被示聞丁寧之趣外、  
 謹言、

朱力キ

寶永三年

季冬七鳥

(花押 No.4)

薩摩少將殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

尚く御悦ニ御さけて、御ふみのやう申上まいらせ外  
 へくり、さつま守様もいよく御機嫌よく御座  
 被成、御めてたく存まいらせ外、かしく、

薩摩守様より御ふみ下され外、まつく御機嫌よく 公  
 方様 大納言様弥御機嫌よくならせられ 御簾中様も御  
 機嫌よくならせられ外、御心やすくおほしめさせら

2381

れり様ニ御申上りへくり、さては上方にて 近衛大納言  
様御事從二位に敍せられ、めてたくおほしめさせられり  
よし、御ふみの趣よろしく申上まいらせ給へくり、ま事  
ニ御機嫌能幾萬々年と御めてたく存まいらせり、めてた  
くかしく、

朱カキ  
寶永三年

鳴津勘解由殿

梅小路

同 帶 刀殿

まつ村

御返事

全上

尚く御悦と御さりて、御ふみのやう御満そく思し  
めさせられりまゝ、此よし御申上りへくり、めてた  
くかしく、

さつまの守様より御ふみ下されり、まつく 御ふた御  
所様いよく御機嫌よく成らせられ、めてたくおほしめ  
させられりよし、さては 近衛大納言様御事從二位に敍  
せられ、めてたく覺しめさせられりよし、御ふみの趣よ  
ろしくひろう申あけりへハ、御満そくの事ニ御さり、幾  
萬々年御機嫌能御はんしやうの御事にていわる入せられ

2382

り、 さつま守様も弥御機嫌よく御座被成、めてたく  
おほしめさせられり、此よし御申上りへくり、めてか  
く、

朱カキ  
寶永三年

鳴津勘解由殿

ひて

鳴津帶 刀殿

つほね

御返事

全上

さつまの守様いよく御機嫌よくならせられり御  
事、めてたくそんしたてまつりり、此よしよく心え  
まいらせりて申せとの御事ニ御さりまゝ、何もよろ  
しく御申上りへくり、かしく、

薩摩守様より御ふみ下されり、ことのほかひえくしく  
御座りへ共

御二御所様御機嫌よくならせられりまゝ、御心易思しめ  
させられりやうニ御申上りへくり、さては、  
近衛大納言様左大將ニ此度  
收許被遊り御事、めてたく思しめしりとの御事にて、御  
ふみのやうひろういたしまらせり、誠こめてたさ萬

く年といわる入奉まいらせり、めてかしく、

朱カキ  
寶永三年

嶋津勘解由殿

ひて

同 帶 刀殿

つほね

御返事

2383 吉貴公御譜中

正文在文庫

蜜柑二箱并御肴一種被獻之候、首尾好遂披露り、恐々謹

言、

朱カキ  
寶永三年

十二月廿三日

忠増判

松平薩摩守殿

大久保加賀守  
忠増

2384 蜜柑二箱并御肴一種被獻之候、首尾好遂披露り、恐々謹

言、

朱カキ  
寶永三年

十二月廿三日

正永判

松平薩摩守殿

本多伯耆守  
正永

2385

吉貴公御譜中

正文在文庫

則ひろういたしまいらせりへ考、幾萬く年もめて  
たく思しめしりとをり、よく心えまいらせりて申せ  
との御事ニ御さりま、何も宜御申上へくり、かし

く、

さつまの守様より御ふみ被下り、まつく御二御所様御  
機嫌よくならせられりま、御心やすく思しめしりやう  
に御申入りへくり、さつまの守様いよく御機嫌よく  
御座被成り御事、御めてたく存まいらせり、さてはさき  
ほと

御簾中様より御使堀源さ衛もんこて さつまの守様御お  
く様へ、御歳暮の御しうき御もくろくの通まいらせられ  
りへ考、かたしけなく思しめしりとの御事にて御禮御ふ  
みのやう、めてかしく、

朱カキ  
寶永三年十二月

嶋津勘解由殿

ひて

同 帶 刀殿

つほね

御返事

2386

吉貴公御譜中  
正文在文庫

爲歲暮之御祝儀、以使者如目錄被獻之、首尾好遂披露候、恐、謹言、

朱力キ  
寶永三年 十二月廿九日

本多伯耆守  
正永判  
小笠原佐渡守  
長重判

松平薩摩守殿

2387

全上

爲歲暮之祝儀、小袖五重到來、歡覺候、委曲大久保加賀守可述也、

朱力キ  
寶永三年 十二月廿九日

綱吉  
公印

薩摩少將殿

2388

吉貴公御譜中  
正文在文庫

改年之御慶珍重、仍昨日老御出、欣然之至存、猶期後喜之節、恐、謹言、

朱力キ  
寶永四年 正月十三日

吉通判

薩摩少將殿  
御宿所  
尾張中納言  
吉通

2389

吉貴公御譜中  
正文在文庫

爲改年佳義、芳緘并目錄之通被贈與、每節懇篤之趣祝着不少、其邊弥無恙越年之由欣然、事、期永春不能多毫也、

朱力キ  
寶永四年 初陽念六

(花押 No.4)

松平薩摩守殿

2390

全上

被伸改年之賀慶芳牒令手裏、弥其邊無吳越年之由承、悦此事、當地如常、仍目錄之通惠來、連年懇情之趣多謝、猶期永日不具也、

朱力キ  
寶永四年 孟春念六

(花押 No.3)

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

被伸年甫之慶事芳簡落手、愈無恙越年之由、玆重思給外、此地同然外、仍如目錄惠賜、幾久令悅納外、尚期永春外、

謹言、

朱力キ

寶永四年 青陽廿一

薩摩少將殿

(花押 No.10)

吉貴公御譜中

正文在文庫

口上

去々年御願申上候通、頼朝公御供料無御座外ニ付御志迄ニ奉願外、今度法花堂本尊・白幡明神御修覆出來之上宮殿入佛供養勤仕之節、願之通被爲 仰付外様ニ、薩摩守様ニ御序之節、此等之趣宜被仰上可被下外、奉願候、以上、

全上

改年之嘉義、雖事舊外啓一翰外、滋可爲康強、目出度思給外、此邊無恙外、仍御太刀一腰・馬一疋并調合之薰物二香合贈之外、餘事屬使者口上、謹言、

朱力キ

寶永四年 仲春十八日

薩摩少將殿

(花押 No.3)

吉貴公御譜中

正文在文庫

陽春之吉兆、雖事舊外啓一翰外、愈可爲平安外、此邊無恙外、仍御太刀一腰・馬一疋并調合之保之二香合贈之外、尚屬口上外、謹言、

朱力キ

寶永四年 如月十八

薩摩少將殿

(花押 No.4)

全上

春首之賀儀、雖事舊外呈一簡外、愈可爲安穩外、此表無吳變外、仍御太刀一腰・御馬一疋贈之外、尚屬口上外、

謹言、

二月日

松平薩摩守様

御家老中

鎌倉

相承院

宋カキ  
寶永四年  
令月十八

(花押  
No.10)

薩摩少將殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく さつまの守様にも御機嫌よく御座被成り

御事、かすく御めてたくそんしまいらせり、此

よしよく心えまいらせりて申せとの御事ニ御座りま

ゝ、何もよろしく御申上りへくり、めてかしく、

御ふみのやうまつく

御ふた御所様御機嫌よくならせられりまゝ、御心やすく

思しめしりやうに御申入りへくり、扱は

近衛前關白様御道中御機嫌よく御下向あそはされ、御久

ゝにて御たいめん被遊、かすく御まん足の御事にて御

座り、御念入らせられ御悦仰あけられり御ふみのやう、

ひろういたしまいらせり、なを幾久しく萬々年とめてた

く思しめしり、めてかしく、

嶋津勘解由殿

梅小路

同 帶 刀殿

松むら

御返事

6

2397  
全上

なをく さつまの守様にも御機嫌よく御座被成り

御事、かすく御めてたくそんしまいらせり、此よ

しよく心えまいらせりて申せとの御事ニ御座りま

ゝ、何もよろしく御申上りへくり、めてかしく、

御ふみのやうまつく

御ふた御所様御機嫌よくならせられりまゝ、御心やすく

思し召りやうに御申入りへくり、さては

近衛前關白様御道中御機嫌よく御下向被遊、御久ゝにて

御たいめん被遊、かすく御まん足の御事にて御座り、

御念入らせられ御悦仰上られり御ふみのやう披露いたし

まいらせり、なを幾久しく萬々年とめてたく思しめしり、

めてかしく、

宋カキ  
寶永四年

嶋津勘解由殿

ひて

同 帶 刀殿

つほね

御返事

6

2398

吉貴公御譜中

正文在文庫

歲暮之 御内書可相渡候間、明日五半時 御城江家來可  
被差出外、以上、

朱力キ  
寶永四年  
二月廿五日

秋元但馬守

松平薩摩守殿

2399

吉貴公御譜中  
寫正文在文庫

寫

(秋元齋朗)

此御書付秋但馬守殿御渡し外間、寫シ懸御目外、向寄之  
御方に御通達可被成外、今晚遅ク被遣外間及夜陰外、廻  
狀、留り方明晝迄之内、備中守宅に御返可被成外、以上、

朱力キ  
寶永四年  
二月廿七日

(忠 覺)  
松平石見守

2400

吉貴公御譜中  
寫正文在文庫

寫

天真院殿逝去付ぬ、今日方明後廿九日迄鳴物停止ニ外間、  
其段可被相觸外、普請老御構無之外、

(由 悠)  
横田備中守

朱力キ  
寶永四年  
二月廿七日

折井淡路守 (正 辰)

安藤筑後守 (重 玄)

仙石丹波守 (久 尚)

(吉 貴)  
松平薩摩守様

松平庄五郎様 (秀 延)

丹羽左京大夫様 (政 明)

仙石越前守様奉 (長 清)

黒田伊勢守様奉

2401

吉貴公御譜中  
正文在文庫

朔日例月之御禮無之候間、不及登 城外、以上、

朱力キ  
寶永四年  
二月晦日

井上河内守

大久保加賀守

稻葉丹後守

秋元但馬守

松平薩摩守殿

2402

吉貴公御譜中  
正文在文庫

誠ニ幾久しく萬々年と御めてたくそんしまいらせ  
外、さつまの守様ニも御機嫌よく御さなされ、御め  
てたく存まいらせり、なをく御悦仰上させられり  
御ふみのやう、御念入まいらせられり御事ニそんし  
まいらせり、此よしよく心えまいらせりて申せとの  
御事ニ御さりまゝ、何もよろしく御申入りへくり、  
めてかしく、

薩摩守様より御ふみ下されり、まつく

大納言様 御簾中様御機嫌よくならせられりまゝ、御心  
やすく思しめしり様ニ御申入りへくり、さては

近衛前關白様御事、御機嫌よく御下向被遊、三月七日

此御所様へ入らせられ

御ふた御所様御久々にて御對面被遊、めてたさ御まん足  
の御事にて御座り、九日ニも御能御座りて入らせられり  
御事、めてたく思しめしりとの御事にて、御ふみのやう  
則ひろういたしまいらせりへハ、めてたく思しめしり、  
めてかしく、

鳴津勘解由殿

同 帯 刀殿

御返事

梅小路

（松志）  
むむら

あ

2403

全上

誠ニ幾久しくまんく年と御めてたくそんしまいら  
せり、さつまの守様ニも御機嫌よく御座なされ、め  
てたく存まいらせり、なをく御念入まいらせられり  
御事御まんそくに思しめしり通、よく心えりてま  
いらせりて申せとの御事ニ御さりまゝ、何もよろし  
く御申入りへくり、めてかしく、

さつまの守様より御ふみ被下り、まつく

大納言様 御簾中様御機嫌よくならせられりまゝ、御心  
やすく思しめしり様ニ御申入りへくり、さては

近衛前關白様御事御機嫌よく御下向被遊、三月七日 此

御所様へ入らせられ

御ふた御所様御久々にて御對面被遊、めてたさ御まん  
足の御事にて御座り、九日ニも御能御座りて入らせられり  
御事、めてたく思しめしりとの御事にて、御ふみのや  
う則ひろういたしまいらせりへハ、めてたく覺しめしり、  
めてかしく、

鳴津勘解由殿

同 帯 刀殿

御返事

ひて

つほね

あ



全上

いよ／＼御機嫌よくならせられりまゝ、御心やすく  
おほしめさせられり様ニ御申上られり、さつま守様  
こもいよ／＼御機嫌よく御座被成、御めてたく存ま  
いらせり、めてかしく、

薩摩守様より御ふみ下されり、まつ／＼

御二御所様いよ／＼御機嫌よく成らせられり、めてたく  
おほしめさせられりよし、さては

前關白様こゝもとに御逗留の中、はまの御殿へならせら  
れ、廿一日には御いとま乞ニ 西之御丸へならせられり  
御事、御めてたくおほしめさせられりよしにて、御悦仰  
進せられり御ふみの通、よろしく御ひろういたしまいら  
せられり、めてたくかしく、

鳴津 勘解由殿 ひと  
鳴津 帯 刀殿 つほね  
御返事

全上

尚／＼御ねいらせられり御ふみの趣、そのうへ前  
くわん白様御ほつかの御悦仰上させられ、御もくろ

くの通色々御進上あそハし、めてたく御満そくの御

事ニ御座り、誠ニ幾萬々年も御はんしやう共にて御  
悦のミと祝入らせられり通、よろしく御申上られり、  
此よし心えりて申せとの事ニ御さり、めてかしく、

さつま守様より御ふみ下されり、まつ／＼

御二御所様いよ／＼御機嫌よく成らせられり（ふまひ）、御心や

すくおほしめさせられり様ニ御申上りへく、  
さつま守様こもいよ／＼御機嫌よく御座被成り御事きか  
せられ、めてたく思しめしり、さては

前關白様三月廿三日ニ御機嫌よく江戸御發駕の御事、め  
てたく覺しめさせられりとの御事にて、右の御祝と御座  
りて 御簾中様へ御もくろくの通御進上遊ハしり、披露  
致まいらせりへハ、めてたさ幾萬年といわ入せられり  
て御満そくニ覺しめしり、めてかしく、

朱力キ 寶永四年  
鳴津 勘解由殿 ひと  
鳴津 帯 刀殿 つほね  
御返事

吉貴公御譜中  
正文在文庫

正文在文庫

尚く御きたう仰付られ、御札守御もくろくの通進  
上あそハし、ひろういたしまいらせりて、めてたく  
思しめさせられり半とそんしまいらせり、ま事ニ、  
幾萬々年御はんしやうにて御めてたさのミといわる  
入奉まいらせり、めてかしく、

さつまの守様より御ふミ下されり、まつく  
御ふた御所様いよく御機嫌よく成らせられ、めて度覺  
しめさせられりよし、御尤ニ存まいらせり、さやうニ御  
座外へ考、此度の御吉事ニ付御きたう 仰付られ、御守  
御札并御目錄の通御進上あそハしり、そのよし御披露い  
たしまいらせられり、御機嫌よくならせられりまゝ、御  
心やすく思しめしり様ニ御申上給り、めてたくかしく、

朱力キ  
寶永四年三月廿七日

しまつ勘解由殿 梅小路  
同 帶 刀殿 まつ村  
御返事

かすく御めてたくそんしたてまつりり、なをく  
御念入まいらせられ御機嫌うかゝいまいらせられ、  
御もくろくの通進上なされ、かすく御まんそくの  
御事にて御座り、此よしく心えまいらせりて申せ  
との御事ニ御さりまゝ、何もよろしく御申あけりへ  
くり、めてかしく、

さつまの守様より文下されり、  
御簾中様御機嫌御うかゝひと御座りて、此御目錄のとを  
り進上被成、ひろういたしまいらせりへ考めてたく御ま  
ん足ニ思しめしり、先度は 若子様御出生あそハしりめ  
てたさ迄ニ、御目錄之通まいらせられりへ考、かたしけ  
なく思しめしりとの御事にて、御念入らせられり御禮、  
何もひろういたしまいらせり御事ニ御座り、誠ニ幾久し  
く萬々年とめてたく思しめしり、頃は打つゝき膝々し  
き御天氣相にて、時ならずひえまいらせりへとも、いよ  
く  
御二御所様御機嫌よくならせられりまゝ、御心やすく思  
しめしりやうニ御申入りへくり、  
さつまの守様にも御機嫌よく御座なされり事、めてかし

朱力キ  
寶永四年四月朔日

嶋津勘解由殿

同 帶 刀殿

御返事

ひて

つほね

b

吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく御念入まいらせられ御事、何も御まん足  
ニ思しめしり通、よく心えまいらせりて申せとの御  
事ニ御座りまゝ、此よしよろしく御申入りへくり、  
めてかしく、

薩摩守様より文下されり、まつく

御ふた御所様御機嫌能ならせられりまゝ、御心やすく思  
しめしりやうニ御申入りへくり、さては此度の御吉事ニ  
付、猶々御安産のやうことの御事にて、御手前御祈禱所  
にて御祈禱仰付られ、御札并ニ御目錄之通進上被成、何  
もひろういたしまいらせり御事ニ御座り、誠こめてたさ  
幾まん年御繁昌といわぬ入まいらせり、めてかしく、

朱力キ  
寶永四年四月九日

嶋津勘解由殿

梅小路

b

同 帶 刀殿

御返事

まつ村

吉貴公御譜中

正文在文庫

口上

御修覆之義大形出來仕置り、然者本尊并白幡宮御戸張御  
鬢髮袋切之義、未不申上り、此度被爲 仰付被下り様奉  
願り、前々申上り通御宮殿遷宮之砌御供領被爲仰付りハ  
、難有可奉存候、頼朝公後代之御威光、寺後世之規模  
ニ罷成り、右之通ニ付敷度奉願候矣、

朱力キ  
寶永四年 卯月十一日

相承院

嶋津帶刀様

全上

口上

御修覆之義大形出來仕置り、然者本尊并白幡宮御戸張白  
鬢髮袋切之義、未不申上り、此度被爲 仰付被下り様奉  
願り、前々申上り通御宮殿遷宮之砌御供領被爲 仰付り  
ハ、難有可奉存候、頼朝公後代之御威光、寺後世之規

模ニ罷成<sup>レ</sup>、右之通ニ付數度奉願候矣、

朱カキ

寶永四年

卯月十一日

相承院

嶋津中務様  
(久輝)

2411 吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく御きたう仰付られ、御祓御まもり御もくろくの通進上被成、めてたさ幾まん年と御まんそくの御事にて御さ<sup>レ</sup>、此よしよく心えまいらせ<sup>レ</sup>て申せとの御事ニ御さ<sup>レ</sup>ま、何もよろしく御申入<sup>レ</sup>へく<sup>レ</sup>、かしく、

薩摩守様より御ふみ下され<sup>レ</sup>、まつく御二御所様御機嫌よくならせられ<sup>レ</sup>ま、御心やすく思しめし<sup>レ</sup>やうに御申入<sup>レ</sup>へ<sup>レ</sup>、扱は此節御吉事ニ付御きたう仰付られ<sup>レ</sup>、御よしにて、御祓御守御もくろくの通進上被成、則ひろういたしまいらせ<sup>レ</sup>御事ニ御座<sup>レ</sup>、誠ニ幾久しくまんく年もとめてたくいわる入奉りまいらせ<sup>レ</sup>、

薩摩守様御機嫌よく御座なされ<sup>レ</sup>御事、かすく御めてたく存まいらせ<sup>レ</sup>、めてかしく、

朱カキ  
寶永四年四月十三日

嶋津勘解由殿

梅小路

同 帶 刀殿

御返事

まつ村

2412 吉貴公御譜中

留正文在文庫

貴院御堂社修覆被相調候付、御本尊并白幡宮戸張御鬢髪入<sup>レ</sup>袋されも、此度相改<sup>レ</sup>り様有度被思召<sup>レ</sup>、且又此度御宮遷宮之御供料表調<sup>レ</sup>り様と之御紙上得其意<sup>レ</sup>、薩摩守に申聞<sup>レ</sup>處、仰之通可相調旨申付<sup>レ</sup>故、役人共より得貴意<sup>レ</sup>外様と申付<sup>レ</sup>條、左様可被思召<sup>レ</sup>、將又白幡宮に永く御供料之儀者、追<sup>レ</sup>得貴意候上薩摩守に可申聞<sup>レ</sup>、爲御返答如此御座<sup>レ</sup>、以上、

朱カキ

寶永四年

四月十四日

嶋津帶刀

嶋津中務

相承院様

2413 正文在文庫

御紙上之趣辱奉拜閱仕<sup>レ</sup>、然者先日口上書奉願<sup>レ</sup>御鬢

髪袋并

御戸張之義、別ゝ

御遷宮料迄被爲 仰付之段、難有仕合奉存候、將又

白幡宮に永く御供料之義者、追ゝ

薩摩守様へ可被仰上之旨、奉得其意り、此上 頼朝公後代

之御威光并寺末代之規模、拙僧當分住職外慶と奉存り、

此上 御供料之義右之通奉存り間、御志迄之義奉願り、

御禮等之義宜

薩摩守様へ被仰上可被下り、以上、

朱カキ

寶永四年

卯月十四日

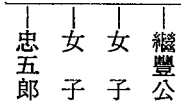
相承院

良陳判

鳴津中務様

鳴津帶刀様

2414



織豊公

女子

女子

忠五郎

寶永四年丁亥四月二十日誕生、母名越恒渡妹、

同五年戊子十月二十三日夭亡、

2415

吉貴公御譜中

正文在文庫

仰まいらせられりハん御吉左右り、一入くめてた

くいらい思しめしり、此御もくろくの通めてたさ迄

まいらせられり御事ニ御座り、誠ニ幾まん年も

めてたさのミかすといわる入奉りまいらせり、

此よしよく心えまいらせりて申せとの御事ニ御さり

まゝ、何もよろしく御申入りへくり、めてかしく、

御簾中様より申せとの御事ニ御座り、まつく

御二御所様御機嫌よくならせられりまゝ、御心やすく思

しめしりやうニ御申入りへくり、薩摩守様御ふた所様御

機嫌よく御座なされり御事、誠くめてたく思しめしり、

扱は

若子さま御出生被成り御事、かすくめてたく思しめし

り、こなたよりも追付御するくとの御事、めてかしく、

朱カキ

寶永四年四月廿一日

鳴津勘解由さま

ひて

同 帶 刀さま

つほね

申給へ

2416

全御譜中

正文在文庫

欽奉啓上候、到頃日々倍御機嫌能被成御座、恐悅奉存  
外、從御内證向爲可奉伺御樣躰、如斯御座候、仍從大清  
賜物之花緞子一本・縹子一本・當地大蘇鉄二本進上之仕  
候、猶奉期來慶之時候、誠惶誠恐敬白、

朱力半

寶永四年

卯月廿一日

琉球國司

尚貞判

進上少將樣

2417

吉貴公御譜中

正文在文庫

御香具品々并御肴一種被獻之外、首尾好遂披露外、恐々  
謹言、

朱力半

寶永四年

四月廿七日

正通判

松平薩摩守殿

稻葉丹後守

正通

2418

御香具品々并御肴一種被獻之外、首尾好遂披露外、恐々  
謹言、

松平薩摩守殿

稻葉丹後守

正通

朱力半

寶永四年

四月廿七日

正永判

2419

吉貴公御譜中

正文在文庫

此節二男忠五郎就誕生外、格式之儀家老中へ申聞外趣有  
之外、當家之儀二男よりハ代々家來之格式外處、以前者  
幼少之内取持重キ事共々外得共、忠五郎事從只今二男相  
應之格式ニ定外間、當家到末々代二男之格式定外趣不亂  
様、記錄所へ委可記置外也、

寶永四年五月朔日

吉貴 (花押)

(No.12)

家老中へ

2420

吉貴公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀、帷子單物數十到來歡覺候、委曲稻葉丹後  
守可述外也、

松平薩摩守殿

本多伯耆守

正永

朱力キ  
寶永四年  
五月三日

綱吉  
公印

薩摩少將殿

全上

爲端午之御祝儀、以使者如目錄被獻之、首尾好遂披露候、恐々謹言、

朱力キ  
寶永四年  
五月三日

本多伯耆守  
正永判

小笠原佐渡守  
長重判

松平薩摩守殿

2422  
全上

如來書何方も無恙同悦、然者右比(先カ)於江府以使者年始之祝詞彼是令申之處、丁寧之謝辭満足思給、餘期後音不能多毫、謹言、

朱力キ  
寶永四年  
仲夏初三

(花押  
No.3)

薩摩少將殿

2423  
吉貴公御譜中

正文在文庫  
口上

頼朝公御鬢髮之義、少御國元 白幡御社に御奉納仕度奉願、右之存寄者、到末々焼失彼是不慮如何様之義御座、紛失可申も難計奉存、御鬢髮世々無類之寺寶、因之右之通奉願、萬一不慮之義當寺に御座、節、申上御鬢髮二三本、本尊御首に御奉納義奉願向ともと奉存、此義平瀬治右衛門殿に御面談に委申上置、

朱力キ  
寶永四年  
五月六日

相承院

嶋津帶刀様

2424  
吉貴公御譜中

正文在文庫  
漸向暑氣、弥御堅固之御事、然者今度御次男御出生之由珍重存、爲御歡以愚札申入、恐惶謹言、

朱力キ  
寶永四年  
五月十四日

平松中納言  
時方

松平薩摩守様

2425  
吉貴公御譜中

扣正文在文庫

一筆致啓上外、然者

賴朝公御神靈に爲御供料白銀百兩、今度從薩摩守致寄付外條、幾久無疎略様被仰付置度外、此段可申達由被申付如此外、恐惶、

<sup>朱力半</sup>寶永四年 五月廿七日

鳴津帶刀

忠雄判

鳴津勘解由

久當判

鳴津中務

久輝判

相承院様

2426

全上

貴翰辱拜見仕外、然者 賴朝公御神靈に爲御供料白銀百兩今度從 薩摩守様被爲遊御寄付、永代無御疎略様被爲仰付趣奉畏外、并爲遷供料白銀拾枚拜領仕、彼是辱仕合奉存外、右之段御序の刻宜吊被爲仰上可被下外矣、

<sup>朱力半</sup>寶永四年 五月廿七日

相承院

良□判

鳴津中務様

鳴津勘解由様

2427

全御譜中

扣正文在文庫

先刻者拙者小屋に御尋被仰置外趣得其意、被入御念儀奉存外、然者先日拙者共方に被仰聞外者、貴院に御奉納有之外

賴朝公御鬢髮之事、貴公思召之譯及之間、此節被取分

賴朝公を薩州へ奉崇置外社頭に被納置度由被仰越外、則御紙上を以薩摩守へ申聞外處、數百年全奉納有之外大切之御鬢髮之事外處、今更取分數百里之山海を奉守越薩州へ可奉安置事、却る御廟之手を付外に似申恐入存之間、

此段者難應御所望由被申外條、其通可被思召外、此段爲可得貴意如此御座外、以上、

五月廿七日

鳴津帶刀 <sup>(仲休)</sup>

猶以鳴津中務同前ニ薩摩守前罷出、被遣外御紙上見せ申外處、右之通被申外、中務より及可及御返答外得共、當分者下屋敷に罷在外故、拙者一人ニ及御返答事御座外、以上、

相承院様

2428

同御譜中



正文在文庫

貴翰忝拜見仕<sub>レ</sub>、然<sub>ホ</sub> 御鬢髮之儀

薩摩守様御意之趣被<sub>レ</sub>仰下、奉得貴意<sub>レ</sub>、且又鳴津中務殿  
被<sub>レ</sub>仰下、是又御尤奉存<sub>レ</sub>、弥御堅固之由目出度奉存<sub>レ</sub>、  
猶重<sub>ル</sub>可申上<sub>レ</sub>、以上、

朱力<sub>キ</sub>

寶永四年

五月廿七日

尚々中務殿<sub>ニ</sub>及宜御心得被<sub>レ</sub>遊可被<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>、以上、

鳴津帶刀様

相承院

(表紙)

吉 貴 公  
寶 永 四 年 自 六 月  
繼 豐 公 至 十 月

追 舊 記 雜 錄 卷 三 十 九

吉貴公御譜中

右大將賴朝公護身佛觀音彌陀勢至之像昔曰公安證法華堂之靈像也  
今在相承院 竝 大將束帶靈像一軀稱白、舊、在相州鎌倉相承院一也、是歲寶永四年六月朔旦、吉貴以

公之後裔一脩飾各尊像、書左之件於真輪而彫刻之、乃納于三軀之中一軀之體內及肖像之體中一也、

右大將賴朝卿束帶靈像一軀、舊在鎌倉相承院、院罹回祿 靈像幸免、吉貴生於卿長庶子豐後守忠久二十一

世之後而領薩隅日之地久矣、於是不忘追敬之義、謹命良工修補形飾以納於櫃、又授院主永奉

護之者也、

寶永四年丁亥六月朔旦

後裔薩隅日三州主兼領琉球國從四位下左近衛權少將源

朝臣吉貴謹識、

觀音像一軀

彌陀像一軀

勢至像一軀

右三像者鎌倉右大將賴朝卿之護身佛而舊在法華堂、世遠堂險三像纔存安置於相承院之內久矣、吉貴出

自卿之長庶子豐後守忠久、領薩隅日三州、二

十一世此蓋餘慶之所致也、於此恐失其舊物、因

命良工爲之脩飾加之莊嚴、納之於櫃、以授

院主、永令寶護者也、

寶永四年丁亥六月朔旦

後裔薩隅日三州主兼領琉球國從四位下左近衛權少將源

朝臣吉貴謹識、

2430

吉貴公御譜中  
正文在文庫

端午之御内書可相渡候間、明日五半時 御城家來可被



こん日 上使稻葉丹後守にて

さつまの守様御國もとへの御いとままいらせられりよし、其うへ品々まいらせられ忝思しめしりとの御事にて、文のやうひろういたしまいらせりへハ、めて度御まん足ニ思しめしり、誠ニ幾久しく萬々年もめてたくいわる思しめしり、かしく、

朱方キ  
寶永四年六月十二日

嶋津勘解由殿

ひて

同 帶 刀殿

つほね

御返事

2434

全上

御まん足の御事ニ覺しめしり通、何もよく心えまいらせりて申せとの御事ニ御さりま々、此よしよろしく申入りへくり、暑氣の御かまいも御さなく、いよく々 さつまの守様御きけんよく御さ被成り御事、めてたく御まん足ニ覺しめしりよし、よく御申入りへくり、めてかしく、

さつまの守様より御ふみ被下り、けしからぬ暑氣にて御さりへ共

御二御所様御機嫌よくならせられりま々、御心やすく覺しめしりやうに御申入りへくり、

さては

さつまの守様御國元への御いとま

仰出されりにつき御饒別早川勝七郎御使にてまいらせられり御事、かたしけなく覺しめしりとの御事にて、御禮

仰上られり御ふみの趣

御簾中様へ則ひろういたしまいらせりへハ、めてたくかしく、

朱方キ  
寶永四年

嶋津勘解由殿

ひて

同 帶 刀殿

つほね

御返事

2435

全上

ことの外的あつさにて御座りへとも

さつまの守様御機嫌よく御座なされり御事、かすく々御めてたくそんし奉りまいらせり、何もくよく心えまいらせりて申せとの御事ニ御さりま々、此よしよろしく御申入りへくり、かしく、

薩摩守様より文下されり、まつく

御二御所様御機嫌よくならせられりまゝ、御心やすく思しめしりやうに御申入りへくり、扱は昨日御國もとへの御いとままいらせられりニ付、御禮に御登城あそハしり所ニ

御前へめさせられりて、御念比の上意にて、御馬拜領被遊りぬ、忝思しめしりとの御事にて、御禮文のやうひろういたしまいらせり御事ニ御座り、誠ニ幾久しく萬々年とめてたく思しめしり、かしく、

<sup>朱力キ</sup>寶永四年六月十三日

鳴津勘解由殿

梅小路

同 帶 刀殿

まつ村

御返事

全上

御座りへとも さつまの守様御機嫌よく御さなされ

り御事、かすくめてたくそんし奉りり、なをく御念入まいらせられり通、何も御まんそくの御事ニよく心えまいらせりて申せとの御事ニ御さりまゝ、此よしよろしく御申入りへくり、かしく、

さつまの守様より文下されり、まつく

御二御所様御機嫌よくならせられりまゝ、御心やすく思しめしりやうに御申入りへくり、さては昨日 さつまの守様御國もとへの御暇参らせられり、御禮ニ御登城あそハしり所ニ、御前へめさせられりて、御念比の上意にて御馬御拜領あそハし、かたしけなく思しめしりとの御事にて、御禮文のやう何もひろういたしまいらせりへハ、數くめてたく御まん足ニ思しめしり、誠ニ幾久しく萬々年もめてたさのミといわる思しめしり、ことの外あつさにて、かしく、

<sup>朱力キ</sup>寶永四年六月十三日

鳴津勘解由殿

ひて

同 帶 刀殿

つほね

御返事

2437 吉貴公御譜中

薩摩守實子惣領

鳴津鍋三郎(兼豊)

御當地ニ罷在候、

六月

松平薩摩守

右者今度御歸國付る右之通

但赤松甚右衛門致案内、

太守様御自筆被遊、御封印を被附、戌六月十八日之朝、

一右御返答之趣三原佐、右衛門を以達

御月番御老中土屋相摸守様に御持參被成、御直ニ御渡

貴聞外處、此儀老肝要成事ハ問何れ承覺可罷在外、

被置外、今一通右同前御認被遊、御年寄御老中小笠原

就中御留守居中に表可申聞置之旨被 仰出外付、則嶋

佐渡守様に小笠原(長住)彦太夫様を以被差出外、右御案詞者

津中務殿・嶋津勘解由殿・嶋津備前并御用人市來次郎

前に相摸守様に九(田宮某)一三を以御内談有之、相摸守様よ

左衛門・相良(長想)權太夫・三雲新兵衛、御留守居赤松甚右

り御内々(久)の御案詞被遣外上右之通御書認外也、

衛門・若松彦兵衛・森川理右衛門に於御家老座帶刀申

一亥六月十四日井上河内守様に嶋津帶刀御使者(久)の被仰

達外、帶刀御使者の河内守様に被遣外御口上書左書

遣外ハ、私嫡子鍋三郎御當地ニ差置外段去々年六月御

記外、

暇被下歸國仕外御書付外、御月番土屋相摸守殿に致

口上覺

持參御直差出置外、然者一昨日御暇被下近日致歸國外、

私實子惣領鍋三郎事御當地に罷在外段、去々年六月御暇

右御届之儀歸國毎ニ申出置事御座外哉以使者御内意申

被下御當地發足仕外、前ニ書付外御用番土屋相摸守殿

外、右之通御口上河内守様御用人松倉文右衛門に申達、

に私致持參直ニ差出置申外、其時分御用御頼申外小笠原

御口上書相渡外處御返答帶刀を以被仰越外趣、且又御

佐渡守殿に表右書付小笠原(長住)彦太夫を以差出置申外、御暇

書付見届申外、此儀八年毎ニ御届ニハ及間敷と存外、

被下外度毎ニ右之段申出置儀ニ表御座外哉、御内意相同

乍然今日御書付之趣仲ケ間に申談、年毎ニ及御届儀外

申外、以上、

ハ、自是可申達外、弥不及御届儀外ハ、最早其首尾

寶永四年 六月

松平薩摩守

ハ申進間敷外由、文右衛門を以被仰聞外、左外御帶刀

に御逢可被成外處、近日増上寺御法事付外、今朝ハ別

全御譜中

2438

の御用多御取込被成御座外故、御逢不被成由被仰下外、

正文在文庫

御檜重一組被獻之外、首尾好遂披露候、恐々謹言、

朱カキ  
寶永四年 六月十九日

政直判

松平薩摩守殿

土屋相摸守  
政直

2439

吉貴公御譜中

正文在文庫

誠ニ幾久しく萬々年もといわる思しめし外、此よし

よく心えまいらせ外て申せとの御事ニ御さ外ま、

何もよろしく御申入りへく外、かしく、

さつまの守様より御ふミ下され外、まつく

御二御所様御機嫌よくならせられ外ま、御心やすく思

しめし外やうニ御申入りへく外、さては 薩摩守様御國

もとへの御暇仰出され外ニ付

御簾中様方早川勝七郎御使にて御祝義御目錄之通まいら

せられ外御事、忝思しめし外との御事にて、御禮文のや

う何もひろういたしまいらせ外御事ニ御さ外、めてかし

く、

朱カキ  
寶永四年六月廿三日

カ

2440

吉貴公御譜中

正文在文庫

嶋津勘解由殿

梅小路

同 帶 刀殿

まつ村

御返事

誠ニ幾久しく萬々年もかきりあらずといわる思しめ

し外、此よしよく心えまいらせ外て申せとの御事ニ

御さ外ま、何もよろしく御申入りへく外、かしく、

薩摩守様より文下され外、まつく

御二御所様御機嫌よくならせられ外ま、御心やすく思

しめし外やうニ御申入りへく外、さては

さつまの守様御國もとへの御暇 仰出され外ニ付、

御簾中様方早川勝七郎御使にて、御しうき御目錄之通ま

いらせられ外御事、忝思しめし外との御事にて、御禮文

のやう則披露いたしまいらせ外へは御念入まいらせられ

外御事ニ思しめし外、めてかし、

朱カキ  
寶永四年六月二十三日

カ

嶋津勘解由殿

ひて

同 帶 刀殿

つほね

御返事

2441

吉貴公御譜中

正文在文庫

御看一種被獻之外、首尾好遂披露候、恐々謹言、

朱力キ

寶永四年

六月廿五日

正通判

松平薩摩守殿

稻葉丹後守  
正通

2442

吉貴公御譜中

正文在文庫

琉球布十卷并砂糖漬天門冬一器・泡盛酒二壺・御看一種

被獻之候、首尾好遂披露外、恐々謹言、

朱力キ

寶永四年

六月廿七日

正永判

松平薩摩守殿

本多伯耆守  
正永

2443

全上

其方家來鳴津勘解由、明廿八日五半時 御城に可被差出

外、以上、

朱力キ

寶永四年  
六月廿七日

井上河内守  
(正考)

大久保加賀守  
(忠贈)

稻葉丹後守  
(正通)

秋元但馬守  
(齋朝)

松平薩摩守殿

2444

琉球布十卷并砂糖漬天門冬一器・泡盛酒二壺・御看一種  
被獻之外、首尾好遂披露外、恐々謹言、

朱力キ

寶永四年

六月廿七日

政直判

松平薩摩守殿

土屋相摸守  
政直

2445

吉貴公御譜中

去々年御歸國前 御實子 御惣領 鍋三郎様江戸に被成

御座外段 御自筆ニ由 御書付御用番土屋相摸守様江、

西六月十八日之朝 御持參被成、御直ニ被渡置外、其節

御用御頼之御老中小笠原佐渡守様江及右同前ニ御書付被

成、小笠原彦太夫様を以被遣置外、右之御届ハ御歸國前

御届可有之哉之旨、此節鳴津帶刀御使ニ由御口上書を以



井上河内守様に御尋被成り處ニ、此儀老年毎ニ御届ニハ  
及間敷と被思召り、乍然御仲間ニ被仰談年毎ニ御届被成  
りハ、其段可被仰遣り、弥御届ニ不及事りハ、最早其  
首尾被仰遣間敷由御返答ニあり處ニ、今以御沙汰無之  
間、向後者御届ニ不及事と相聞得り、右之通御届被成置  
り儀者大切成御事り間、何れ者承知仕可罷有旨被仰出  
付り、於御當地者御用人御留守居迄委申聞置り、依之去  
々年来之御首尾別紙ニ書付、此節差越り間何れ者承知  
被仕、御帳面又ハ御記録所などへも記置り様ニ可被申渡  
置り、以上、

宋力キ  
寶永四年 七月朔日

鳴津帶刀

- 鳴津大藏殿 (久忠)
- 新納市正殿 (久珍)
- 種子嶋藏人殿 (久時)

全上

先是賜ニ告<sup>ヲ</sup>於吉貴ニ、以故同年七月朔日發ニ江府ニ、家老  
島津中務久輝、用人市來次郎左衛門家賢・相良權太夫長  
規 長規先翁大坂  
經西海船廠府、用人代米良藤右衛門重年 重年者御目附也  
假勤ニ用人代一 等從<sup>レ</sup>  
駕也、歷ニ過東海道ニ、自ニ尾州宮驛 經ニ美濃路一止ニ宿同

全上

國清須驛ニ、時同月十一日曉天有<sup>下</sup> 儲君大納言家宣公  
降ニ誕若君 後孫家  
千代公也 於江府西丸ニ之聞<sup>上</sup> 先<sup>レ</sup>是依<sup>ニ</sup>降誕之事一使<sup>下</sup>ニ家  
老島津帶刀忠雄一留<sup>中</sup>江府上  
後備<sup>下</sup>ニ薩州一也、於<sup>レ</sup>是奔<sup>ニ</sup>家臣富山傳内左衛門義智<sup>馬</sup> 於江  
府、先就<sup>ニ</sup>執政一奉<sup>レ</sup>賀<sup>レ</sup>之、同十七日吉貴著<sup>ニ</sup>伏見一也、  
先<sup>レ</sup>是六月二十二日二男忠五郎及母堂 稱於  
須臾發 江府ニ、經<sup>ニ</sup>  
東海道一<sup>下</sup>ニ薩州一、以故七月十一日到ニ伏見一窺<sup>ニ</sup>吉貴之  
到著<sup>ニ</sup>同<sup>ニ</sup>旅第一、同廿一日<sup>下</sup>ニ大坂一、同二十五日發<sup>ニ</sup>大  
坂一取<sup>レ</sup>陸段二十七日到<sup>ニ</sup>播州室津一、同二十八日駕<sup>レ</sup>船忠  
五郎及母堂亦經<sup>ニ</sup>播磨路一乘<sup>ニ</sup>船室津一、同開<sup>レ</sup>船八月十日  
著<sup>ニ</sup>船豐州大裏一、(大) 是十日經<sup>ニ</sup>小倉驛一 同二十二日至<sup>ニ</sup>薩州  
和泉 又曰  
出水、九月朔日入<sup>ニ</sup>鷹城一、是日忠五郎並母堂亦後而  
到著也、即日馳<sup>ニ</sup>島津備中久茂於江府一、獻<sup>ニ</sup>上芭蕉布百  
端・干鯛一箱・鯛一箱・昆布一箱・御樽<sup>ニ</sup>二荷一、奉<sup>レ</sup>謝<sup>ニ</sup>  
歸<sup>レ</sup>州之恩篤一、久茂亦奉<sup>レ</sup>謁<sup>ニ</sup>將軍家一獻<sup>ニ</sup>上御太刀一腰・  
時服<sup>ニ</sup>二領一、且忝<sup>以</sup>三時服三襲一・御羽織一領一、拜<sup>ニ</sup>賜于久  
茂一也、

誠こめてたゞ幾萬々年といわゆる入奉りまいらせり、  
此よしよく心えまいらせりて申せとの御事ニ御さり

2448

まゝ、何もよろしく御申入りへくり、かしく、  
薩摩守様より文下されり、まつく

御二御所様御機嫌よくならせられりまゝ、御心易思しめ  
されりやうに御申入りへくり、

さつまの守様いよく御機嫌よく御座なされり御事、か  
すくめてたくそんしまいらせり、さては 薩摩守様御

發足ニ付 御簾中様方御目録之通堀源左衛門御使にて参  
らせられり御事、かたしけなく思しめしりとの御事にて、  
文のやう則ひろういたしまいらせりへハ、御念入まいら  
せり事ニ思しめしり、めてかしく、

朱カキ

寶永四年七月朔日

鳴津勘解由殿

同 帶 刀殿

御返事

方

ひて

つほね

全上

なをく幾久しく萬々年とめてたくいわる入まいら

せり、此よしよく心えまいらせりて申せとの御事ニ

御さりまゝ、何もよろしく御申入りへくり、かしく、

薩摩守様より御書下されり、まつく

2449

御二御所様御機嫌よくならせられりまゝ、御心やすく思  
しめしりやうに御申入りへくり、

さつまの守様御機嫌よく御座なされり御事、かすく御  
めてたく存まいらせり、さては

さつまの守様御發足ニ付

御簾中様方御使堀源さへもんにて御もくろくの通まいら  
せられり御事、かたしけなく思しめしりとの御事にて、  
文のやう何もひろういたしまいらせり御事ニ御さり、め  
てかしく、

朱カキ

寶永四年七月朔日

鳴津勘解由殿

同 帶 刀殿

御返事

方

ひて

つほね

吉貴公御譜中

正文在文庫

家千代様爲御七夜御祝儀、如目録被獻之外、首尾好遂披  
露候、恐々謹言、

朱カキ

寶永四年 七月十八日

井上河内守

正岑判

全上

松平薩摩守殿

大久保加賀守  
忠増判

土屋相摸守  
政直判

家千代様爲御七夜御祝儀、

大納言様 家千代様江如目錄被獻之候、首尾好逐披露、

恐々謹言、

朱力キ  
寶永四年

七月十八日

本多伯耆守  
正永判

小笠原佐渡守  
長重判

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

同年七月十八日吉貴奉レ祝ニ 家千代君七夜之慶喜ニ、獻下

上千鯛一箱・昆布一箱・御樽代二千匹於ニ

大樹綱吉公ニ若年寄使島津備、前久命獻之也、干鯛一箱・昆布一箱・御樽代二千

匹於ニ 大納言家宣公ニ家老使下島津帶刀忠、雄獻中 西丸上也、御刀一腰備前長光代、金三十枚、

御脇指一腰左文字代、金三十枚、御産衣代白銀三、干鯛一箱・御樽代千匹

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤候、今

度於西丸

若君様被遊御誕生、目出度被存由紙面之趣得其意、恐

々謹言、

朱力キ  
寶永四年 七月十九日

松平伊賀守  
忠榮判

松平右京大夫  
輝貞判

松平薩摩守殿

全上

2453

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、今  
度於 西丸

若君様被遊御誕生、目出度被存之由得其意外、依之被差  
越使者外、紙面之趣各申談及 高聞外、恐々謹言、

朱力<sub>キ</sub>  
寶永四年

七月十九日

稻葉丹後守

正通判

松平薩摩守殿

2454

全上

御札令披見候、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、今  
度

若君様被遊御誕生、目出度被存之由得其意外、依之被差  
越使者候、紙面之趣及 高聞外、恐々謹言、

朱力<sub>キ</sub>  
寶永四年

七月十九日

小笠原佐渡守

長重判

松平薩摩守殿

今度於西丸 若君様御誕生付御札之趣被入御念外段欣然  
之至存候、恐々謹言、

寶永四年 七月廿日

水戸中將

吉孚判

松平薩摩守殿

御報

2456

全上

如承意今般於 西丸

若君様御誕生目出度御儀外、依之被入御念預御札過當之  
至存外、恐々謹言、

朱力<sub>キ</sub>  
寶永四年

七月廿日

水戸中納言

綱條判

松平薩摩守殿

御報

2457

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披閱外、

家千代様御誕生誠目出度御事外、仍入御念外段欣然之至  
存外、恐々謹言、

朱力<sub>キ</sub>  
寶永四年

七月廿一日

尾張中納言

吉通判

薩摩<sup>(吉貴)</sup>少將殿  
御報

吉貴公御譜中

正文在文庫

如芳翰今度於 西御丸

若君様御誕生目出度御事、依之入御念、段欣然之至存、恐、謹言、

<sup>朱力</sup>寶永四年 七月廿三日

紀伊宰相

吉宗判

松平薩摩守殿

御返報

獻上

正一位諏方大明神

御太刀

一腰<sup>近江守</sup>  
忠綱

右於江府 西之丸御安産、依宿願成就奉寄進者也、仍狀如件、

寶永四丁亥

七月廿六日 少將吉貴御判

献上

霧島權現宮

御太刀

一腰<sup>丹後守</sup>  
兼道

右於江府 西之丸御安産、依宿願成就奉寄進者也、仍狀如件、

寶永四丁亥

七月廿六日 少將吉貴御判

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、

家千代様御機嫌之御様躰以使者被相伺之、弥御安全之御事、可御心易候、紙面之通各申談及 高聽、恐、謹言、

、謹言、

<sup>朱力</sup>寶永四年

七月廿六日

稻葉丹後守

正通判

松平薩摩守殿

献上

御札令披見ハ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤候、

家千代様御機嫌之御様躰被相同之ハ、益御安全之御事候

間可御心易ハ、依之被差越使者ハ、紙面之趣及 高聞ハ、

恐々謹言、

朱カキ  
寶永四年

七月廿六日

小笠原佐渡守

長重判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見ハ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ハ、

家千代様御機嫌之御様躰被相同之ハ、弥御安全之御事ハ

間、可御心易ハ、紙面之趣得其意ハ、恐々謹言、

朱カキ  
寶永四年

七月廿六日

松平伊賀守

忠榮判

松平右京大夫

輝貞判

松平薩摩守殿

全上

なをく御表向より御悦仰上られハへとも、なを又

御しうき仰上られハとの御事ニテ、文のやう何も御

まん足ニ思しめしハ通よく心えまいらせハ申せト

の御事ニ御座ハま、何もよろしく御申ハへハ、

かし、

さつまの守様より文下されハ、まつく

御二御所様いよく御機嫌よくならせられ、今月十日の

夜 若君様御誕生被遊ハ御事、尾張國きよすの宿ニテ

かせられ、めて度思しめさせられハとの御事ニテ、御悦

仰あけられハ、文のやう何もひろういたしまいらせハ御

事ニ御座ハ、

薩摩守様いよく御機嫌よく御旅行あそハしハ御事、か

すく御めて度そんしまいらせハ、めてかし、

朱カキ  
寶永四年七月

ハ

嶋津勘解由殿

梅小路

同 帯 刀殿

まつ村

御返事

全上

なをく

薩摩守様御機嫌よく御旅行あそハしハ御事かすく

めてたく思しめし外、此よしよく心えまいらせ外て  
申せとの御事ニ御座外まゝ、何もよろしく御申入外  
へく外、かしく、

薩摩守様より文被下外、まつく

御二御所様御機嫌よくならせられ、今月十日の夜

若君様御誕生被遊外御事、尾張の國きよすの宿にてでき  
せられ、めて度思しめさせられ外との御事にて、御悦仰  
あけられ外、文のやう何もひろういたしまいらせ外得者、  
幾萬々年とめてたく御まんそくの御事にて御座外、めて  
かしく、

朱カキ  
寶永四年

嶋津勘解由殿

ひて

同 帶 刀殿

つほね

御返事

めてたく御満足ニ思しめさせられ外、ま事ニ幾萬々  
年までも御はんしやう外て御めてたき御事のミかき  
りあらずといわる入せられ御満足に思しめし外、  
さつまの守様にもいよ／＼御機嫌よく御道中あそハ  
し外御事、一入めてたく思召外、右の通何も／＼よ

ろしく御申上外へく外、めてかしく、

さつまの守様を御ふミ下され、まつく

御ふた御所様いよ／＼御機嫌よく成らせられ、若君様  
にも御機嫌よく成らせられ、御めて度覺しめさせられ外  
由、殊 若君様御事

公方様を松平美濃守御使にて 御簾中様へ 御子様ニ被  
遊外様こと御名をも 家千代様と御つけ被遊進しられ  
外、御吉例の通御刀・御守・御わきさし進られ外御事、  
美濃國垂井の宿にて御聞被遊御めてたく覺しめさせられ  
外よしにて、御悦仰進られ御ふミの通披露いたしまいら  
せ外得者、めてかしく、

朱カキ  
寶永四年

嶋津勘解由殿

ひて

同 帶 刀殿

つほね

御返事

御はんしやうにて御めてたき御事のミかきりあらず  
といわる入まいらせ外、  
さつま守様にもいよ／＼御機嫌よく御道中あそハ  
し外御事、御めてたくそんしまいらせ外、よろしく仰

上られ外へくり、めてかしく、

さつまの守様より御ふミ下されり、まつく

御ふた御所様弥御機嫌よくならせられ、若君様も御

機嫌よく成らせられ御めてたく覺しめさせられ由、殊

ニ 若君様御事、松平みの、守御使にて 御簾中様御子

様ニあそハされ御名をも 家千代様と御つけ被遊り様ニ

との御事にて、御吉例の御刀・御守・御わきさし進しら

れ外御事、美濃國垂井の宿にて御聞被遊りて、御めてた

く覺しめさせられ外よし、御悦仰進られり、御ふミの通

披露いたしまいらせ外へくり、ま事に幾萬々年までも、

めてかしく、

朱力キ

寶永四年

嶋津 勘解由殿

梅小路

同 帶 刀殿

まつ村

御返事

(島津久房  
求馬久房譜中)

寶永四年丁亥七月二十六日 吉貴公奉ニ納御劔一振於謙

訪大明神二鹿尾、久房爲三之使、

白木御文書五番箱六十中

國名を付り外不苦面、

一御兄弟衆

一御城代

一御家老

一若年寄

一大目附

百官・關東百官之内を付り外不苦面、

但 官名之外ニ有及不新名ハ心次第願可申外、

一 番頭并番頭之嫡子

一 御兄弟衆

(宛込) 寛陽院様御子・御城代・御家老・若年寄・大目附之同

名ハ、官名迄附外格之面々及致遠慮付申間敷外、

一 組頭之儀大勢ニ外間、仲間ニ同名有之外共改ニ不及外、

一 江戸御老中様并御同格之御方、京都諸司・大阪御城代・

若御年寄之御名老付申間敷外、

一 近國之御大名又老御身近半御一門様方之御名老付申間

敷外、

右之通此節被 仰出外間可被奉得其意外、以上、

(朱) 「寶永四年」 亥七月 取次



高橋七郎右衛門(種)

諏方市右衛門

右仰出之御書付壹通、與頭・御番頭衆へ於敷舞臺何れ  
表拜見有之外、不能出面々ハ寄々申通外様こと被仰渡  
外、周防殿御守役(忠直)玄蕃殿、御附人圖書殿、御附人加治  
木假屋守召出、右之御書付拜見有之外、大目附座取次  
鎌田了右衛門相詰居外事、

右上包ニ左ノ如シ  
國名、官名之儀ニ付、寶永四年七月被 仰出候御書附写一通「三十六」

右明和三年戊七月十一日輪津登ヨリ被相渡候ニ付、郡山次郎左衛門相受取五番箱  
江納置候

2470 吉貴公御譜中

正文在文庫

一筆致啓達候、弥可爲御堅固珍重存候、然者今般私領内  
之者逢難風、琉球之内大嶋(大島)江致漂着候處、右之者共江品  
々被下之、當地深川迄船頭水主等御附被成、段々被入御  
念外趣忝次第存外、御禮爲可申述如斯御座外、恐惶謹言、

朱力キ  
寶永四年 八月三日

松平陸奥守

吉村判

松平薩摩守様

人々御中

2471 全上

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被  
獻之外、首尾好遂披露候、恐々謹言、

朱力キ  
寶永四年 八月三日

井上河内守  
正岑判

大久保加賀守  
忠増判

秋元但馬守  
喬朝判

土屋相摸守  
政直判

松平薩摩守殿

2472 全上

爲八朔之御祝儀、

大納言様 家千代様江以使者如目錄被獻之外、首尾好遂

披露候、恐々謹言、

朱力キ  
寶永四年 八月三日

本多伯耆守  
正永判

小笠原佐渡守  
長重判

松平薩摩守殿

2473

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様

大納言様且又 家千代様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤  
外、先月十八日御七夜御祝儀相濟外段被承之、目出度被  
存由得其意外、依之被差越使者外、紙面之趣各申談及  
高聽外、恐々謹言、

朱カキ

寶永四年

八月廿五日

秋元但馬守

喬朝判

松平薩摩守殿

2474

全上

御札令披見外、

公方様

大納言様且亦 家千代様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤  
外、去月十八日御七夜御祝儀相濟外段被承之、目出度被  
存之由得其意外、依之被差越使者外、紙面之趣及 高聞  
外、恐々謹言、

朱カキ

寶永四年

八月廿五日

本多伯耆守

正永判

2475

松平薩摩守殿

全上

御札令披見外、

公方様

大納言様且又 家千代様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤  
外、先月十八日御七夜御祝儀相濟外段被承、目出度被存  
由、紙面之趣得其意外、恐々謹言、

朱カキ

寶永四年

八月廿五日

松平伊賀守

忠榮判

松平右京大夫

輝貞判

松平薩摩守殿

2476

吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく御ねん入らせられ御事とそんしまいらせ  
外、

家千代様いよく御機嫌の御事御成長被遊りまゝ、  
御心易思しめされ外様ニ御申上りへく外、かしく、  
文下され、まつく

御二御所様御機けんよくならせられ 家千代様御機嫌の御事ニならせられ、十八日に御七夜の御いわるも御しゆひよくすませられ、御目出たく思しめしゆ由、なをく御機けん御窺あそはしゆとをり申上りへくり、薩摩守様ニもいよく御機けんの御事御めてたくそんしまいらせり、めてたくかしく、

朱カキ  
寶永四年

右

嶋津勘解由殿

梅小路

嶋津帶 刀殿

松村

御返事

2477

吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく御ねん入らせられり御事と思しめさせられり、  
家千代様いよく御機けんよく御成長被遊りまゝ、  
御心易思しめされりやうに御申あげりへくり、めてたくかしく、

文下され、まつく

御二御所様御機嫌よくならせられ、 家千代様御機嫌の

御事ニならせられ、十八日に御七夜の御祝も御しゆひよくすませられ、御めて度思しめしゆ由、なをく御機嫌御伺あそはしゆ通申上まいらせりへ考、御満足と思しめさせられり、薩摩守様ニもいよく御機嫌の御事きかせられ、めてたく御満足に覺しめさせられり、めてたくかしく、

朱カキ  
寶永四年

右

嶋津勘解由殿

ひて

嶋津帶 刀殿

つほね

御返事

2478

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、  
公方様

大納言様且又 家千代様御機嫌之御様躰被相伺之り、益御安全之御事り間可御心易り、紙面之趣各申談及 高聽り、恐々謹言、

朱カキ  
寶永四年

八月廿六日

秋元但馬守

喬朝判

松平薩摩守殿

2479

全上

御札令披見外、

公方様

大納言様且又 家千代様御機嫌之御様躰被相伺之外、益御安全御儀外間可御心易外、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

朱力半

寶永四年

八月廿六日

松平薩摩守殿

本多伯耆守

正永判

2480

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様

大納言様且又 家千代様御機嫌之御様躰被相伺之外、益御安全之御事外間可御心易外、紙面之趣得其意候、恐々謹言、

朱力半

寶永四年

八月廿六日

松平伊賀守  
忠榮判  
松平右京大夫  
輝貞判

松平薩摩守殿

2481

吉貴公御譜中

正文在文庫

去廿五日之尊札拜見任外、御領内水引(川内)と申所之者三人、於當地惡事被組外付、則召捕遂詮儀候趣、諏訪甚右衛門方申達外處、委細御聞届被成之由、依之御紙上之趣被入御念御儀御座外、恐惶謹言、

朱力半

寶永四年

八月廿八日

佐久間安藝守  
信就判  
永井讚岐守  
直爾判

松 薩摩守様

尊報

2482

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様

大納言様且又 家千代様御機嫌之御様躰被相伺之外、益御安全之御事外間可御心易外、隨而御着一種被獻之外、各申談首尾能遂披露外、恐々謹言、

朱力半

寶永四年

九月朔日

秋元但馬守  
喬朝判

松平薩摩守殿

2483 全上

御札令披見外、

公方様

大納言様且又 家千代様御機嫌之御様躰被相同之外、益御安全御儀外間可御心安外、隨而御肴一種被獻之外、首尾好遂披露候、恐々謹言、

朱力年、寶永四年 九月朔日

本多伯耆守

正永判

松平薩摩守殿

2484 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様

大納言様且又 家千代様御機嫌之御様躰被相同之外、益御勇健之御事外間可御心易外、隨而御肴被獻之候、紙面之趣得其意外、恐々謹言、

朱力年、寶永四年 九月朔日

松平伊賀守

忠榮判

松平右京大夫、輝貞判

松平薩摩守殿

2485 市太夫久雄譜中

寶永四年丁亥九月朔日 吉貴公歸國、使下久雄一爲レ使節

赴中武城上、因レ是奉レ謁ニ

將軍家ニ、述ニ歸國之謝禮ニ進獻如レ先例、

2486 吉貴公御譜中

正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖五到來歡覺外、委曲稻葉丹後守(可脱之)述候也、

朱力年、寶永四年 九月七日

綱吉御印

薩摩少將殿

2487 全上

爲重陽之御祝儀、以使者如目錄被獻之外、首尾好遂披露候、恐々謹言、

朱力年、寶永四年 九月七日

本多伯耆守

正永判

小笠原佐渡守  
長重判  
松平薩摩守殿

2488 吉貴公御譜中

正文在文庫

華翰披閱、雖向冷氣愈平安、海上無恙歸國之由、早速被

示聞令怡悦外、此邊無吳外、尚期後便外、謹言、

朱力干

寶永四年

季秋念一

(近衛家懸)

(花押 No4)

薩摩少將殿

2489 北郷久嘉譜中

寶永四年丁亥九月二十一日依 太守吉貴公高命、徵久嘉

御家老座、使種子島藏人久時被補大目附役矣、

2490 吉貴公御譜中

正文在文庫

奉爲

蘭室院殿身安真法大姉追薦

御位牌供養中曲三昧請定

御開眼供養師蓮金院奉寶性院代奉無量壽院代奉金剛三昧

院奉正智院奉引攝院奉安樂院奉清雲院奉彌勒院奉理性院

奉寶光院奉萬勝院奉東室院奉自性院奉大聖院奉天德院奉

寶蓮院奉五坊奉南院奉心南院奉丹生院奉寶城院奉補陀洛

院奉聖無動院奉眞光院奉正覺院奉知德院奉悉地院奉寶聚

院奉心王院奉

寶永四年九月廿一日

行事

2491 全上

奉爲

蘭室院殿身安真法大姉追善速夜光明三昧僧衆

供養法導師 蓮金院 觀智院 教覺院 眞光院 智德院

明照院 正法院 顯正院 琳環房 惠嚴房 覺順房 文

春房 寬琳房 智嚴房 文啓房 堯仙房 領淵房 圓音

房 純政房 良山房

寶永四年九月廿一日

2492 全上

日牌證帳

御位牌

一基

夫高野山者彌勒說法之淨刹而大師入定之靈窟也、以故奉爲

蘭室院殿身安眞法大姉追善安置毎日奠饌之靈牌勤修開眼顯得之秘法然則日日備膳時時讀經奠茶拈香之廻福奉華供燈之修善因大師之本誓永不退轉以知先妣尊靈法界宮裏卜五智之玉臺安養界中賁九品之蓮座矣謹受淨施如許

寶永四丁亥載九月廿二日、

高野山

蓮金院

哲眞印

御使者 伊地知五兵衛殿

2493

全御譜中

正文在文庫

華翰落掌、先以海路無難着岸滋勇健之由、欣然不斜愚老無吳事ハ、猶期後音不能詳ハ、謹言、

朱力キ

寶永四年

季秋下三

(近衛基應)

(花押)

No.3

薩摩少將殿

2494

吉貴公御譜中

寫正文在文庫

覺寫

一周防殿所帶此節別格ニ御給ハ、此段今日周防殿ハ可申達ハ、

一御高老 御先代被分進置ハ通五千斛御給ハ、

一屋敷老川上式部上ケ屋敷拜領ニ可申渡ハ、

一家來之儀老、俄ニ老可難集ハ聞、漸ニ譜代之者可被

相抱儀ニハ、其内老御當地并外城士之末子又老何者ニ

亦ハ一節之抱者ニ亦先可相濟ハ、

一家來人數且又屋作諸道具等之儀、右之御高相應ニ見合

可然ハ、

右之通周防殿ハ私より申達、御家老中ハ亦可申達置之

旨 御意候、以上、

朱力キ

寶永四年 亥九月廿六日

種子嶋彈正

2495

吉貴公御譜中

正文在文庫

華簡披閱、雖向冷氣愈平安、海上無恙歸國之由、早速被示聞令怡悅ハ、此邊無吳事ハ、尚期後便ハ、謹言、

宋カキ  
寶永四年  
上冬初三

薩摩少將殿

(近衛家文)  
(花押)  
No.10

2496 吉貴公御譜中

芳札令披見外、御本丸御作事此節不殘就御造畢、爲御祝儀

太守様江練蕉布三端・焼酎一壺進上之江段、首尾好遂披露外、恐々謹言、

朱カキ  
寶永四年  
十月六日

種子嶋藏人  
久時判

鳴津中務  
久輝判

鳴津大藏  
久明判

幸地親方

2497 全上

芳札令披見外、然者

(音讀文)  
満姫様御事近衛左大将様江御縁組被、仰出外爲御祝儀、

太守様江蕉布三端・焼酎一壺進上之江段、首尾好遂披露

外、恐々謹言、

宋カキ  
寶永四年  
十月六日

種子嶋藏人  
久時判

鳴津中務  
久輝判

幸地親方

2498 全上

芳札令披見外、然者

(音讀文)  
菟姫様御事松平刑部様江御縁組被、仰出外爲御祝儀、

太守様江蕉布三端・焼酎一壺進上之江段、首尾好遂披露外、恐々謹言、

朱カキ  
寶永四年  
十月六日

種子嶋藏人  
久時判

鳴津中務  
久輝判

鳴津大藏  
久明判

幸地親方

2499 全上

芳札令披見外、



太守様は爲年首之御祝儀、練蕉布拾端進上之ハ段、首尾能遂披露ハ、恐々謹言、

朱力キ  
寶永四年 十月六日

種子嶋藏人  
久時判

嶋津中務  
久輝判

嶋津大藏  
久明判

池城親方

2500 芳札令披見ハ、

御本丸御作事、此節不殘就御造畢、爲御祝儀

太守様は練蕉布三端・焼酎一壺進上之ハ段、首尾好遂披露ハ、恐々謹言、

朱力キ  
寶永四年 十月六日

種子嶋藏人  
久時判

嶋津中務  
久輝判

嶋津大藏  
久明判

池城親方

2501 吉貴公御譜中

芳札令披見ハ、

御本丸御作事、此節不殘就御造畢、爲御祝儀

太守様は練蕉布三端・焼酎一壺進上之ハ段、首尾好遂披露ハ、恐々謹言、

朱力キ  
寶永四年 十月六日

種子嶋藏人  
久時判

嶋津中務  
久輝判

嶋津大藏  
久明判

識名親方

2502 全上

芳札令披見ハ、然者

満姫様御事近衛左大將様は御縁組被 仰出ハ爲御祝儀、

太守様は練蕉布三端・焼酎一壺進上之ハ段、首尾好遂披露ハ、恐々謹言、

朱力キ  
寶永四年 十月六日

種子嶋藏人  
久時判

嶋津中務  
久輝判

嶋津大藏  
久明判

識名親方

2503 芳札令披見外、然者 滿姫様御事、近衛左大將様口御縁

組被 仰出外爲御祝儀、

太守様口蕉布三端・焼酎一壺進上之外段、首尾好遂披露

外、恐々謹言、

<sup>朱力年</sup>寶永四年 十月六日

種子嶋藏人

久時判

鳴津中務

久輝判

鳴津大藏

久明判

池城親方

2504 全上

芳札令披見外、

太守様口爲年首之御祝儀、練蕉布十端進上之外段、首尾

好遂披露外、恐々謹言、

<sup>朱力年</sup>寶永四年 十月六日

種子嶋藏人

久時判

鳴津中務

久輝判

幸地親方

2505 芳札令披見外、然者

滿姫様御事、松平刑部様口御縁組被 仰出外爲御祝儀、

太守様口蕉布三端・焼酎一壺進上之外段、首尾好遂披露

外、恐々謹言、

<sup>朱力年</sup>寶永四年 十月六日

種子嶋藏人

久時判

鳴津中務

久輝判

鳴津大藏

久明判

識名親方

2506 芳札令披見外、

太守様口爲年首之御祝儀、練蕉布十端進上之外段、首尾

好遂披露外、恐々謹言、

<sup>朱力年</sup>寶永四年 十月六日

種子嶋藏人

久時判

鳴津中務

久輝判

鳴津大藏  
久明判

識名親方

鳴津大藏  
久明判

2507  
全上

芳札令披見<sub>レ</sub>、然者

菟姫様御事、松平刑部様<sub>ニ</sub>御縁組被<sub>レ</sub> 仰出<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>御祝儀、

太守様<sub>ニ</sub>蕉布三端・焼酎一壺進上<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>外段、首尾好遂披露  
外、恐<sub>レ</sub>謹言、

朱力キ  
寶永四年  
十月六日

種子嶋藏人  
久時判

嶋津中務  
久輝判

嶋津大藏  
久明判

池城親方

2508  
全上

先中城王子去<sub>ク</sub>年より御病氣御養生不被<sub>レ</sub>相叶、去年十二  
月晦日御遠去之儀、達 貴聞<sub>レ</sub>外處、

國司様・中城王子御哭傷之程御推察之御事<sub>外</sub>、依之右趣  
之御口上<sub>ニ</sub>之御悔御使者其方可<sub>レ</sub>相勤<sub>外</sub>、爲<sub>レ</sub>御香奠白銀三

十枚被<sub>レ</sub>遣之<sub>外</sub>、中城王子にも御悔御使者其方可<sub>レ</sub>相勤<sub>外</sub>、  
此旨可<sub>レ</sub>申越之由、依御詮如此<sub>外</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

朱力キ  
寶永四年  
十月六日

種子嶋藏人  
久時判

新納市正  
久珍判

嶋津中務  
久輝判

嶋津大藏  
久明判

伊地知八郎兵衛殿

2509  
全上

一筆令申<sub>外</sub>、然者國司様當夏御筋之御痛被<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>差起<sub>外</sub>由、  
被<sub>レ</sub>申越<sub>レ</sub>相達<sub>外</sub>、

太守様達 貴聞<sub>レ</sub>外處、無御心元被<sub>レ</sub>思召<sub>レ</sub>、乍然輕<sub>キ</sub>御事  
ニ之日增御快然之由<sub>外</sub>得<sub>レ</sub>者、最早可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成御本復<sub>ト</sub>御推察  
被<sub>レ</sub>遊御事<sub>外</sub>、右御様躰御尋可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遊<sub>外</sub>間、其方御使者可<sub>レ</sub>相  
勤旨 御意<sub>外</sub>條奉<sub>レ</sub>得其意、御口上別紙之通申上御使者可<sub>レ</sub>  
被<sub>レ</sub>相勤<sub>外</sub>、此段爲<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>申達如此<sub>外</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

朱力キ  
寶永四年  
十月六日

種子嶋藏人  
久時判

2510

繼豊公御譜中

正文在琉球國幸地親方

芳札令披見<sub>レ</sub>、

鍋三郎様は爲年始之御祝儀、練蕉布十端進上之<sub>レ</sub>段、到

江府首尾好遂披露<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

朱力キ  
寶永四年

十月六日

種子嶋藏人

久時判

鳴津中務

久輝判

鳴津大藏

久明判

幸地親方

全上

正文在琉球國識名親方

芳札令披見<sub>レ</sub>、然者

菟姫様御事、松平刑部様江御縁組被 仰出<sub>レ</sub>、爲御祝儀

伊地知八郎兵衛殿

鳴津中務

久輝判

鳴津大藏

久明判

2512

全上

芳札令披見<sub>レ</sub>、

御本丸御作事、此節不殘就御造畢、爲御祝儀

鍋三郎様江練蕉布三端・焼酎一壺進上之<sub>レ</sub>段、到江戸首

尾能遂披露<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

朱力キ  
寶永四年

十月六日

種子嶋藏人

久時判

鳴津中務

久輝判

鳴津大藏

久明判

識名親方

鍋三郎様江蕉布三端・焼酎一壺進上之<sub>レ</sub>段、到江府首尾

好遂披露<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

朱力キ  
寶永四年

十月六日

種子嶋藏人

久時判

鳴津中務

久輝判

鳴津大藏

久明判

全上

芳札令披見外、然者

滿姫様御事近衛左大將様に御縁組被 仰出外、爲御祝儀

鍋三郎様に蕉布三端・焼酎一壺進上之外段、到江府首尾

好遂披露外、恐々謹言、

朱力半  
寶永四年 十月六日

種子嶋藏人

久時判

鳴津中務

久輝判

鳴津大藏

久明判

識名親方

全上

芳札令披見外、

鍋三郎様に爲年首之御祝儀、練蕉布拾端進上之外段、到

江府首尾能遂披露外、恐々謹言、

朱力半  
寶永四年 十月六日

種子嶋藏人

久時判

鳴津中務

久輝判

鳴津大藏

久明判

全上

正文在琉球國越來按司

御札致披見外、爲年始之御祝儀

鍋三郎様に練蕉布十端・焼酎一壺進上之外段、到江府首

尾好遂披露外、恐々謹言、

朱力半  
寶永四年 十月六日

種子嶋藏人

久時判

鳴津中務

久輝判

鳴津大藏

久明判

越來按司

正文在琉球國池城親方

芳札令披見外、

鍋三郎様に爲年始之御祝儀、練蕉布十端進上之外段、到

江府首尾好遂披露外、恐々謹言、

朱力半  
寶永四年 十月六日

種子嶋藏人

久時判

鳴津中務

久輝判

2517

池城親方

鳴津大藏  
久明判

全上

芳札令披見外、御本丸御作事此節不殘就御造早、爲御  
祝儀

鍋三郎様江練蕉布三端・焼酎一壺進上之外段、到江戸首

尾能遂披露外、恐々謹言、

朱力半  
寶永四年  
十月六日

種子嶋藏人  
久時判

鳴津中務  
久輝判

鳴津大藏  
久明判

池城親方

2518

全上

正文在琉球國越來按司

御札致披見外、御本丸御作事此節不殘就御造畢、爲御  
祝儀

鍋三郎様江練蕉布五端・焼酎一壺進上之外段、到江戸首

2519

全上

尾好遂披露外、恐々謹言、  
朱力半  
寶永四年  
十月六日

種子嶋藏人  
久時判

鳴津中務  
久輝判

鳴津大藏  
久明判

越來按司

正文在琉球國幸地親方

芳札令披見外、御本丸御作事此節不殘就御造畢、爲御

祝儀

鍋三郎様江練蕉布三端・焼酎一壺進上之外段、到江戸首

尾好遂披露外、恐々謹言、

朱力半  
寶永四年  
十月六日

種子嶋藏人  
久時判

鳴津中務  
久輝判

鳴津大藏  
久明判

幸地親方

全上

正文在琉球國池城親方

芳札令披見外、然者

滿姫様御事近衛左大將様江御縁組被 仰出外、爲御祝儀

鍋三郎様江蕉布三端・焼酎一壺進上之外段、到江府首尾

好遂披露外、恐々謹言、

朱力キ

寶永四年

十月六日

種子嶋藏人

久時判

嶋津中務

久輝判

嶋津大藏

久明判

池城親方

全上

正文在琉球國越來按司

御札致披見外、

滿姫様御事近衛左大將様江御縁組被 仰出外、爲御祝儀

鍋三郎様江蕉布五端・焼酎一壺進上之外段、到江府首尾

好遂披露外、恐々謹言、

朱力キ

寶永四年

十月六日

種子嶋藏人

久時判

全上

正文在琉球國幸地親方

芳札令披見外、然者

滿姫様御事近衛左大將様江御縁組被 仰出外、爲御祝儀

鍋三郎様江蕉布三端・焼酎一壺進上之外段、到江府首尾

好遂披露外、恐々謹言、

朱力キ

寶永四年

十月六日

種子嶋藏人

久時判

嶋津中務

久輝判

嶋津大藏

久明判

幸地親方

全上

正文在琉球國越來按司

御札致披見外、

嶋津中務

久輝判

嶋津大藏

久明判

越來按司

2524

菟姫様御事、松平刑部様に御縁組被 仰出、爲御祝儀  
鍋三郎様に蕉布五端・焼酎一壺進上之、到江府首尾  
好遂披露、恐々謹言、

朱力キ  
寶永四年  
十月六日

種子嶋藏人  
久時判

嶋津中務  
久輝判

嶋津大藏  
久明判

越來按司

全上

正文在琉球國幸地親方

芳札令披見、然者

菟姫様御事、松平刑部様に御縁組被 仰出、爲御祝儀

鍋三郎様に蕉布三端・焼酎一壺進上之、到江府首尾

好遂披露、恐々謹言、

朱力キ  
寶永四年  
十月六日

種子嶋藏人  
久時判

嶋津中務  
久輝判

嶋津大藏  
久明判

2525

幸地親方

全上

正文在琉球國池城親方

芳札令披見、然者

菟姫様御事、松平刑部様に御縁組被 仰出、爲御祝儀

鍋三郎様に蕉布三端・焼酎一壺進上之、到江府首尾

好遂披露、恐々謹言、

朱力キ  
寶永四年  
十月六日

種子嶋藏人  
久時判

嶋津中務  
久輝判

嶋津大藏  
久明判

池城親方

繼豊公御譜中

正文在琉球國國中

貴札致拜見、爲年頭御祝儀

鍋三郎様に御目錄之通御進上、到江府達 貴聽、

恐惶謹言、

朱力キ  
寶永四年  
十月九日

新納市正  
久珍判



中城王子様

全上

貴札致拜見本マ然考此節 御本丸御作事不殘御造畢付、御祝儀為脱カ

鍋三郎様ハ別錄之通御進上被成ハ段、到江府達 貴聞ハ、

恐惶謹言、

朱カキ

寶永四年

十月九日

新納市正

久珍判

中城王子様

全上

正文在琉球國國司

貴札致拜見ハ、然考

滿姫様御事近衛左大將様ハ御縁與被 仰出ハ、為御祝儀

鍋三郎様ハ御目錄之通御進上被成ハ段、到江府達 貴聞

ハ、恐惶謹言、

朱カキ

寶永四年

十月九日

新納市正

久珍判

中城王子様

全上

貴札致拜見ハ、然考

滿姫様御事、松平刑部様ハ御縁與被 仰出ハ、為御祝儀

鍋三郎様ハ御目錄之表御進上被成ハ段、到江府達 貴聽

ハ、恐惶謹言、

朱カキ

寶永四年

十月九日

新納市正

久珍判

中城王子様

吉貴公御譜中

當家庶族日州佐土原城主島津淡路守惟久、欲ト以ニ先蹤ニ

來ニ魔府ニ訪中宗家上、訴ニ之

將軍家ニ、吉家亦同告レ之、乃達ニ 台聽ニ、恩ニ許至ニ于

薩府ニ也、是故寶永四年十月六日、惟久發ニ居城ニ、同八

日至ニ隅州福山ニ、雖レ然先レ是

大納言家宣公之御子、家千代君薨ニ御於江府ニ、依レ之吉

貴馳ニ使于福山ニ、止ニ惟久之來訪ニ、因惟久發ニ福山ニ歸ニ

佐土原ニ也、

吉貴公御譜中

正文在文庫

今般首尾能御暇、海陸無吳儀其地御着之旨珍重之事ハ、

依是御念入瑤章之趣欣然之至存レ、恐レ謹言、

朱力キ  
寶永四年 十月十三日 水戸中納言 綱條判

松平薩摩守殿 御報

2532 全上

今度首尾能御暇、途中無異儀其地御着之旨珍重之事レ、依之被入御念瑤章之趣怡悦之至存レ、恐レ謹言、

朱力キ  
寶永四年 十月十三日 水戸中將 吉孚判

松平薩摩守殿 御報

2533 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤レ、將亦今度被下御暇其上御馬并白銀・時服拜領之、重疊難有由得其意レ、國許到着付テ、爲御禮以使者如目録被獻之レ、右之趣遂披露レ處、御前ニ被召出之入念レ段御喜

色御事レ、恐レ謹言、

朱力キ  
寶永四年 十月十八日

井上河内守 正岑判

大久保加賀守 忠増判

秋元但馬守 喬朝判

松平薩摩守殿

2534 全上

御札令披見レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤候、將又今度被下御暇其上御馬并白銀・時服拜領之、重疊難有由得其意レ、國元到着付テ、爲御禮以使者如目録被獻之レ、遂披露レ處

御前ニ被召出之入念レ段御喜色之御事レ、恐レ謹言、

朱力キ  
寶永四年 十月十八日

本多伯耆守 正永判

小笠原佐渡守 長重判

松平薩摩守殿

2535 全上

御札令披見レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座と、恐悦旨尤、  
將又今度被下御暇、其上御馬并白銀・時服拜領之、重疊  
難有由得其意、國許到着付、爲御禮被差越使者、  
紙面之趣承届、恐、謹言、

<sup>朱カキ</sup>寶永四年 十月十八日  
松平伊賀守 忠榮判

松平右京大夫 輝貞判

松平薩摩守殿

2536

さつまの守様いよ、御機嫌よく御座被成、めてた  
くそんしまいらせ、何もよろしく御申上へ、  
よく申せとの御事、御さ、かしく、

薩摩守様より文下され、十月四日當御地よほと地震  
に御座へ共、御城中御別條御座なく

御二御所様御機嫌よくならせられ御事、めてたく思し  
めさせられとの御事にて、文のやう則ひろういたし参  
らせへ、御ねん入まいらせられ御事、思しめし  
、此よしく心えまいらせ、めてかしく、

<sup>朱カキ</sup>寶永四年

お

2537

嶋津勘解由殿 梅小路  
同 帯 刀殿 御返事 まつ村

全上

さつまの守様いよ、御機嫌よく御座被成御事、  
かす、御めて、たくそんしまいらせ、此よしよろ  
しく御申上へ、何もよく申せとの御事、御さ  
、かしく、

さつまの守様文被下、さては十月四日五日こもも  
地震いたしへとも、御城中御別條なく

御二御所様御機嫌よくならせられ御事、めてたく思し  
めさせられとの御事にて、文のやうひろういたしま  
らせへ、御念入らせられ御事、思しめし、此よ  
しく心えまいらせ、めてかしく、

<sup>朱カキ</sup>寶永四年

嶋津勘解由殿 ひと  
同 帯 刀殿 御返事 つほね

お

— 繼豐公

— 女子 養女

— 女子 幹姬

元祿十七年甲申三月十一日誕生、嫡母以幹姬爲子、

(於須臾)  
實母同于滿君、

寶永四年丁亥十月二十九日早世、法名明嚴院殿霜尊

婢光大禪童女、

吉 貴 公  
自寶永四年十一月  
至同 五年 八月  
繼 豐 公

追 舊 記 雜 錄 卷 四 十

2539 吉貴公御譜中

先<sub>レ</sub>是寶永四年十月八日、島津淡路守惟久爲<sub>レ</sub>訪<sub>二</sub>宗家<sub>一</sub>、  
至<sub>二</sub>隅州福山<sub>一</sub>、時依<sub>二</sub>家千代君薨去<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>至<sub>二</sub>魔府<sub>一</sub>、  
空歸<sub>二</sub>于佐土原<sub>一</sub>也、是故同年十一月五日惟久再發<sub>二</sub>居  
城<sub>一</sub>、同月九日至<sub>二</sub>福山<sub>一</sub>、同日乘船而著<sub>二</sub>魔府<sub>一</sub>、乃備<sub>二</sub>  
居客舍<sub>一</sub>、呼曰客屋、翌十日惟久初登城、暫入<sub>二</sub>對面所<sub>一</sub>於<sub>二</sub>書院<sub>一</sub>、  
謁<sub>二</sub>于吉貴<sub>一</sub>、於<sub>レ</sub>是惟久獻<sub>二</sub>太刀一腰・馬代白銀三枚・  
昆布一箱・干鯛一箱・樽一荷<sub>一</sub>、若年寄種子島驛正伊時  
奏<sub>二</sub>達之<sub>一</sub>、其後開<sub>レ</sub>宴獻酬終而惟久退出也、同十二日惟  
久登城、設<sub>二</sub>饗應<sub>一</sub>奏<sub>二</sub>舞曲<sub>一</sub>慰<sub>レ</sub>之、且以<sub>二</sub>三字國俊腰刀<sub>一</sub>

2540 吉貴公御譜中

代金<sub>一</sub>授<sub>二</sub>于惟久<sub>一</sub>、家老島津中務久輝傳<sub>レ</sub>之、吉貴出<sub>二</sub>對面  
所<sub>一</sub>、取<sub>二</sub>調<sub>一</sub>於惟久之家老澁谷監物、番頭日高七左衛門、  
用人富田六郎左衛門、用人川上八郎左衛門久清・諏方市  
右衛門兼秩等奏<sub>二</sub>達之<sub>一</sub>、終而惟久歸<sub>二</sub>于客舍<sub>一</sub>也、

正文在文庫

家千代御方逝去之事、因茲被投芳簡<sub>レ</sub>、懇志之至尤感懷  
外、謹言、

朱力<sub>キ</sub> 實永四年 仲冬二鳥 基熙

薩摩少將殿

2541 全上

家千代御方逝去、因茲丁重之楮面最感懷<sub>レ</sub>、謹言、

朱力<sub>キ</sub> 實永四年 仲冬初五 (近衛家肥) (花押) No.4

薩摩少將殿

2542

家千代御方逝去、因茲芳札落手、親切之事感懷<sub>レ</sub>、謹言、

朱力<sub>キ</sub> 實永四年 仲冬初五 (近衛家久) (花押) No.10

吉貴公御譜中  
正文在文庫

松平薩摩守殿

朱力キ  
寶永四年  
十一月六日

(花押 No.13) 朱力キ (公念)  
德大寺大納言

吉貴公御譜中  
正文在文庫

松平薩摩守殿

朱力キ  
寶永四年  
十一月七日

松平伊賀守  
忠榮判  
松平右京大夫  
輝貞判

芳臈披閱、如示教先頃地震り處、此表少々之儀無難り、

全上

薩摩少將殿

朱力キ  
寶永四年  
仲冬六鳥

基熙

芳臈披閱、先以御無事跡重存り、抑去月四日當地地震之事被傳聞、依之預示令滿り、(足脱之)無恙り條可芳意易り、猶期後信り也、謹言、

全上

松平薩摩守殿

朱力キ  
寶永四年  
十一月七日

井上河内守  
正岑判

御札令披見り、  
公方様 大納言様御機嫌之御様躰被相伺之り、益御安全御事り間、可御心易り、隨り御肴被獻之候、紙面之趣得其意り、恐々謹言、

吉貴公御譜中

薩摩少將殿

正文在文庫

芳簡落手、如來教去月四日爰許地震候之處、少々之儀二  
る無恙り之間、可令安心給り、丁寧之音信尤悦入り、謹言、

御札令披見り、

公方様 大納言様御機嫌之御様躰被相伺り、益御安全御事り間、可御心易り、隨り御肴一種被獻之り、各申談首尾好遂披露り、恐々謹言、

宜く深切之趣令満足外、謹言、

朱カキ  
寶永四年 冬半初九

(花押 No.4)

薩摩少將殿

2548

全上

猶く大坂表大動之由得共、御屋鋪無別條珍重存外、  
去月四日當地く震之事御聞及、爲御見舞貴翰辱存外、不  
及騒動程之事何表無別條外、可被御心安外、早く御音聞  
畏存外、恐惶謹言、

朱カキ  
寶永四年 十一月九日

平松中納言 時方

松平薩摩守様

御報

2549

吉貴公御譜中

正文在文庫

院仰

寶永 四 十一 十

さつまの少將より海邊の繪巻物しん上り、ひろう申て外  
へハ、まことにめつらかなる風けい、一しほにおもしろ  
くおほえさせおはしましり、このよし左大臣(家恩)とのよりよ

2550

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

家千代様御逝去段被承、被絶言語由令承知り、依之被差  
越使者外、

公方様 大納言様御機嫌被爲替御儀無之外間、可御心安  
外、紙面之趣各申談及 高聞外、恐く謹言、

朱カキ  
寶永四年 十一月十日

井上河内守 正岑判

松平薩摩守殿

2551

全上

御札令披見外、

家千代様御逝去之段被承之、被絶言語由令承知り、

公方様 大納言様御機嫌被爲替御儀無之外間、可御心安  
外、紙面之趣得其意外、恐く謹言、

朱カキ  
寶永四年 十一月十日

(藤井)  
松平伊賀守  
忠榮判

松平薩摩守殿

松平右京大夫  
輝貞判

2552 全上

御札令披見外、  
家千代様御逝去之段被承之、被絶言語之由令承知外、依  
之被差越使者外、

公方様 大納言様御機嫌被爲替御儀無之叶間、可御心易  
外、紙面之趣及 高聞外、恐々謹言、

朱カキ  
寶永四年 十一月十日

小笠原佐渡守  
長重判

松平薩摩守殿

全上

使下法橋養伯<sup>ヲシ</sup> 畫<sup>ヲ</sup>中海邊之圖上爲<sup>ニ</sup>一軸、以<sup>ニ</sup> 近衛左大  
臣家熙公之執奏<sup>ニ</sup>奉<sup>ニ</sup>上于

院御所、因下<sup>ニ</sup>女奉書<sup>ヲ</sup>於<sup>テ</sup> 家熙公、乃

公賜<sup>ニ</sup>之吉貴<sup>ニ</sup>今摸臨而以開<sup>ニ</sup>于後、

2554 正文在文庫

院仰

寶永四 十一 十

さつまの少將より海邊の繪卷物しん上り、ひろう申て外  
へハ、まことにめつらかなる風けい、一しほにおもしろ  
くおほえさせおハしますし、このよし左大臣とのよりよ  
くつたへさせられやうに、よくく心えりて申せとて  
外、御心えりて申入れられ外へく外、かしく、

御いまの御かたへ

(二五四九号文書と同文)

2555

吉貴公御諸中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、大納言様九月十  
四日増上寺 御佛殿 御参詣之儀被承之、恐悦旨尤外、  
紙面之趣及 高聞外、恐々謹言、

朱カキ  
寶永四年 十一月十日

小笠原佐渡守  
長重判

松平薩摩守殿



全上

御札令披見外、

大納言様益御機嫌能被成御座、九月八日東叡山御堂

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣及言上外、恐

々謹言、

朱力年  
寶永四年

十一月十一日

小笠原佐渡守  
長重判

松平薩摩守殿

全上

家千代様御逝去付、芳簡之趣入御念儀存外、恐々謹言、

朱力年  
寶永四年

十一月十一日

紀伊宰相

吉宗判

松平薩摩守殿

全上

家千代様御早世絶言語外、依是示諭之趣御深情之至存外、

恐々謹言、

朱力年  
寶永四年

十一月十一日

水戸中將

吉孚判

松平薩摩守殿

御報

全上

家千代様就御早世、御札入御念事外、恐々謹言、

朱力年  
寶永四年

十一月十一日

尾張中納言  
吉通判

薩摩少將殿

御宿所

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

家千代様御逝去付、芳翰之趣御懇情之至存外、恐々謹言、

朱力年  
寶永四年

十一月十一日

水戸中納言  
綱條判

松平薩摩守殿

御報

高聽外、恐々謹言、

朱力年  
寶永四年

十一月十四日

井上河内守

正岑判

全上

家千代様御逝去付、芳翰之趣御懇情之至存外、恐々謹言、

朱力年  
寶永四年

十一月十一日

水戸中納言  
綱條判

松平薩摩守殿

御報

2562

松平薩摩守殿

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌之御様躰被相伺之、益御安全御儀外間、可御心易外、紙面之趣可及 高聞外、恐々謹言、

朱力キ

寶永四年 十一月十五日

松平薩摩守殿

小笠原佐渡守  
長重判

2563

吉貴公御譜中

正文在文庫

一書致啓上候、然未

幹姫様(吉貴女)去月廿八日御逝去之旨承絶言語候、

太守様御嘆

情奉推察候、右御悔爲可申上如此御座外、御序之刻宜被

仰上外様頼入存候、恐惶不次、

朱力キ

寶永四年 十二月十七日

鳴津大藏殿(久明)

鳴津中務殿(久明)

即宗院  
楚長老判

2564

吉貴公御譜中

新納市(久珍)正殿

鳴津帶刀殿(忠雄)

種子嶋藏人殿(久時)

一筆啓上仕外、然未薩摩守領分日向國諸縣郡之内志布志(屬於郡)

と申所ニ、切支丹宗門ニ紛鋪者壹人捕申外付、於此元

一通り僉議仕、口問之趣別紙三通ニ書付差上申外、早々

其御元江差上可申外哉奉得御差圖外、依之野村源助薩摩

守使者申付差上申外、恐惶、

朱力キ

寶永四年 十一月廿六日

種子嶋(種)久時

島津(島)忠雄

新納(新)久珍

島津(島)久輝

鳥津(鳥)久明

永井謙(重)岐守様

佐久間安藝守様(信)

參人、御中

2565

吉貴公御譜中

同月十八日島津淡路守惟久欲レ歸ニ近日居城ニ、今日登レ城

而請レ暇、吉貴取レ謁許レ之、乃惟久出レ城歸ニ客舎ニ也、

即日使<sub>下</sub>ニ相良清兵衛頼庸ニ至<sub>中</sub>客舎上、以ニ白銀三百枚・白

縮緬三十卷ニ授ニ于惟久ニ、是則所<sub>レ</sub>謝<sub>下</sub>惟久遠來而訪<sub>中</sub>宗

家上也、同月二十二日惟久發<sub>ニ</sub>魔府<sub>一</sub>、取<sub>レ</sub>陸而經<sub>ニ</sub>帖佐<sub>一</sub>・

(給良郡)加治木驛路ニ既歸ニ佐土原ニ也、

2566 吉貴公御譜中

正文在文庫

今般紀伊中將方被任宰相<sub>レ</sub>ニ付、御札之趣御念入<sub>レ</sub>段欣

然之至存<sub>レ</sub>、恐<sub>ニ</sub>謹言<sub>一</sub>、

朱力キ

寶永四年

十二月二日

水戸中納言

綱條判

松平薩摩守殿

御報

2567 吉貴公御譜中

廣濟寺住持職事、任先例可令執務之狀如件、

寶永四年十二月二日

少將吉貴判

慈密西堂

2568 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見<sub>レ</sub>、如承十月四日五日地震<sub>レ</sub>、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤候、紙

面之趣各申談及 高聞<sub>レ</sub>、恐<sub>ニ</sub>謹言<sub>一</sub>、

朱力キ

寶永四年

十二月三日

秋元但馬守

喬朝判

松平薩摩守殿

2569 全上

御札令披見<sub>レ</sub>、如承十月四日五日地震<sub>レ</sub>、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤<sub>レ</sub>、紙

面之趣及 高聞候、恐<sub>ニ</sub>謹言<sub>一</sub>、

朱力キ

寶永四年

十二月三日

本多伯耆守

正永判

松平薩摩守殿

2570 全上

御札令披見<sub>レ</sub>、十月四日五日地震<sub>レ</sub>、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤候、紙

面之趣得其意<sub>レ</sub>、恐<sub>ニ</sub>謹言<sub>一</sub>、

朱力年  
寶永四年  
十二月三日

松平伊賀守  
忠榮判

松平右京大夫  
輝貞判

松平薩摩守殿

2571  
吉貴公御譜中

去月廿六日之御狀令拜見候、然者薩摩守殿御領分日向諸縣郡之内志布志と申所ニ、切支丹宗門ニ紛鋪道加と申者壹人被捕外付、於其許一通被逐御僉議、口問之越別紙三通ニ被書記之、此度御差越令到來外、右之儀ニ付從薩摩守殿爲御使者野村源助方被遣外、委細御紙面之通逸令承知外、右道加事早々當地に可被差越外、恐惶謹言、

朱力年  
寶永四年  
十二月五日

(長崎奉行)  
佐久間安藝守  
信就判  
(同)  
永井讚岐守  
直圍判

嶋津大藏様

嶋津中務様

新納市正様

嶋津帶刀様

種子嶋藏人様

御報

2572  
吉貴公御譜中

正文在文庫

被問安否芳緘披覽、先以勇健在國之由玆重思給外、爰許無吳事外、然者如目錄被惠寄誠親切之趣祝着不斜外、猶期後音不能多毫外、謹言、

朱力年  
寶永四年  
季冬六鳥

薩摩少將殿

(花押  
No.3)

2573  
吉貴公御譜中

一筆啓上仕外、薩摩守領分於志布志捕申外道加、切支丹宗門紛敷者ニ御座外付、先頃奉伺儀共御座外處、早々其御地に差上可申通被仰下外、貴答昨晚相達御紙上之趣則薩摩守に申聞外、依之右道加事今日爰元差立、向井市之丞と申者へ薩摩守より使者申付相添差上申外、何分ニ及宜御差圖奉頼外、恐惶、

朱力年  
寶永四年  
十二月十一日

久時

忠雄

久珍

久輝

久明

吉貴公御譜中

正文在文庫

永井讚岐守様

佐久間安藝守様

參人、御中

一筆致啓上外、甚寒之節御座外得共

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座之旨承之、恐悦之至奉存外、次貴様弥御堅固御在國可被成珍重之御事外、

然者私儀來年參勤時節奉伺外處、先頃領國地震高潮なる大破之趣達 上聞、依之先月廿七日以御奉書來年參勤御免被 仰出、誠以冥加至極難有仕合奉存外、右之趣爲可得貴意如此御座外、恐惶謹言、

朱力キ

寶永四年

十二月十三日

(山内)  
松平土佐守

豐隆判

松平薩摩守様

人々御中

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、隨

而蜜柑二箱并御肴一種被獻之外、各申談首尾好遂披露外、

全上

恐々謹言、

朱力キ

寶永四年

十二月十三日

秋元但馬守

喬朝判

松平薩摩守殿

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、隨而蜜柑并御肴被獻之外、紙面之趣得其意外、恐々謹言、

朱力キ

寶永四年

十二月十三日

(藤井)  
松平伊賀守

忠榮判

松平右京大夫

輝貞判

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

大納言様益御機嫌能被成御座、十月十四日 増上寺 御

佛殿 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣及高

聞外、恐々謹言、

朱力<sup>キ</sup>寶永四年 十二月十五日 本多伯耆守 正永判

松平薩摩守殿

2578 全上

御札令披見<sup>ハ</sup>、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤候、隨

而蜜柑二箱并御肴一種被獻之<sup>ハ</sup>、各申談首尾能遂披露<sup>ハ</sup>、

恐<sup>ク</sup>謹言、

朱力<sup>キ</sup>寶永四年 十二月十五日 秋元但馬守 喬朝判

松平薩摩守殿

2579 全上

御札令披見<sup>ハ</sup>、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤候、隨

而蜜柑二箱并御肴一種被獻之<sup>ハ</sup>、首尾好遂披露<sup>ハ</sup>、恐<sup>ク</sup>

謹言、

朱力<sup>キ</sup>寶永四年 十二月十五日 本多伯耆守 正永判

松平薩摩守殿

2580 全上

今般八重姫君御方痲瘡御順快珍重不斜<sup>ハ</sup>、依是御念入預

華翰欣然之至存<sup>ハ</sup>、恐<sup>ク</sup>謹言、

朱力<sup>キ</sup>寶永四年 十二月十五日 水戸中納言 綱條判

松平薩摩守殿

御報

2581 吉貴公御譜中

于<sup>レ</sup>茲有<sup>二</sup>道加者<sup>一</sup>、其形僧而舊住<sup>三</sup>居于肥之前州長崎<sup>一</sup>、

時來<sup>三</sup>薩隅日三州之郷邑<sup>一</sup>、其口<sup>一</sup>屢也、是歲寶永四年

十一月五日道加來<sup>三</sup>于日州諸縣郡志布志<sup>一</sup>、身自以<sup>三</sup>鬼利

支丹宗<sup>一</sup>、邪宗者是闔國之大禁也、是以受<sup>三</sup>令於長崎奉行

所<sup>一</sup>、同十二月十一日以<sup>三</sup>用人向井市之丞友貞<sup>一</sup>爲<sup>三</sup>監使<sup>一</sup>

使<sup>三</sup>物頭村田伊左衛門經宅、馬廻町田勘左衛門久與等<sup>一</sup>

護<sup>レ</sup>送道加於長崎<sup>上</sup>、詳見<sup>三</sup>于後<sup>一</sup>也、

2582 正文在文庫

尊札拜見仕<sup>ハ</sup>、先達<sup>レ</sup>被仰下<sup>ハ</sup>於御領内被召捕<sup>ハ</sup>邪宗門

二紛敷道加儀、今度警固之衆御差添被成被遣之、則今日

請取申<sup>ハ</sup>、依之御使者御口上之趣委細被入御念被仰下<sup>ハ</sup>

通承知仕<sub>レ</sub>、恐惶謹言、

朱力半  
寶永四年 十二月廿一日

(長崎奉行)  
別所播磨守 常治判

(同)  
永井讚岐守 直圍判

松平薩摩守様 尊報

2583

右より御返事

寒氣甚御座<sub>レ</sub>得共御勇健被成御座<sub>レ</sub>由、弥重奉存<sub>レ</sub>、隨  
ゝ者道加と申者宗旨ニ紛敷者故警固被相添被差越<sub>レ</sub>、兩  
人立合<sub>レ</sub>の請取申<sub>レ</sub>、委細之儀老書中ニ申上<sub>レ</sub>由、

十二月廿一日

向井市之丞

2584

吉貴公御譜中

正文在文庫

貴札致拜見<sub>レ</sub>、弥御堅固之旨珍重之御事<sub>レ</sub>、然老先頃御  
願之通嶋津淡路守殿初<sub>レ</sub>其地<sub>レ</sub>御越<sub>レ</sub>由、依之委細御紙  
面之趣承知仕被入御念儀御座<sub>レ</sub>、恐惶謹言、

朱力半  
寶永四年

十二月廿五日

井上河内守 正岑判

松平薩摩守様 御報

2585

全上

貴札致拜見候、愈御堅固珍重至御座<sub>レ</sub>、然老嶋津淡路殿  
に相互用事有之節、以後共其許に被罷越候儀御願之通相  
濟、今度初<sub>レ</sub>被參諸用等御達候之由、依之御紙面之趣致  
承知<sub>レ</sub>、恐惶謹言、

朱力半  
寶永四年 十二月廿五日

土屋相摸守 政直判

松平薩摩守様 御報

2586

吉貴公御譜中

正文在文庫

去廿二日尊札拜見仕候、甚寒節<sub>レ</sub>得共、弥御勇健旨珍重  
奉存<sub>レ</sub>、然老御領國日州諸縣郡志布志と申所<sub>レ</sub>の、邪宗  
門ニ紛敷者被召捕<sub>レ</sub>付、被遂御吟味委細之儀先達<sub>レ</sub>被仰  
下、則讚岐守拙者立合無相違請取申<sub>レ</sub>、委曲御家來衆<sub>レ</sub>  
被申越致承知誠被入御念儀奉存<sub>レ</sub>、猶期後音時<sub>レ</sub>、恐

惶謹言、

朱カキ  
寶永四年 十二月廿八日  
別所播磨守  
常治判

松 薩摩守様

尊報

2587 吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく御祝儀として御もく録之通御進上被成、幾  
まんく年かきりあらぬ御祝事のミと祝え入奉まい  
らせり、何も御めてたく御披露いたしりへくり、此  
よしよろしく御申入りへくり、めてたくかしく、  
さつまの守様より御ふミ下されり、

近衛左府様 關白様ニ御宣下被遊り御事めて度思しめし  
り、御祝儀と御座りて此御もく録之通大納言様へ御進上  
被成、かすくめて度さ則御ひろういたしまいらせり、  
幾干とせまんく年御機嫌共よく御長久御はんしやう被  
遊り、かきりあらぬ御賑くしき御悦事のミと祝く入  
まいらせ申へくり、

大納言様 御簾中様御機嫌よくならせられりまゝ、めて  
度覺しめしりやうニ御申入りへくり、

さつまの守様いよく御機嫌よく御座被成り事かすく  
御めて度さ、めてたくかしく、

朱カキ  
寶永四年

島津勘解由殿

梅小路

同 帶 刀殿

松むら

御返事

2588 正文在文庫

なをく御祝儀と御座りて御もく録の通進上被成、  
いく干とせ萬代も思しめしり御まゝに御機けん共よ  
く御長久御はんしやう被遊、かきりあらぬ御悦事の  
ミにて、御めて度さのミ仰まいらせられりハんと祝  
入奉りへくり、何も御まん足に覺しめしり通、よく  
心えいたしりて申せとの御事にて御さり、右の通よ  
ろしく御申入まいらせり、めてたくかしく、

さつまの守様より御ふミ下されり、

近衛左府様 關白様ニ御宣下被遊り御事、めて度覺しめ  
し、御悦と御座りて、此御もく録のとをり

御簾中様へ御進上被成、則ひろういたしまいらせり得ハ  
敷くめて度御まん足に覺しめしり、幾干とせ萬代と祝



いらせられ御まん足ニ思しめし外、いよく  
大納言様 御簾中様御機嫌よくならせられ外、御心や  
すく思しめし外やうに御申入りへく外、  
さつまの守様いよく御機嫌よく御座被成り御事めて度  
思しめし外、めてかしく、

朱力キ  
寶永四年

島津勘解由殿 ひて

同 帶 刀殿 つほね

御返事

2589 全御譜中

正文在文庫

爲歳暮之祝儀小袖五重到來歡覺候、委曲秋元但馬守可述  
外也、

寶永四年 十二月廿九日



薩摩少將殿

2590 吉貴公御譜中

正文在文庫

追申、爲支度要用外御目錄之表送給誠御懇情不淺存  
(允久總掌)  
外、從陽和院殿御懇意申給別ゝ忝存外、餘事期後音  
外、已上、

御札令披見外、倍御堅勝之由珍重存外、然者今度娘事蒙  
内侍 宣下之段難有仕合存外、依之爲御祝儀御目錄之通  
被掛 御意忝存外、尚期明春外、恐惶謹言、

朱力キ  
寶永四年 十二月晦日 交野宮内卿 時香

松平薩摩守様

御報

2591 吉貴公御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被  
獻之外、首尾好遂披露候、恐々謹言、

朱力キ  
寶永五年 正月十一日 本多伯耆守 正永判

小笠原佐渡守 長重判

松平薩摩守殿

2592 爲年頭之御祝儀以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻

2594

吉貴公御譜中

正文在文庫

被伸陽春之嘉儀芳書披閱、愈平安超歲之由玆重思給外、

2593

吉貴公御譜中

正文在文庫

御檜重一組被獻之外、遂披露候、恐々謹言、

朱力キ

寶永五年

正月十八日

喬朝判

松平薩摩守殿

秋元但馬守

喬朝

2595

此表同前外、仍如目錄賜之幾久令悅納外、萬喜期永日外、  
謹言、

朱力キ

寶永五年

端月廿一

薩摩少將殿

(近衛家庶)

(花押 No4)

全上

爲年甫之祝儀芳簡披閱、愈安穩超歲之由玆重思給外、此地無吳事外、仍如目錄惠賜幾久令悅納外、餘期永日外、

謹言、

朱力キ

寶永五年

孟春廿一

薩摩少將殿

(近衛家久)

(花押 No10)

2596

吉貴公御譜中

正文在文庫

舊冬左丞相蒙執柄 詔、因茲被投嘉札并如目錄惠來、誠

(近衛家庶)

懇慮之趣尤祝着思給外、謹言、

朱力キ

寶永五年

初春卅鳥

薩摩少將殿

基熙

全上

舊臘依蒙關白詔、使札殊如目錄送給遠境厚志之至不堪

感謝外、餘期後喜外、謹言、

朱力年

寶永五年

上春晦

(花押)

(No.4)

薩摩少將殿

全上

舊臘左相府關白

敕許、因茲遠境賀札且如目錄惠賜親切之至不淺令満足外、

餘期後慶外、謹言、

朱力年

寶永五年

孟陽晦

(花押)

(No.10)

薩摩少將殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、如承青陽之慶賀珍重外、先以

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、年始之御規式可

相濟と恐悦旨尤外、隨而御樽肴被獻之外、各申談首尾好

遂披露外、恐々謹言、

朱力年

寶永五年

閏正月十日

大久保加賀守

忠増判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見外、如承青陽之慶賀珍重外、先以

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、年始之御規式可

相濟と恐悦旨尤外、隨而御樽肴被獻之外、紙面之趣得其

意外、恐々謹言、

朱力年

寶永五年

閏正月十日

(藤井)

松平伊賀守

忠榮判

松平右京大夫

輝貞判

松平薩摩守殿

御札令披見外、如承新春之慶賀珍重外、先以

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相

濟と恐悦旨尤外、隨而御樽肴被獻之外、首尾好遂披露外、

恐々謹言、

朱力年

寶永五年

閏正月十日

本多伯耆守

正永判

松平薩摩守殿

2602 北郷家伊豆忠節譜中

寶永五年戊子閏正月十日奉請 吉貴公於廳府館、飾舞臺  
興行御能云々、

同六年十一月二十一日 太守吉貴公御成于廳府館、於舞  
臺有御能云々、

同七年閏八月二十六日 太守吉貴公赴武陽、忠置供奉  
云々、

同年十一月十五日忠置拜謁  
大樹家宣公云々、

2603 花岡邑主周防久儔初忠譜中

寶永五年閏正月十五日 忠英別樹家故獻ニ上御太刀馬代三  
種二荷一矣、

2604 吉貴公御譜中

正文在文庫  
御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將  
又參勤時分之儀以使者被相伺之外、及 高聞外處當六月

中可致參府由被仰出外、可被存其趣外、恐々謹言、

朱力平  
寶永五年 閏正月十三日

井上河内守 正岑判

大久保加賀守 忠増判

秋元但馬守 喬朝判

土屋相摸守 政直判

2605 全上

松平薩摩守殿

如承意陽春之嘉瑞不可有盡期外、其表弥無吳儀御超歲之  
旨玆重存外、遠程被入御念預示誨過當之至外、恐々謹言、

朱力平  
寶永五年 閏正月十三日

水戸中納言 綱條判

松平薩摩守殿

御報

2606

如御札陽春之御慶不可有休期外、其元御無爲玆重外、我  
等無恙越年之事外、入御念外段欣然之至存外、恐々謹言、

朱力平  
寶永五年 閏正月十三日

尾張中納言 吉通判

薩摩少將殿

御報

2607 如承意改春之佳幸不可有休期外、其表御無吳御越年之旨

弥重存外、依是瑤章之趣歡悅之至外、恐々謹言、

朱力年 寶永五年 閏正月十三日 水戸中將 吉孚判

松平薩摩守殿 御報

2608 全上

如芳翰青陽之嘉慶不可有盡期外、其許御無爲超歲之由珍重外、我等堅固令越年外、入御念外段欣然之至存外、恐々謹言、

朱力年 寶永五年 閏正月十三日 紀伊中納言 吉宗判

松平薩摩守殿 御返報

2609 吉貴公御譜中

正文在文庫

今度關白從一位拜敘之事被伸祝詞芳翰落手、丁寧之趣令満足外、其邊滋康強之由承悅外、愚老無恙外、謹言、

朱力年 寶永五年 閏正月廿九日 基熙

薩摩少將殿

2610 吉貴公御譜中

正文在文庫

華簡令手裏外、如來命新正之佳義同前外、先以勇猛越年之由承悅外、此邊無恙、仍目錄之通惠來連年懇志之趣尤令満足外、猶期永春外也、

朱力年 寶永五年 仲春上浣 基熙

松平薩摩守殿

2611 全上

今度依關白敘位之事被伸祝詞華簡落手、親切之至怡悅不斜外、餘期後音外、謹言、

朱力年 寶永五年 如月初三 (花押 No10)

薩摩少將殿

2612 全上

芳簡披覽愈平安珍重外、舊臘被獻 洞中之繪卷物令執奏奉書到來、仍令授與之處被畏存之趣、且目錄之通贈給丁

寧之至慶悦不少外、餘期後音外、謹言、

朱力キ

寶永五年

春半初六

(花押 No.4)

薩摩少將殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

八重姫君様就御安産、爲御祝儀如目錄被獻之外、首尾好

遂披露外、恐々謹言、

朱力キ

寶永五年

二月七日

井上河内守

正岑判

大久保加賀守

忠増判

秋元但馬守

喬朝判

土屋相摸守

政直判

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

如御札紀伊國殿舊臘被任中納言玆重之事外、依之入御念

外段欣然之至存外、恐々謹言、

朱力キ  
寶永五年

二月十七日

尾張中納言

吉通判

薩摩少將殿

御報

2615  
全上

就紀州中納言方任官賀章之趣遠程被入御念之段過當之至

存外、恐々謹言、

朱力キ

寶永五年

二月十七日

水戸中將

吉孚判

松平薩摩守殿

御報

2616

吉貴公御譜中

正文在文庫

如芳翰舊臘我等任官被仰出忝儀外、依之爲祝詞目錄之通

贈給之遠境入御念外之段欣然之至存外、恐々謹言、

朱力キ

寶永五年

二月十八日

紀伊中納言

吉宗判

松平薩摩守殿

御返報

2617

吉貴公御譜中

正文在文庫

葛粉一箱被獻之、遂披露候、恐、謹言、

二月廿二日

長重判

松平薩摩守殿

小笠原佐渡守  
長重

2618 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、

公方様正月廿日東叡山 御堂 御參詣之儀被承之、恐悦

旨尤、紙面之趣各申談及

高聞、恐、謹言、

朱力年 寶永五年 二月廿六日

井上河内守  
正岑判

松平薩摩守殿

2619 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、

公方様正月廿四日増上寺 御佛殿 御參詣之儀被承之、

恐悦旨尤、紙面之趣各申談及

高聞、恐、謹言、

朱力年 寶永五年 二月廿八日

井上河内守  
正岑判

松平薩摩守殿

2620 全上

御札令披見、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、

公方様正月廿四日増上寺 御佛殿 御參詣之儀被承之、

恐悦旨尤、紙面之趣得其意外、恐、謹言、

朱力年 寶永五年 二月廿八日

松平伊賀守  
忠榮判

松平右京大夫  
輝貞判

松平薩摩守殿

2621 全上

御札令披見、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、

公方様正月廿日東叡山 御堂 御參詣之儀被承之、恐悅  
旨尤候、紙面之趣得其意、恐、謹言、

朱カキ  
寶永五年 二月廿六日

松平伊賀守 忠榮判

松平右京大夫 輝貞判

松平薩摩守殿

(挿入文書)  
評定所

一 士中御僉儀ニ付御糺明場ニ召出ものへハ、縁類親類  
又ハ近所之者之内壹人相付参り様可申渡外、勿論親子  
兄弟之内者先格之通不付來り様に可申付外、士以下者  
或ハ其主人、或ハ支配頭を警固之者壹人相付差出り様  
可申付外、門番所ニおひて右趣を以稠敷相改り様可申  
付外、將又御糺明ニ付る召寄り者門外に用事有之由申  
外とも留め不出、外より用事之由申來者有之とも不致  
通達様ニ門番人ニ堅く可申付、糺明有之外者へ裏表之  
門番所ニ足輕を出置、惣め出入之者爲相改可申事、  
一 論人・證據人又者其引方之者者用所不差出置、其者と  
も之近邊に者段々足輕を入置、巾合なと致さる様爲制  
可申事、

一 惣め被遂御僉議外者、又者證據ニ立外者召出り節者、  
前々之通脇差を爲指外て可召出事、

一 御僉儀ニ付る座中に召出外ものハ、前々之通御兵具所  
肝煎貳人ニ列立、御問付之内其者之左右に付置、召  
出外應人數末席に足輕出置可申事、  
付 蜜事を致問付之節者足輕等を退去可致口問事、

一 庭上召出外者之儀ハ應人數前後ニ足輕相付列出之、口  
問之内者右左に付置可申、拷問之節も右同斷之事、

一 御穿鑿ニ付る出家山伏召出り節者、何程官位有之者ニ  
も中敷居より上座之方壹疊目之席に召出し可致糺問  
事、

付 山伏ニも又内之儀中敷居より下は可召出事、  
一 士之儀も右同席ニ召出し可遂糺問事、  
付 士ニも爲御僉儀上り屋に被召込置外者者、中敷  
居より下はかひ付ニも可召出事、

一 表奥足輕・御中間・御小者并袴を着せ被召仕外程之家  
來者、中敷居より下之方二疊目之席ニ可召出事、

一 諸座付之職人又者社人・寺門前之者も右同席ニ可召出、  
乍然右格之者にて袴をも不致着、人足同前ニ相見得外  
体之者ハ庭上に可召出事、



一 外城衆中又内ニ致奉公罷在ハ者者、其主人召仕ハ品ニ  
應シ可召出事、

一 百姓町人其外下人之儀も庭上可召出、上下西田町年寄・  
年行司其外致 御目見ハ町人之義者、家來召出ハ席ニ  
おひテ可遂糺明事、

一 籠込之者召寄ハ節者中途入念ハ様警固之者ハ時々可申  
付ハ付ル、召寄ハ節も稠敷番人可付置事、

一 士ニ被遂僉儀ハ義有之付上リ屋ハ召置ハ者も、士之格  
式を迦ハ段無紛相究ハ以後者前々通打込ニ可被召込置  
事、

右之通無緩疎様可申付、警固等之儀ハ物頭にも申渡  
置ハ間、大御目付よりも時々可有沙汰者也、

寶永五年子二月日

藏人

帶刀

市正

中務

大藏

一口事糺明之儀ハ毎月五日・十二日・十八日・廿二日・

廿五日ニ被定置ハ間、大御目付之義ハ當番之外不殘寺  
社奉行壹人、御勘定奉行壹人、表御用兩人、町奉行壹  
人、表御目付兩人、口事奉行不殘朝五ツ過より御糺明  
場ハ無遲參可罷出、口事等之義者糺明之趣ニ付ル、其  
者及浮沈事ハ得者誠ニ大切なる事ハ、惡意深き者者靜  
論等を不起以前手前ニ道理有之ハ様申觸置、其後論を  
起シハものも可有之ハ、又者天性口上無調法なる者も  
可有之ハ、又者平日自餘之行跡ニ付ル不宜聞得者な  
と者舊惡之聞得を以當然之仕形迄も押テ疑深ク成行義  
も可有之ハ、惣而最初聞入置ハ筋道理之様偏頗之雜念  
出間敷ハものこゝも無之ハ間、右躰之義別而入念勿論  
最眞無偏頗明白可致糺明事、

付被定置ハ糺明日故障付ル召延ハ節者、其譯月番御  
家老ハ大御目附より申出置、其後無故障日に可致  
糺明ハ、被定置ハ日數不欠様可致事、

一 論人不召出以前、雙方之訴狀等口事奉行讀之、且又御  
僉儀有之ハ者ハ其いつれも委細承届糺問之次第申談、  
左候テ論人證據人等或ハ壹人或ハ壹所ニ先ツ其者之心  
底不殘置様一通申伸させ、其後段々可致口問ハ、第一

其事之本意を先髓ニ相糺、子細之儀者其以後可相糺、

不肝要端々之儀ニ手間不取やう可致沙汰、糺問之一筋ニ不構義申出者有之ハとも、先格之通取揚間敷ハ、然なから不被打置惡意之注進杯申出儀ハ可爲格別事、

一口問之者申分一筋之内肝要なる所者先格之通早速書留させ、其一卷之口問相濟ハハ其者とも之申分之内肝要成一筋迄を相記、不肝要ハ義ハ勿論差捨、左ハ右銘々仕形ニ付ハ是非之輕重までも別ニ致吟味口聞書之趣意を相究、尤清書之義者追ハ可相調、右之通一段之糺明相濟ハ以後別段之糺明取懸可申事、

一右之趣を以口聞書早々書調、御家老座におひて先格之通口事奉行讀之可有披露ハ、勿論其事糺明之節立合ハ面々も前々之通御家老座に罷出、口聞書之書面までにて者旨趣不達義候ハ、無遠慮可申達事、

一糺明之上越度相究籠込申付、又者爲御僉儀上り屋に遣し置、又者親類與中などへ預置、又者遠慮逼塞等之義者前々之通早速申付、翌日其首尾月番御家老衆に大御目附衆より可申達置、且又右之通申付置ハ者を吟味之上差免ハ節も其譯月番御家老衆へ可申届置事、

一鹿兒島に御穿鑿に付て申披無之、被召込置ハ義可有之

哉と考ハ者可有之節者、御穿鑿前日大御目附より月番

御家老に其案内可申置ハ、且又至其日ニ與風可被召込次第に成行ハ者可有之節者、難差置譯ニ付召込ハ段御糺明付相勤ハ御用人を以、月番御家老に案内申置ハ上可召込、外城衆中之義者先格之通吟味次第申付、是又翌日大御目附より首尾可申出事、

一末々之者にても籠込に申付ハ節者是又御目附より月番御家老衆に翌日其譯可申出事、

一糺明相濟ハ以後者證據證文等を出ハ者可有之ハとも、先格之通取揚間敷ハ、然しなから無紛道理相見得ハ義者可爲格別事、

付糺問之半氣儘に座席を立披、又者對奉行人致雜言者あらハ早速先格之通可爲擲事、

一士之格式を迦しハ義ニ付、御僉儀におよび被召込置、有筋を白狀致さず偽りを申通りハニ付ハ者、早竟其譯不埒明義可有之節者、其段月番御家老に得差圖ハ上、士にても拷問可申付、將又申分實儀に者不相聞得筋に申通、口問までにてハ實儀不相究もの有之候とも、士之格式不迦ものハ嗽問申付に者及問敷ハ、右躰之者者其意に應し被仰付様可有之事、

一 御僉儀等之義専ら大御目附并口事奉行引受りて始終之

首尾可相勤、寺社支配之者召出し節者寺社奉行、郡

座支配之者召出し節者御勘定奉行、町方之者召出し

節者町奉行、右之通支配方之者召出し節者右面々大

御目附同前引受りて可致糺明事、

一 於糺明場士中被召込義又ハ逼塞遠慮等申付節者、

先格之通御用人より可申渡、士以下は右式之義申付

節者口事奉行より可申渡事、

右之通此節被

仰出外間、謹て奉承知、口事糺問等無滞早々明白

埒明様出精可相勤者也、

寶永五年子二月日

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、

公方様先頃護持院被爲 成り儀被承之、恐悦旨尤り、紙

面之趣各申談及 高聞候、恐々謹言、

宋力キ 寶永五年 三月三日 秋元但馬守

喬朝判

松平薩摩守殿

2625 全上

御札令披見り、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、

大納言様先頃根津權現 御社參之儀被承之、恐悦旨尤り、

紙面之趣及 高聞り、恐々謹言、

宋力キ 寶永五年 三月三日 本多伯耆守 正永判

松平薩摩守殿

全上

2626

御札令披見り、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、

公方様先頃護持院被爲 成り儀被承之、恐悦旨尤り、紙

面之趣得其意り、恐々謹言、

宋力キ 寶永五年 三月三日 (藤井) 松平伊賀守 忠榮判

松平右京大夫

輝貞判

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

まことに幾まんく年もといわぬ入奉りまいらせ  
外、此よしよろしく御申入りへくり、何もよく心え  
まいらせりて申せとの御事ニ御さり、めてかしく、  
さつまの守様より文下されり、まつく

御ふた御所様御機嫌よくならせられりまゝ、御心やすく  
おほしめしりやうニ御申入りへくり、薩摩守様御機嫌  
よく御座なされり御事めてたく存まいらせり、さてハ  
御簾中様方

左府様 關白宣下の御祝義、閏正月五日ニ堀源左衛門御  
使にて さつまの守様 おく様へ參らせられり御事、か  
たしけなくおほしめしりとの御事にて、文のやう何もひ  
ろういたしりへくり、めてかしく、

朱カキ  
寶永五年三月六日

カ

嶋津勘解由殿

梅小路

同 帶 刀殿

御返事

まつ村

全上

誠ニ幾萬々年とめてたくそんしまいらせり、此よし

よろしく御申入りへくり、何もよく心えまいらせりて  
申せとの御事にて御座り、かしく、

薩摩守様より文下されり、まつく

御二御所様御機嫌よくならせられりまゝ、御心やすくお  
ほしめしりやうニ御申入りへくり、

さつまの守様ニも御機嫌よくならせられり御事かすく  
めてたく存まいらせり、さては閏正月五日堀源左衛門御  
使にて、

關白宣下の御しうき御もく鎚の道參らせられり御事、か  
たしけなく思しめしりよし、奥様へも參らせられり御事、  
忝思しめしりとの御事にて、文のやう則ひろういたしま  
いらせりへは、御念入らせられり御事ニ思しめしり、め  
てかしく、

朱カキ  
寶永五年三月六日

嶋津勘解由殿

ひて

同 帶 刀殿

御返事

つほね

吉貴公御譜中

正文在文庫

去八日自市店出火、

内裏 院中炎上、於家門遁其難、即日

四御所渡御家熙亭、頃日

女院 中宮邊幸他所、

主上耆表方 東宮耆裏方可爲御假殿之由直御治定、今度

之儀不思議之奉公

叡感之事眉目之至、於其方可爲畏悅察存外條旁啓案内外也、謹言、

朱力キ  
寶永五年

春末十四

(花押 No4)

薩摩少將殿

2630

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、

大納言様閏正月十四日増上寺 御佛殿 御參詣之儀被承

之、恐悦旨尤外、紙面之趣及 高聞外、恐々謹言、

朱力キ  
寶永五年

三月十九日

(多) 本田伯耆守

正永判

松平薩摩守殿

2631 吉貴公御譜中

正文在文庫

御肴一種被獻之候、首尾好遂披露外、恐々謹言、

朱力キ  
寶永五年

四月朔日

正永判

松平薩摩守殿

本多伯耆守

正永

2632

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、

公方様先頃日光准后被爲 成外儀被承之、恐悦旨尤外、

紙面之趣各申談及 高聽外、恐々謹言、

朱力キ  
寶永五年

四月二日

土屋相摸守

政直判

松平薩摩守殿

2633

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、

公方様先頃(御法附院)日光准后被爲 成レ儀被承之、恐悦旨尤レ、

紙面之趣得其意レ、恐レ謹言、

朱力キ

寶永五年 四月二日

松平伊賀守 忠榮判

松平右京大夫 輝貞判

松平薩摩守殿

2634 吉貴公御譜中

寶永五年戊子四月十日吉貴爲參觀發國、氏族島津玄蕃忠

直、家老島津帶刀忠雄、若年寄種子島彈正伊時、側用人

比志島藤右衛門範房・菱刈新五兵衛重格、表用人市來次

郎左衛門家賢・平田清右衛門純旨等從レ之、同十八日開二

船于和泉水又出脇本(A、B)、五月七日著三船播州室津、自レ是取レ

陸而經三播摩路(A、B)同十二日著大坂、同十六日至三伏見、同

二十日發三伏見二乃東行也、

2639 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、

公方様先頃松平美濃守亭被爲 成レ儀被承、恐悦旨尤レ、

紙面之趣各申談及 高聞レ、恐レ謹言、

朱力キ

寶永五年 四月十一日

土屋相摸守 政直判

松平薩摩守殿

2636

全上

御札令披見レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、

公方様先頃松平美濃守亭被爲 成レ儀被承之、恐悦旨尤

外、紙面之趣得其意レ、恐レ謹言、

朱力キ

寶永五年 四月十一日

松平伊賀守 忠榮判

松平右京大夫 輝貞判

松平薩摩守殿

2637

全上

御札令披見レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤候、將

又二月朔日

八重姫君様御安産目出度被存由得其意外、依之被差越使者候、紙面之趣各申談及、高聞外、恐々謹言、

朱力キ  
寶永五年 四月十一日  
土屋相摸守  
政直判

松平薩摩守殿

2638

全上  
御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又二月朔日 八重姫君様御安産目出度被存由得其意外、依之被差越使者候、紙面之趣及 高聞外、恐々謹言、

朱力キ  
寶永五年 四月十一日  
小笠原佐渡守  
長重判

松平薩摩守殿

2639

全上  
御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又二月朔日

八重姫君様御安産目出度被存由紙面之趣得其意外、恐々謹言、

朱力キ  
寶永五年 四月十一日  
松平伊賀守  
忠榮判

松平薩摩守殿

2640

吉貴公御譜中  
正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、公方様先頃松平右京大夫亭被爲 成外儀被承、恐悦旨尤候、紙面之趣各申談及言上外、恐々謹言、

朱力キ  
寶永五年 四月十四日  
土屋相摸守  
政直判

松平薩摩守殿

2641

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、

公方様先頃右京大夫亭被爲 成外儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣得其意外、恐々謹言、

朱力平  
寶永五年 四月十四日

松平伊賀守  
忠榮判

松平右京大夫  
輝貞判

松平薩摩守殿

2642 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、

大納言様先頃松平美濃守亭被爲 成外儀被承之、恐悦旨

尤外、紙面之趣及 高聞外、恐々謹言、

朱力平  
寶永五年 四月廿三日

小笠原佐渡守  
長重判

松平薩摩守殿

2643 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、

公方様先頃松平伊賀守亭被爲 成外儀被承、恐悦旨尤外、

紙面之趣各申談及 高聽外、恐々謹言、

朱力平  
寶永五年 四月廿七日

土屋相摸守  
政直判

松平薩摩守殿

2644 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、

公方様先頃伊賀守亭被爲 成外儀被承之、恐悦旨尤外、

紙面之趣得其意外、恐々謹言、

朱力平  
寶永五年 四月廿七日

松平伊賀守  
忠榮判

松平右京大夫  
輝貞判

松平薩摩守殿

2645 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、

公方様先頃成滿院被爲 成外儀被承之、恐悦旨尤外、紙

面之趣各申談及 高聞外、恐々謹言、



朱力<sup>キ</sup> 寶永五年 四月廿九日

松平薩摩守殿

土屋相摸守  
政直判

2646

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、

公方様先頃成滿院被爲 成外儀被承之、恐悦旨尤外、紙

面之趣得其意外、恐々謹言、

朱力<sup>キ</sup> 寶永五年 四月廿九日

松平伊賀守

忠榮判

松平右京大夫

輝貞判

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀帷子單物數十到來歡覺候、委曲井上河内守

可述外也、

朱力<sup>キ</sup> 寶永五年 五月三日



2648

全上

薩摩少將殿

爲端午之御祝儀、以使者如目錄被獻之外、首尾好遂披露候、恐々謹言、

朱力<sup>キ</sup> 寶永五年 五月三日

本多伯耆守

正永判

小笠原佐渡守

長重判

松平薩摩守殿

2649

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、

大納言様二月廿九日東叡山 御佛殿 御參詣之儀被承

之、恐悦旨尤外、紙面之趣及 高聞外、恐々謹言、

寶永五年 五月七日

本多伯耆守

正永判

松平薩摩守殿

6250

吉貴公御譜中

2652

全上

御札令披見外、

松平薩摩守殿

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、  
 公方様先頃觀音堂 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙  
 面之趣得其意外、恐々謹言、

朱力キ  
 寶永五年 五月十日

松平伊賀守 忠榮判  
 松平右京大夫 輝貞判

2651

全上

御札令披見外、

松平薩摩守殿

正文在文庫  
 御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、  
 公方様先頃觀音堂 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙  
 面之趣各申談及 高聽外、恐々謹言、

朱力キ  
 寶永五年 五月十日

大久保加賀守 忠増判

2654

全上

御札令披見外、

松平薩摩守殿

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又  
 今度 立坊 立后相濟外段被承之、目出度被存由得其意

朱力キ  
 寶永五年 五月十一日

大久保加賀守 忠増判

2653

全上

御札令披見外、

松平薩摩守殿

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、  
 大納言様先頃濱御殿被爲 成外儀被承之、恐悦旨尤外、  
 紙面之趣及 高聞外、恐々謹言、

朱力キ  
 寶永五年 五月十日

本多伯耆守 正永判

外、依之被差越使者外、紙面之趣及 高聞外、恐々謹言、

朱力年

寶永五年

五月十一日

本多伯耆守

正永判

松平薩摩守殿

2655

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又今度 立坊 立后相濟外段被承、目出度被存由紙面之

趣得其意外、恐々謹言、

朱力年

寶永五年

五月十一日

松平伊賀守

忠榮判

松平右京大夫

輝貞判

松平薩摩守殿

2656

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、

公方様先頃山王御社參之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之

趣各申談及 高聞外、恐々謹言、

朱力年

寶永五年

五月十八日

大久保加賀守

忠増判

松平薩摩守殿

2657

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、

公方様先頃山王御社參之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之

趣得其意外、恐々謹言、

朱力年

寶永五年

五月十八日

松平伊賀守

忠榮判

松平右京大夫

輝貞判

松平薩摩守殿

2658

全上

御札令披見外、三月八日於京都從町屋出火、

禁裏御所方御殿炎上、驚被存之由得其意外、依之被差越

使者外、紙面之趣各申談及 高聽外、恐々謹言、

朱力年

寶永五年

五月十九日

大久保加賀守

忠増判

2661

吉貴公御譜中  
正文在文庫

松平薩摩守殿

2660

全上

松平薩摩守殿

2659

全上

松平薩摩守殿

御札令披見<sup>レ</sup>、三月八日於京都從町屋出火、  
 禁裏御所方御殿炎上、驚被存之由得其意<sup>レ</sup>、依之被差越  
 使者<sup>レ</sup>、紙面之趣及 高聞候、恐<sup>レ</sup>謹言、  
朱力半寶永五年 五月十九日 本多伯耆守 正永判

御札令披見<sup>レ</sup>、三月八日於京都從町屋出火、  
 禁裏御所方御殿炎上、驚被存之由得其意<sup>レ</sup>、紙面之趣承  
 届<sup>レ</sup>、恐<sup>レ</sup>謹言、  
朱力半寶永五年 五月十九日 松平伊賀守 忠榮判

松平右京大夫 輝貞判

2662

全上

松平薩摩守殿

先頃我等就差合芳翰之趣入御念儀存<sup>レ</sup>、恐<sup>レ</sup>謹言、  
朱力半寶永五年 五月廿一日 紀伊中納言 吉宗判

今般松姫君御方爲御養女 御城江御入<sup>レ</sup>付、被入御念芳  
 翰之趣欣然之至存<sup>レ</sup>、恐<sup>レ</sup>謹言、  
朱力半寶永五年 五月廿二日 水戸中納言 綱條判

松平薩摩守殿 御報

2663

全上

薩摩少將殿 御報

御札令披閱<sup>レ</sup>、松姫君様御本丸江被爲入<sup>レ</sup>付、御念  
 入<sup>レ</sup>段欣然之至存<sup>レ</sup>、恐<sup>レ</sup>謹言、  
朱力半寶永五年 五月廿二日 尾張中納言 吉通判

2664

全上

芳翰令披見<sup>レ</sup>、今度 松姫君御方御養女被仰出<sup>レ</sup>付、

入御念外之段欣然之至存外、恐く謹言、

朱力年  
寶永五年 五月廿二日 紀伊中納言 吉宗判

松平薩摩守殿

御返報

2665 全上

今般尾張中納言方妹御養女被 仰出外付、被入御念示諭之趣欣然之至存外、恐く謹言、

朱力年  
寶永五年 五月廿二日 水戸中將 吉孚判

松平薩摩守殿

御報

2666 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又尾張中納言殿御妹 御養子被仰出之、目出度被存之由得其意外、依之被差越使者外、紙面之趣各申談及 高聞外、恐く謹言、

朱力年  
寶永五年 五月廿三日

大久保加賀守 忠増判

松平薩摩守殿

2667 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又尾張中納言殿御妹御養子被 仰出、目出度被存之由得其意外、依之被差越使者外、紙面之趣及 高聞外、恐く謹言、

朱力年  
寶永五年 五月廿三日 本多伯耆守 正永判

松平薩摩守殿

2668 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又尾張中納言殿御妹御養子被 仰出之、目出度被存由紙面之趣得其意外、恐く謹言、

朱力年  
寶永五年 五月廿三日 松平伊賀守 忠榮判

松平薩摩守殿

松平右京大夫 輝貞判

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、

公方様先頃進休庵被爲 成外儀被承之、恐悦旨尤外、紙

面之趣各申談及 高聞外、恐々謹言、

朱力キ 寶永五年

五月廿五日

大久保加賀守

忠増判

松平薩摩守殿

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、

公方様先頃進休庵被爲 成外儀被承之、恐悦旨尤外、紙

面之趣得其意外、恐々謹言、

朱力キ 寶永五年

五月廿五日

松平伊賀守

忠榮判

松平右京大夫

輝貞判

松平薩摩守殿

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又松姫君様御縁組之儀被 仰出、目出度被存由得其意外、

依之被差越使者外、紙面之趣各申談及 高聞外、恐々謹

言、

朱力キ 寶永五年

五月廿六日

大久保加賀守

忠増判

松平薩摩守殿

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又今度

松姫君様御縁組被 仰出目出度被存由得其意外、依之被

差越使者候、紙面之趣及 高聞外、恐々謹言、

朱力キ 寶永五年

五月廿六日

本多伯耆守

正永判

松平薩摩守殿

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦之旨尤々、  
將又 松姫君様御縁組之儀被 仰出目出度被存由紙面之  
趣得其意々、恐々謹言、

朱力\*  
寶永五年 五月廿六日

松平 伊賀守 忠榮判  
松平右京大夫 輝貞判

松平薩摩守殿

2674 吉貴公御譜中

正文在文庫

今般松姫君御方御縁組被 仰出候付、芳翰之趣被入御念  
外之段過當之至存外、恐々謹言、

朱力\*  
寶永五年 五月廿七日

水戸中納言 綱條判

松平薩摩守殿

御報

2675 全上

瑤章令披閱外、

松姫君御方御縁組被 仰出外付、遠程示諭之趣被入御念  
外段欣然之至存外、恐々謹言、

朱力\*  
寶永五年 五月廿七日 水戸中將 吉孚判

松平薩摩守殿 御報

2676 全上

芳翰令披見外、先頃

松姫君御方松平若狹守所に御入與之儀被 仰出外付、  
入御念外段欣然之至存外、恐々謹言、

朱力\*  
寶永五年 五月廿七日

紀伊中納言 吉宗判

松平薩摩守殿 御返報

2677 吉貴公御譜中

正文在文庫

猶以家來兩人

御目見被 仰付外間、召連可被罷出外、以上、  
明十二日四時登 城、參勤之御禮可被申上外、以上、

朱力\*  
寶永五年 六月十一日

井上河内守 (正峯)

大久保加賀守 (忠増)

秋元但馬守 (霜朝)

2680

吉貴公御譜中

正文在文庫

寶永五年戊子四月十日 太守吉貴公爲參勤赴東武、忠直供奉、五月廿八日到江府、六月十二日拜二謁大樹綱吉公一進獻同レ先例、寶永八年辛卯六月二十五日死、年二十四、

2679

玄蕃忠直譜中綱貴公三男

規一奉レ謁二 台顔一也、大樹一矣、是日氏族島津忠直、家老島津忠雄等亦以二先見三于

2678

全御譜中

松平薩摩守殿

土屋相摸守(彼直)

駕是五月二十日發レ伏見、取二道於美濃路一 出三東海道一、經二本坂一 六月四日參府也、同五日

大樹綱吉公以三土屋相摸守政直一來二於櫻田第二勞二於吉貴之遠來一、同十二日登三 玉營一奉三獻先賜之幣物二而奉レ見三于

2682

吉貴公御譜中

正文在文庫

端午之 御内書可相渡外間、明日五半時 御城の家來可被差出外、以上、

朱力キ

寶永五年

六月廿二日

井上河内守

2681

全上

松平薩摩守殿

井上河内守

正岑

琉球布十卷・砂糖漬天門冬一器・泡盛酒二壺并御肴一種被獻之外、首尾好遂披露外、恐々謹言、

朱力キ

寶永五年

六月十五日

正岑判

朱力キ  
寶永五年

六月十五日

長重判

琉球布十卷・泡盛酒二壺・砂糖漬天門冬一器并御肴一種被獻之外、首尾好遂披露外、恐々謹言、

松平薩摩守殿

小笠原佐渡守

長重



松平薩摩守殿

2683 全上

御札令拜見外、暑氣甚鋪外得共弥御堅固之旨珍重存外、然者駿府御手傳相濟申外、爲祝儀目錄之通致進覽外處、御禮被仰下御懇懃之至存外、恐惶謹言、

朱カキ  
寶永五年 六月廿三日

松平越中守  
定重判

松平薩摩守様

御報

2684 吉貴公御譜中

正文在文庫

さつまの少將より御機嫌うかゝはれ外とて、あいらしき物とも色くしん上り、ひろう申て外へはとりくにあさからすなかめいらせられ外よし、いかはかりと御心得おハし申し外てつたへさせられ外やうに申とて外、此よしよくく申へく外、かしく、

御いまの

御局へまいる

春宮令旨寶永五  
七三

2685 全御譜中

正文在文庫

さつまの少將より御きけんうかゝはれ外とてめつらしき物としん上り、とりくになかめ入まいらせられ外よし、そこ御ほとよりひろう申て外へは、此よしよくくつたへさせおハし申し外やうに申へく外、めてかしく、

此所明ク

返くたひく心入に進上外事よくくつたへさせられ外やうに申せとて外、いくえにもおもしろく覺えさせおハし申し外、

御いまの御局へ

まいる申給へ

仰寶永五  
七二

2686 全御譜中

正文在文庫

今度

禁裏春宮御方珍奇之品々御献上之 殿下御奏達之處、御

機嫌之御事(マ)、如房奉書從殿下可被相達ハ得共、從時方

猶御感不淺之旨可申遣之由被

仰出候、仍如此ハ、謹言、

朱力キ  
寶永五年 七月三日

時方

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令拜見ハ、愈御堅固之旨玆重存候、如仰駿府御普請

出來仕ハ付、去廿八日同氏因幡守被爲 召、時服頂戴仕

難有仕合奉存ハ、御悅被仰聞忝存候、恐惶謹言、

朱力キ  
寶永五年 七月四日

松平越中守  
定重判

松平薩摩守殿

御報

吉貴公御譜中

同年七月二十九日執政下ニ奉書ニ吉貴勤ニ増上寺火之番、

翌年夏長州萩城主松平(毛)民部大輔吉元・阿州德島城主松平(森須)

淡路守綱矩代ニ于吉貴勤レ之、

正文在文庫

増上寺火之番被 仰付ハ間、被得其意可有勤仕ハ、以上、

朱力キ  
寶永五年 七月廿九日

井上河内守

大久保加賀守

秋元但馬守

土屋相摸守

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

先頃被獻

禁裏春宮之品々就令執奏、被仰下之奉書令贈與之處、慥

懃之書面祝着ハ、尚期後信ハ、謹言、

朱力キ  
寶永五年 仲秋廿五

(花押 No.4)

薩摩少將殿

2691

追申、先達ハ陽和院殿申進ハ趣御承知之由承ハ、  
貴札令拜見候、然者先頃

禁裏春宮品々御獻上則從殿下女房奉書兩通被傳之候、且

又御感之趣申進下處、御冥加之至辱思召下由御尤事下、  
御禮之事御報被示下下時分宜様令言上下、仍御目錄之通  
被贈下下、入御念下儀辱被受納下、恐惶謹言、

朱力子  
寶永五年

八月廿八日

平松中納言

時方

松平薩摩守様

御報

(表紙)

追 舊 記 雜 錄  卷四十一	吉 貴 公	自寶永五年九月
	繼 豐 公	至同 六年三月

2692

吉貴公御譜中

正文在文庫

七月廿八日之尊札拜見仕候、然者六月廿六之夜、當地從町屋出火、家屋數多燒亡之所、出島唐人屋鋪并御役屋敷等無別條相鎮大慶仕、依之被示下、趣、被入御念御儀奉存、恐惶謹言、

朱力半  
寶永五年  
九月三日

松 薩摩守様

尊報

別所播磨守  
常治判

2693

吉貴公御譜中

正文在文庫

先頃依執奏之事、再三之謝儀且目錄之通賜之、懇切之程令怡悦、尚期後音、謹言、

朱力半  
寶永五年  
晚秋初六

(近衛家慰)  
(花押)  
No.4

薩摩少將殿

2694

吉貴公御譜中

正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖五到來歡覺、委曲秋元但馬守可述候也、

朱力半  
寶永五年  
九月七日

綱吉 公墨印

薩摩少將殿

2695

全上

爲重陽之御祝儀、以使者如目錄被獻之外、首尾好遂披露候、恐々謹言、

朱力半  
寶永五年  
九月七日

本多伯耆守  
正永判

小笠原佐渡守  
長重判

松平薩摩守殿

2696 吉貴公御譜中

吉貴奉<sup>ニ</sup>獻龍蹄<sup>ニ</sup>二匹于  
大樹綱吉公、同一匹于 家宣公、是每<sup>ニ</sup>參府<sup>ニ</sup>職禮之後  
以<sup>ニ</sup>先蹤<sup>ニ</sup>所<sup>レ</sup>獻<sup>レ</sup>之也、

正文在文庫

御馬一疋被獻之外、首尾好遂披露候、恐々謹言、

寶永五年 九月十二日 忠増判

松平薩摩守殿

大久保加賀守  
忠増

全上

御馬一疋被獻之外、首尾能遂披露候、恐々謹言、

寶永五年 九月十二日 正永判

松平薩摩守殿 本多伯耆守  
正永

2699 吉貴公御譜中

寶永五年八月二十九日、隅州馭讓郡益救島(熊毛郡)今作屋之南、<sup>コト</sup>怒泊<sup>トマ</sup>、村之鄉民等怪<sup>ニ</sup>捕一人之異人、不<sup>レ</sup>知<sup>ニ</sup>何國者、其相顔色白隆準而判<sup>ニ</sup>頭於日本之姿、着<sup>ニ</sup>日本之衣服、帶<sup>ニ</sup>日本之刀、語音異而不<sup>レ</sup>用<sup>ニ</sup>漢字<sup>ニ</sup>横書<sup>ニ</sup>文字、時異

人自以<sup>ニ</sup>羅馬國鬼利支丹<sup>ニ</sup>片言漸通也、夫鬼利支丹者吾朝之大禁、而豫下<sup>レ</sup>令不<sup>レ</sup>忽<sup>レ</sup>之法制也、是故益救島警衛之士肝屬<sup>ニ</sup>三右衛門兼近先是便下川上七郎次郎忠長歷<sup>ニ</sup>益救島、以<sup>ニ</sup>兼道、副上<sup>レ</sup>之、時忠長病死以故兼近所監<sup>ニ</sup>島中之事也

其外步卒之士各會談、而先禁<sup>ニ</sup>錮異人<sup>ニ</sup>以<sup>ニ</sup>飛船<sup>ニ</sup>達<sup>ニ</sup>于廳府、雖<sup>レ</sup>然、吉貴述<sup>ニ</sup>職江都<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>國也、國老島津久明、島津久當(監異國方)、新納久珍、種子島久時各相議、受<sup>ニ</sup>令於肥之前州長崎奉行所、同年十月十七日、異人出<sup>ニ</sup>船

益救島、同十九日著<sup>ニ</sup>薩州坊津<sup>ニ</sup>、同二十二日用人相良(川辺郡)

權大夫長規、目附別府式部左衛門助員、物頭相良四郎兵衛賴繼、馬廻肥後長左衛門盛包、其外警固之士發<sup>ニ</sup>坊津、取<sup>レ</sup>陸乘<sup>ニ</sup>船出水(向久根)脇元、十一月九日護<sup>ニ</sup>送異人於長崎奉行所、詳開<sup>ニ</sup>于後<sup>ニ</sup>也、

吉貴公御譜中

一筆啓上仕候、去月廿八日、薩摩守領分大隅國之内屋久嶋尾野間村と申所之沖に常之唐船ニ者相替、帆數多キ船壹艘、東之方に乘行ハ付、其邊役人共より所中無油斷入念ハ様ニと申付置ハ處、夜中右船何方に乘行申ハ哉不相見得、翌廿九日、同嶋之内湯泊村之沖に右同前之船又々相見得申ハ得共、北風強帆影及不見得乘行申ハ、然處、同廿九日、同嶋戀泊村百姓藤兵衛と申者、同所松下と申所ハ炭焼ニ參ハ得者、刀を差ハ者罷在、言語及不相通、怪躰ニ見及ハ故立歸、百姓五次右衛門・喜右衛門と申者申合相越、右之者を藤兵衛所に召列置ハ旨、役人方に相違ハ故、則役人參ハル口問仕ハ得共、言語難通文字不通、日本人之様さかやきいたし、日本仕立之衣類を着仕居ハ得共、様子者異國人と見得申ハ、右之通御座ハ得者、沖に相見得ハ船より、夜中陸に卸シ置爲申ニ及可有之ハ哉、未相知不申ハ、依之、人家迦ニ小屋并外廻圍等堅固相調入置申候、順風次第地方迄可送越旨、先達ル以飛船申越ハ間、着船之砌其御地に差上可申ハ、委細之儀者追々可申越ハ條、到來次第可申上ハ、右付ル者嶋中別ル入念僉儀仕ハ様ニと申付事御座ハ、先此等之御案内、早々

爲可申上如斯御座ハ、恐惶、

猶以吳國人様躰、所持道具書并所付、別紙差上申ハ、

已上、

朱力年  
寶永五年  
九月十三日

(種子島) 久時

(新納) 久珍

(島津) 久當

(島津) 久明

(長崎奉行(直允)  
永井謙岐守様  
(同) (常色)  
別所播磨守様

參入、

2701  
全上 正文在文庫

明十五日例月之御禮無之ハ間、不及登 城候、以上、

朱力年  
寶永五年  
九月十四日

井上河内守

大久保加賀守

秋元但馬守

土屋相摸守

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

(飛毛船)

今度屋久嶋に異國人見得來り付、御用有之差越り、  
勸方之儀者左に相違り、

一 異國人順風次第地方に差渡シ、長崎に被差送り付る、  
中途之差引上村權兵衛申渡、警固人并醫師相附り間、  
可得其意外事、

一 去月廿八日・廿九日兩日、打續異國船壹艘嶋近く爲相  
見得之由り處に、同廿九日吳國人壹人松下と申所に罷  
居りを、所之者見逢來り、右之通に付得者、沖に相  
見得り船より爲卸置筈に、異國船漂着之節者段々遠  
見をも附置、且又覺語之儀付る者、兼り申渡置り旨者  
有之り處に、所之者爲致不審方に相見得、又者吳國人  
見逢り次第付る者、一々無心元儀共り、依之右に携り  
者とも六人并遠見に相付り者共、口柄をも爲聞度趣有  
之、口事奉行篠原喜右衛門差越り間、萬端申談に、愈  
儀可有之、委細之譯者口達に申合り、  
一 右通異國人を卸置たる事に付得者、又々異國船相見得  
儀者可有之り間、猶以嶋中夜白入念致見分、萬一異國  
船相見得りハ、不移時刻、早々支配頭方に申出り様  
に、今程無油斷毎度可申付候事、

一 右異國人卸置り儀に付る者、段々不審之儀共有之、肝  
付三右衛門に委曲申渡趣候間、承極申越る可有之  
り得共、其方爲立聞風説之儀たりといふとも、實不  
實ともに幾度飛船を以可申越候事、

一 肝付三右衛門事者、依鉢長崎に差遣儀者可有之り間、  
異國人に相付罷登りり様こと申渡、依之吉井爲兵衛事  
追付差越、一節嶋中平日之御用相勤筈り間、此節之異  
國人方御用之儀者申談り様可相心得り、尤三右衛門  
事者爲兵衛下嶋に無構、吳國人に相付罷登り、此内よ  
り之首尾方先筆者杯に次渡置り様可申渡事、

一 吳國人力に不限、嶋中之事に付る、可得差圖儀者成合  
り様可相計り事、

一 嶋中之者とも者勿論旅人之儀者、今程致他出り儀無用  
申付置り間、弥其通に堅可申付置り、他出差免り儀者  
愈儀相終りり節、可得差圖外事、

一 右之通、他出無用に申付り付る者、自他國之者自然忍  
出り儀者可有之り間、締方之儀見合を以、堅固可申付  
事、

一 吳國人見逢り百姓藤兵衛并其砌携候者、且又吳國船遠  
見番に相附り者共之儀に付る者、先達の肝付三右衛門

方に申越趣後有之の間、於嶋遂命儀、不審之儀見得來  
外ハ、様子次第可相計外、委細者口達ニ申合外事、

右條々可得其意外、右ヶ條之外ニ後段々氣を付、萬  
端入念堅固ニ可相勤外、以上、

寶永五年子九月十七日

(種子嶋久時)

藏人

(新納久珍)

市正

(嶋津久忠)

將監

(嶋津久明)

大藏

高橋武右衛門殿

覺

一 今度屋久嶋に見得來外吳國人、長崎に被差送外付、彼  
嶋より地方迄中途差引申渡外、別ゝ被入御念者ニ外間、  
萬端堅固可相勤外、警固人醫師をも相付外間、宜様可  
申談事、

一 屋久嶋より異國人船中廻ニ召入答外間、足輕不寢之番  
可申付外、警固人之内、吉田六兵衛・川西仁右衛門吳  
國人乗船ニ召乘外間、諸事故差引外様ニ可申談外、醫  
師之儀者馬場長軒召乘外事、

附 船中火用心之儀、堅固可申付外事、

一 異國人賄方、足輕貳人相付外間、望之食物於有之者相  
調、附置外醫師に致相談くハせへくり、右之者長崎迄  
無恙送届外儀專ニ外間、食物ニ入念食當り杯不致様ニ

是又可申付外、酒之儀者望外とも一切無用ニ可申付事、

附 不涼様ニ着類等可有見合事、

一 異國人病氣差發外儀共可有之候間、醫師不致油斷様ニ  
申付、若病氣差發外ハ、療治方入念外様可申付外、萬

一致病死外ハ、死骸塩詰ニ申付、長崎に可被差送外  
間可得其意外、塩詰用物差遣外事、

一 屋久嶋出船日和見合之儀、諸船頭并地下人江及吟味申  
付、能々可入念外事、

一 自然依風波他領之湊に致着船外ハ、其所番人江可申  
達外者、薩摩守領内屋久嶋に吳國人見得來外ニ付、長  
崎に差送外間、諸船不近寄様ニ被仰付度旨申達、尤馳  
走之儀者一切受用有之間敷外、吳國船之儀ニ付者、兼

る申渡置外條書之寫爲心得相渡外間、諸事右之趣ニ應  
シ宜相計可然外事、

一 異國人江向、無益之雜談曾ゝ不可仕、刀・脇指惣ゝ刃  
物之類近寄召置間敷外、尤吳國人罷居外所ニゝ、何歎



之雜談可爲無用外事、

一何方ニ有る表湊内ニ有る諸船不近寄様ニ可申付之外事、

一喧嘩口論堅可爲停止、下々之者至迄別有相愼様、急度可申付外事、

一右吳國人致見物之儀、堅令停止外條可得其意外事、

一吳國人山川(損宿郡)より陸地被差越ニ付、惣主取相良權(長惣)大夫申

渡外間、着船之節權大夫致問合、吳國人相渡之次渡等仕廻次第可罷歸外事、

右條々得其意、船中入念可相動外、警固之面々江及、

右之趣を以堅固相守外様、可申達外、以上、

寶永五年子九月十七日

藏人

市正

將監

大藏

上村權兵衛殿

2704  
吉貴公御譜中

去ル十三日之御連狀令拜見外、先月廿八日薩摩守殿御領分大隅國之内、屋久嶋尾野間村と申所之沖江、常之唐船

ニ者相替、帆數多キ船一艘東之方ニ乘行外付、其邊役共より所中無油斷入念候様こと申付置外處、夜中右之船何方ニ乘行申外哉不相見外由、翌廿九日、同嶋之内湯泊村之沖江右同前之船又々相見申外得共、北風強帆影及不見乘行申外旨、然處、同廿九日同嶋戀泊村百姓藤兵衛と申者、同所松下と申所江炭焼ニ參外得共、刀を差外者罷在、言語不相通怪躰ニ及見外故立歸、百姓五次右衛門・喜右衛門と申者申合相越、右之者を藤兵衛所に召連置外旨役人方江相達外故、則役人參外口問致外得共、言語難通文字不通、日本人之様ニさかやきいたし、日本仕立之衣類着いたし居外得共、様子老異國人と相見申外由、右之通ニ外得共、沖江相見外船より陸江御置爲申ニ有及可有之外哉、其段未相知不申外旨、依之人家廻ニ小屋并外廻圍等堅固相調入置之、順風次第地方迄可送越旨先達外以飛船申越外間、着船之砌此地差越可被申旨、右付の嶋中別有入念致兪儀外様こと被申付外由、旁令承知候、其表江着船次第如例警固相添、早々此地江可被送越外、恐惶謹言、

猶以、吳國人容躰所持之書付并所付、別紙被差越令到來外、以上

寶永五年  
九月十八日

別所播磨守  
判

永井讚岐守  
判

嶋津大藏様

嶋津將監様

新納市正様

種子島藏人様

御報

吉貴公御譜中

申含置<sup>此</sup>趣<sup>附</sup>之<sup>高</sup>頭書<sup>橋</sup>  
相謝又 武右衛門江

一異國人見付<sup>ハ</sup>百姓藤兵衛、其外右ニ携<sup>ハ</sup>り百姓とも致覺

語様之儀ニ付、先達<sup>衆</sup>の肝付<sup>近</sup>三右衛門<sup>江</sup>申渡趣有<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>間、

於彼方承届首尾宜方ニ可申渡<sup>ハ</sup>、

一右之外嶋中ニ<sup>ハ</sup>吳國船并吳國人見當<sup>リ</sup>り者ハ無<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>

哉、右ニ付<sup>ル</sup>者村中一々差出仕<sup>ハ</sup>様可申渡由、是又三

右衛門<sup>江</sup>申渡置<sup>ハ</sup>ニ付、三右衛門より次渡可有<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>間、

右之差出見届、其首尾可申越<sup>ハ</sup>、差出差越<sup>ハ</sup>ニ<sup>ハ</sup>及間

敷<sup>ハ</sup>、

一右吳國船見得來<sup>ハ</sup>節、相付置候遠見番之者共申口承、

御用可有<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>者<sup>ハ</sup>、右携<sup>ハ</sup>り百姓とも同前ニ御當地<sup>江</sup>可差

上せ<sup>ハ</sup>、

一嶋中之者不審有無之儀、内々ニ<sup>ハ</sup>承届、疑敷者<sup>ハ</sup>及有<sup>ハ</sup>之

ハ、隨分入念問届、越度相見得<sup>ハ</sup>り者<sup>ハ</sup>宰領相附、

船籠ニ<sup>ハ</sup>御當地<sup>江</sup>可差越<sup>ハ</sup>、

但 不致白狀<sup>ハ</sup>り者<sup>ハ</sup>、申分疑敷者<sup>ハ</sup>右同断ニ相心得<sup>ハ</sup>

く<sup>ハ</sup>、

一吳國人見付召列來<sup>ハ</sup>り藤兵衛・五次右衛門・喜右衛門、

右ニ携<sup>ハ</sup>り安兵衛・仁介・五右衛門事<sup>ハ</sup>宰領相附、船籠

ニ<sup>ハ</sup>御當地<sup>江</sup>差越<sup>ハ</sup>筈<sup>ハ</sup>、迎之船貳艘船籠六ツ乗せ付、

此方より差遣<sup>ハ</sup>、一人ツ、召籠、船壹艘ニ籠三ツ宛乘

せ付差越可然<sup>ハ</sup>、右之者とも警固爲宰領、警固番兩人、

御步行六人、足輕貳拾人差越<sup>ハ</sup>間、可得其意<sup>ハ</sup>、

一御當地<sup>江</sup>船籠ニ<sup>ハ</sup>差渡<sup>ハ</sup>り者、跡家財并家内人數之儀、

横目檢者ニ<sup>ハ</sup>相改、所持道具<sup>ハ</sup>封印ニ<sup>ハ</sup>所役人<sup>江</sup>預置、

改帳<sup>ハ</sup>御當地<sup>江</sup>可差越<sup>ハ</sup>、家内人數之儀<sup>ハ</sup>飯米可被下

ハ、

一異國人見付<sup>ハ</sup>り近邊之山改之儀、肝付三右衛門より申付

由、此儀三右衛門<sup>江</sup>承届、今一往相改可然<sup>ハ</sup>と見及<sup>ハ</sup>

ハ、其通ニ可有<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>、いつれ之筋ニ<sup>ハ</sup>改堅固之方ニ

可申談<sup>ハ</sup>、

一 嶋中手廣り得者、惣様之山中を相改り儀可難成り、就夫者、兼る山入をもいたしり達者之もの、一村二貳人程迄無油斷毎日山ニ登り、心懸見分いたしり様ニ可申付置り、勤之日數飯米可被下り間、得其意懈怠無之相勤り様、急度可申付置り、

伊 村毎ニ申付置り儀者、於彼方見合次第ニ有之可然外、

一 嶋中ニ有津口番所五ヶ所有之り由、此節自他國之者差圖無之内、嶋より外ニ不出様こと申渡置り、就夫者、足輕貳人ツ、差越、右番人ニ相付り間、可申渡り、

一 此節相見得候吳國船、碇を不卸、吳國人も外ニ不罷居、携り者表外ニ無之、不審成者表無之りハ、其旨長崎に急度御届申上ル筈外、重キ御届之儀ニ得者、不審之儀有之り者不宜儀ニり間、得其意内々別り入念諸事承合、可及穿鑿儀者其通ニ可有之り、此上重立りる詮儀之致様存寄儀於有之者、彼方之様子了簡之趣飛船を以可申出り、

一 篠原喜右衛門事、内詮議表相濟、疑敷者表無之、最早滞在ニ不及儀と及見りハ、其趣申談、喜右衛門歸帆可然り、

一 右ニ付る者、段々内僉儀申渡事り得とも、急ニ難相知儀も可有之り、依之嶋中所柄見合、兩所ニ屬託可建立り、札并銀子之儀者、吉井爲兵衛渡海之節可差越り間、急度立置、其内足輕番堅固ニ可申付置り、立置り日數之儀者重り差圖可有之り、

一 自他國之者、嶋外ニ不出様ニ申付置り付る者、旅人之内、若行迫及飢り者表可有之り、左様成者申出りハ、委遂吟味、於無相違者見合相應之飢米可相渡り、間々紛敷者表可有之り間、別り入念吟味之上飢米省可申付り、

以上

寶永五年子九月十八日

2706

覺

一 今度屋久嶋に異國人見得來り付、此砌嶋中内々之爲僉議、先達り武右衛門に委細申合、篠原喜右衛門相添差越り、此度八右衛門致下嶋、吳國人一卷之御用武右衛門申談、其外嶋中平日之御用意表可得差圖儀者成合り様ニ相計、諸事首尾能様申談、御當地に可申越儀者勿論兩人連名ニ可申越り、惣り此節之一卷、兩人引

請りぬ之首尾ニ可相心得り、

一當時彼嶋抑無之、肝付三右衛門事及御當地に招呼付、

三右衛門跡一節之爲寄役、吉井爲兵衛差下、内々之歟

議方も差添相勤り様こと申渡置り處、此節より屋久奉

行在嶋被仰付、近日中木脇喜兵衛致下嶋管り條、到着

りハ、嶋中平日之御用向者勿論喜兵衛可相辨り間、

是又可得其意り、然者爲兵衛事三右衛門跡役ニ付り、

平日之首尾喜兵衛方に次渡等相濟りぬ及罷登りり儀、

御當地に差圖無之内者差扣、八右衛門・武右衛門に差

添在嶋いたし僉議方ニ相加り罷居り様こと申付り間、

可存其旨り、以上、

朱力キ  
寶永五年 九月

(種子島久時) 藏人

(新納久珍) 市正

(島津久當) 將監

(島津久應) 中務

(島津久明) 大藏

町田八右衛門殿

高橋武右衛門殿

2707 今度異國人一卷ニ付、其嶋に段々差越り面々申渡り書

附一通遣之候間、不殘召寄急度可被相達り、足輕共は者

右之旨を以各より可被申渡り、以上、

九月

將監

町田八右衛門殿

高橋武右衛門殿

2708

覺

一今度屋久嶋に見得來り吳國人、長崎に被差送り付、主

取申渡、御目附別府式部左衛門、物頭相良四郎兵衛、

御馬廻肥後長左衛門差添、警固として有馬勘介・松澤

八右衛門・川西仁右衛門・吉田六兵衛、醫師東齋庵・

市來玄順、筆者有馬仲左衛門、料理方爲下知前田早左

衛門、肝衷中馬十郎右衛門申渡り、別る被入御念者ニ

りり間、萬端堅固相勤り様ニ可申談り事、

一右異國人牢乗物ニ有、山川より出水脇元迄陸地差越、

於泊者座敷圍申付之間、乗物より出之入置り様ニ可申

付候、泊休別紙書付ニ相達り事、

一異國人通筋、所次ニ外城衆中拾人、同横目貳人宛相付

り様先達り申渡置り、泊休共警固人替々兩人宛相詰致

差引、足輕之儀表見合を以差添、所衆中拾人・横目貳

人并足輕六人宛可致不寝之番、尤挑灯餘多所く燈り様  
こ可申付外事、

一 宿并休之所、火用心入念り様こ、於所こ嚙役人  
可申渡之、尤泊之所者夜廻いたしり様こ右同前堅可申  
渡、此段先達る表爲申渡事こ外事、

一 不依男女、吳國人見物堅可爲停止り、縦於中途行逢り  
者表、脇に立退り様可申渡旨、所こに及申渡置り間、  
足輕ともより右之通相心得可致下知旨、兼可申渡置  
外事、

一 出水脇元より關船こ召乗、屋形圍申付り間、乗物より  
出之、圍こ召入、夜中者挑灯餘多燈之、警固兩人爲乗  
可申付、且又足輕六人ツ、不寝之番可申付外事、

一 吳國人所持道具之儀、屋久嶋より之書付遣之り間、於  
長崎引渡之儀者、諸事堅固こ有之り様こ可相心得り外事、

一 右賄方足輕貳人、爲差引前田早左衛門相付り間、望之  
食物於有之者相調、醫師に致相談爲喰可申付、右之者  
長崎迄無恙送届り儀專一こり條、食物入念食當りなと  
不致様是又可申付り、酒之儀者望りとも一切無用可申  
付外事、

附 不凍様着類等可有見合外事、

一 吳國人病氣差發り儀共可有之り間、醫師不致油斷様こ  
申付、若病氣差發りハ、療治方入念り様こ可申付り、  
醫師にも別紙書付を以申渡旨有之り、寫爲見合相渡り、  
萬一致病死りハ、死骸塩詰申付、長崎に可被差送り間  
可得其意り、塩詰用物差遣り外事、

一 脇元出船又者船繫湊出帆日和見合之儀、諸船頭并地下  
人共に及吟味申付、能く可入念り外事、

一 他領之湊に致着船りハ、其所番人に可申達り者、薩  
摩守領内屋久嶋に吳國人見得來り付、長崎に差送り間、  
諸船不近寄様こ被仰付度旨申達、尤馳走之儀者一切受  
用有之間敷り、吳國船之儀こ付る者、兼可申渡置り條  
書之寫爲心得相渡り間、諸事右之趣こ應シ、宜相計可  
然り外事、

一 異國人に向、無益之對談曾る不可仕、刀脇指惣る刃物  
之類近寄召置間鋪り、尤吳國人罷居り所こ、何歎之  
雜談不申様こ堅可申付外事、

一 何方こる表湊内こ諸船不近寄様可申付之事、  
一 此度差越り面々家來下々之者、於長崎主人こ暇なしに  
方々致徘徊間敷り、此節之儀者別る相慎り様こ主人方

江可申渡外、

但喧嘩口論堅可爲停止、此旨下之者ニ至迄慎可申付外事、

一船頭・水主とも、衣食之外荷物積乗外儀令停止之間、船頭共江可申渡事、

一船頭・水主其外船中之者共、陸江上外儀可爲停止、水取之儀及早速仕廻、船ニ乗付外様ニ可申付之、尤酒給へ之儀堅令禁止外事、

一吳國人御請取相濟外ハ、御用無之人并醫師・足輕・諸船頭共ニ歸帆可申付外事、

右條々得其意、海陸入念可相勤外、警固其外之面々江及、右之趣を以堅固ニ相守外様可申達外、此外諸事首尾宜様ニ可相計外、以上、

寶永五年子九月

藏人

市正

將監

中務

大藏

相良權大夫殿

(長想)

2709

吉貴公御譜中

(飛手郡)

(群植郡)

(阿)

一屋久嶋より異國人長崎江被差送り付、山川より出水脇元迄陸地被遣之、其方角被差通外間、中途之儀者所次衆中拾人、横目貳人宛相付、泊休ニ由者不寝之番可相勤外、爲差引相良權大夫被仰付、役々之人をも被相添外間、萬端險下知堅固可相勤、尤用事於有之者無遲滯早速可相達事、

一不依男女、吳國人見物者勿論被定置人之外、目懸ニ及罷出間鋪外、縦於中途行當り之者及、脇江遠立除不近寄様堅可申付事、

一異國人泊休之書付并差引警固人等之儀者、四人共に吳國人宿左右前後之間宿見合、其外之面々及近邊ニ被召置事ニ外間、其心得を以宿拵等可申付置事、

一吳國人宿拵様之儀者、御普請方檢者江委細申含差越外間、差圖次第宿拵可仕置事、

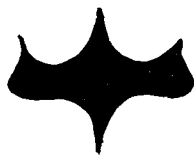
一異國人泊休共、火用心入念夜廻等堅固ニ申付、地下之者とも旅宿近邊ニ及不立寄様堅可申渡事、

右、喫役中得其意、所中ニ稠敷可申渡外、若大形之儀於有之者、急度可及沙汰者也、

朱力年  
寶永五年  
九月廿一日

吳國座印

2710  
寫正文在文庫



2711  
寫正文在文庫

寫

其方替紋依所望、此節別紙書付遣之外、向後其通被定置

可然外也、

寶永五年

御名

九月廿三日

御名乘 御判

鳴津淡路守殿  
(權久)

2712  
正文在文庫

於江戸鳴津淡路守殿より拙者に被 仰聞外者、今迄替紋

所無之外間、

太守様より拜領被成度被願外、此旨可申上由外間、其段

申上外處、内々被爲好外紋所有之外ハ、繪形を被成被

遣外ハ、其上ニ有可被遣外、此段可申達由 御意外付、

其旨申達外得者、紋所繪形被差越外故、備 御覽外處、

御折紙を被添、去年寶永五子九月廿三日、比志嶋隼人御

使者ニ由拜領被成外、紋所之繪形御折紙之扣、此節相渡

外間、慥御記録所ニ可被納置外、以上、

寶永六年丑五月二日

鳴津帶刀(印)

御記録奉行

2713  
吉貴公御講中

一筆啓上仕外、薩摩守領内屋久嶋之内、戀泊村ニ見得來

外吳國人之儀付有、此程申上趣御座外處、右之者地方ニ

着船次第其御地ニ差上可申旨、被仰下候御紙上承知仕外、

屋久嶋之儀難海、其上地方ニ之順風無御座時節故、吳國

人于今着船不仕外、到着次第早速差上可申外、右ニ付有

於屋久嶋段々相糺外次第、且又阿波國より爲漁獵右嶋ニ

罷越居中外者共七人、自船乘組八月廿八日獵罷出、唐船

全上

參逢外儀付口問仕外由、此節以飛船申越旨趣御座外付、  
委曲別紙貳通を以申上外、右之段爲可申上誦方甚右衛門  
差上申外、宜御差圖被遊可被下儀奉頼外、恐惶、

朱力キ  
實永五年  
九月廿七日

久時

久珍

久當

久明

(長崎奉行)  
永井讚岐守様

(同)  
別所播磨守様

參入、

2714  
吉貴公御譜中

今度 松姫君様就御入興、御屏風五雙被獻之外、右之趣  
各申談及言上外、恐々謹言、

朱力キ  
實永五年  
九月廿七日

喬朝判

松平薩摩守殿

秋元但馬守  
喬朝

松平薩摩守領内、大隅國敷護郡屋久嶋に相見得外吳國  
人之儀ニ付、先達御案内申上置外、其以後屋久嶋よ  
り申越外趣、左ニ申上外、

一 八月廿八日、屋久嶋之内南之方尾野間村之沖に、帆數  
多船壹艘橋舟を引、東之方に乘行外由、地下之者見付  
之、役人共は申聞外付、早速所申入念外様ニと申付、方  
々遠見附置外處ニ、夜入り外空曇開外付、何方に乘  
行申外哉船相見得不申外、翌廿九日ニ老右尾野間村よ  
り貳里ノ程西之方湯泊村之沖に、右同前之船相見得外、  
其日北風強御座外南沖之方へ乘行次第ニ遠罷成、晝  
九時比よりハ帆影表見得不申外、右兩日見得外船、帆  
數老六ツ七ツと見爲申通所之者共申外由、

一同廿九日戀泊村百姓藤兵衛、同所松下と申所ニ炭燒ニ  
參、木を伐申外折節、後ニ人聲仕外付見申外得老、刀  
を指外者、手まねきいたし何角申外得共、言語不通譯  
相知不申無心元存外故、早速老難寄付見合居外、然處  
水望様子之仕形ニ見受申外付、藤兵衛持合外器ニ水を  
入、差出外得老一口吞申外、其後又まねき申外得共、  
刀を差居申外故氣遣ニ存、寄付不申外處、刀を鞘共差  
出外故、近寄刀を取申外、其節かくニ有之外黄色之か  
(マ)



ね壹ツくれり得共、刀・かね共に則相返申り、右之者

ハ昨日沖に相見得り船致破損、陸に上り爲申こゝ表可有之哉と存、夫より磯邊に參、行廻り見申り得共、外

ニ壹人表見當不申り故、村に參、安兵衛と申者を以近村に右之旨申遣り、平内村之百姓五次右衛門・喜右衛門と申者戀泊村に折節參逢り付、三人申合、松下に參

見合申り節、村之様可參由之手様いたしり、草臥り躰ニ見受り故、差寄喜右衛門事者右之者所持之大袋を持、

五次右衛門者刀を持、藤兵衛者右之者ニ手を添、藤兵衛所迄召列り處、又藤兵衛ニ丸キ黄色之かね貳ツ、かくニ有之り黄色之かね壹ツくれり得共、則相返申り、

其節者近村之五右衛門と申者參合罷在り由、右段之其次第藤兵衛・五次右衛門・喜右衛門・五右衛門より申出り由、

一藤兵衛所に吳國人召列り儀役人共方ニ相違り付、早速役人共差越、番人等其外堅固申付、食事をも給させり、

此戀泊村者繻家數四ツ有之、海陸共不勝手之所ニ御座り故、同島之内宮之浦と申所に役人共致警固召列、人家廻ニ小屋并圍外廻堅固申付、役人共警固仕、番人

等段々附置申候、右宮之浦者地方に渡海最寄能所ニ

御座り、

一右之者、船より陸に上りり次第、是又仕形なと仕り見せ申り得共、何分ニも相分り不申り由、

一吳國人食事を給申り、無別條罷在り由、

一右吳國人を地下之者より卸置爲申こゝ者無御座り哉、刀衣類をも爲取、さかやきをも地下人仕りぬくれ爲申儀ニも御座り哉と、段々兪議仕事ニ御座り得共、相知

爲申儀者無之り由、

一右者之外ニ者、吳國人島中に卸置隠れ居申儀者可有御座哉と、右之吳國人見出り近邊山中、早速改申付り得共、外ニ不審成儀無御座り、其以後右躰之船表相見得

不申り由、

一吳國人所持之刀并唐鉸、役人之者取之、預り置申り、且又、吳國人所持仕りもめん大袋之内ニ品々有之り様

見及申り、若外ニも刃物入置りハ、別な氣遣ニ存り付、役人共吳國人同前(目カ)ニ見分仕り處、名表難付物共

有之り、右品々者則如本々大袋ニ入之、櫃ニ入付、吳國人に慥ニ相渡、圍之内入置申り、右大袋・刀・唐鉸等、吳國人同前ニ地方に差越可申由申越り、

一藤兵衛・五次右衛門・喜右衛門・五右衛門家内、役人

共差越相改申外得共、不審成物無御座外由、

右之通申越外、乍此上嶋中僉儀仕外間、相替儀共御座外ハ、其節可申上外、自然右躰之船相見得外儀表可有之外間、浦々入念外様ニと段々申付置外、此旨申上外、以上、

朱カキ  
寶永五年  
九月廿七日

種子島藏人(久時)

新納市正(久珍)

鳴津將監(久当)

島津中務(久忠)

島津大藏(久明)

吉貴公御譜中

正文在文庫

覺

高七拾貳萬九千五百六拾三石餘

一米貳百拾八石八斗六升八合

配當米

右者從當子年、琉球國分之高相込外ニ付、四座之猿樂

配當米割如此御座外、書面之通、淺草御藏ハ金ニ而當

月中可有御納外、米直段之儀者金壹兩ニ壹石五斗、端

銀者六拾六匁之積リニ付、從來丑年者右之通九月中限

之可有御納外、以上、

朱カキ  
寶永五年  
子十月二日

平岩若狹守(親唐)

石尾阿波守(氏譜)

中山出雲守(時春)

萩原近江守(重秀)

稻垣對馬守(重尊)

加藤越中守(明英)

久世大和守(重行)

松平薩摩守殿

継目印

継目印

2717

吉貴公御譜中

松平薩摩守様御領内、大隅國馭護郡屋久嶋ハ相見得外

吳國人之儀、最寄御申聞外、屋久嶋方被申越外段、委

細之御紙面令拜見外、

一八月廿八日、屋久嶋之内南之方尾野間村之沖ハ帆數多

船壹艘、橋船を引東之方ハ乘行外之由、地下之者見付

之、役人中ハ申聞外付、早速所中入念外様ニと被申付、

方々遠見附置外之處、夜ニ入外者空曇開外付、何方

に乘行申外哉、船相見不申外、翌廿九日ニモ、右尾野間村より貳里程西之方湯泊村之沖に右同前之船相見外、其日北風強ゆる、南沖之方に乘行次第ニ遠罷成、晝九時よりハ帆影も見得不申外旨、右兩日見外船帆數ハ六ツ七ツと見爲中之由、所之者共申外由之事、

一 同廿九日、戀泊村百姓藤兵衛、同所松下と申所ニ炭焼ニ參、木を伐申外折節、後ニ人聲いたし外付見外得者、刀を指外者、手まねき致、何角申外得共、言語不通譯相知不申、無心元存外故、早速者難寄附見合居外、然處ニ水望間敷様子之仕形ニ見受申ニ付、藤兵衛持合外器ニ水を入差出外得者、一口吞申外之由、其後又まねき外得共、刀を指居申外故氣遣ニ存、寄付不申外處、刀を鞘共差出外故、近寄刀を取申外、其節かくニ有之外黄色之かね壹ツくれ外得共、刀・かね共ニ則相返申外、右之旨者<sup>(着カ)</sup>、昨日沖に相見得外船致破損、陸に上り爲申ニる者可有之哉と存、夫より磯邊に參、行廻見外得共、外ニ壹人及見當不申外故、村に參、安兵衛と申者を以、近村に右之旨申遣外由、平内村之百姓五次右衛門・喜右衛門と申者戀泊村に折節參逢外ニ付、三人申合、松下に參見合申外節、村之方に可參由之手様い

たし外、草臥外躰ニ見受外故、差寄喜右衛門事ハ右之者所持之大袋を持、五次右衛門者刀を持、藤兵衛ハ右之者ニ手を添、藤兵衛所迄召列外所、又藤兵衛丸き黄色之かね貳ツ、かくニ有之外黄色之かね壹ツくれ外得共、則相返申外、其節者近村之五右衛門と申者參合罷在外之旨、右段々之次第、藤兵衛・五次右衛門・喜右衛門・五右衛門より申出外由之事、

一 藤兵衛所に吳國人召連外儀、役人中に相違外付、早速役人中被差越、番人等其外堅固被申付、食事等及給させ外由、此戀泊村者纒家内四ツ有之、海陸共ニ不勝手之所ニ有之外故、日之内宮之浦と申所役人中被致警固召連、人家迦ニ小屋并剛外廻堅固ニ被申付、役人中警固被致、番人等段々被附置外由、右宮之浦者地方に之渡海最寄能所ニ有之由外事、

一 右之者、船より陸に上り外次第、是又仕形抔仕外見せ申外得共、何分ニ及相分り不申外由之事、

一 吳國人食事を給外無別條罷在外由之事、

一 右吳國人を、地下之者より卸置爲申ニる者無之外哉、刀・衣類をも爲取、さかやきをも地下人仕外るくれ爲申儀ニる者有之外哉と、段々被致命議外得共、相知爲

申儀表無之由外事、

一右之者之外ニ表、吳國人嶋中江卸置際居申儀表可有之  
ハ哉、右之吳國人見出外近邊山中、早速改被申付外得  
共、外ニ不審成儀無之、其以後右躰之船表相見不申外  
之由外事、

一吳國人所持之刀并唐鉸、役人中取之、預り置被申外由、  
且又吳國人致所持外木綿大袋之内ニ品々有之樣被及見  
外ニ付、若外ニ表刃物入置外哉と別る氣遣ニ存外付、  
役人中吳國人目前ニる見分被致外處、名表難得物共有  
之外、右品々表則如本大袋ニ入置、櫃ニ入、吳國人江  
慥ニ相渡、鬮之内ニ入置外之由、右大袋・刀・唐鉸等、  
吳國人同前ニ地方江差越可申由被申越外由之事、  
一藤兵衛・五次右衛門・喜右衛門・五右衛門家内、役人  
中被差越、被相改外得共不審成物表無之由之事、

右之通、乍此上嶋中表僉議外る、相替儀共有之由ハ  
、其節可被申聞之旨、自然右躰之船相見外儀も有  
之哉と、浦々入念外之樣ニと段々御申付之旨、委細  
入御念外御紙面追々承届外、以上、

朱力キ  
寶永五年

十月九日

駒木根肥後守  
(設方)

別所播磨守  
(常任)

2718

全上

嶋津大藏樣

嶋津中務樣

嶋津將監樣

新納市正樣

種子嶋藏人樣

去月廿七日之御狀令拜見外、然者薩摩守殿御領内、屋久  
嶋之内戀泊村江見得來外吳國人之儀ニ付、先達而當地江  
被送越外樣ニと申達外通被得其意可被差越外處、右屋久  
嶋之儀難海其上地方江之順風無之時節ゆへ、吳國人于今  
其地江不致着船外之旨、到着次第早速可被送越之由令承  
知外、右ニ付而、於屋久嶋段々御吟味之次第、且又阿波  
國より爲漁獵右之嶋江罷越居中者共七人、自船ニ乘組  
八月廿八日獵ニ罷出、唐船ニ參會外儀ニ付而、口問被致  
外之由、此節以飛船被申聞外趣、委曲之別紙貳通并吳國  
人居外所付之名、假名付壹通被相越之、令到來外、依之  
此度諷方甚右衛門方被差遣外段、旁入御念儀ニ存外、恐  
惶謹言、

朱力キ  
寶永五年

十月九日

駒木根肥後守判

別所播磨守

2720

吉貴公御譜中

鳴津大藏様  
鳴津中務様  
鳴津將監様  
新納市正様  
種子嶋藏人様

御追啓之御狀令拜見ハ、屋久嶋ニ見得來ハ吳國人書ハ繪圖之様成物貳枚并文字共難相知物壹枚、今度屋久嶋より被差越ハ由、且又右之者申口言葉之趣ハ、委細別紙御書附被差添被遣ハ、令到來ハ、恐惶謹言、

宋力キ  
寶永五年  
十月九日

駒木根肥後守  
判  
別所播磨守  
判

鳴津大藏様  
鳴津中務様  
鳴津將監様  
新納市正様  
種子嶋藏人様

一筆啓上仕ハ、薩摩守領内屋久嶋之内戀泊村ニ見來ハ吳國人之儀ニ付、屋久嶋方重ク申越ハ趣此程申上ハ處、被聞召届被仰下段承知仕ハ、且又、阿波國より彼地ニ爲漁獵罷渡居ハ舩頭市兵衛、水主實兵衛、清左衛門・喜兵衛・休助・市十郎・藤兵衛并吳國人見付ハ百姓藤兵衛、其節携ハ喜右衛門・五次右衛門・五兵衛・安兵衛御用之儀表御座ハハ、御指圖次第差上可申旨申上ハ處ニ、右之者共御尋被成ハ御用之儀表可有御座ハ間、吳國人一同ニ其御地ニ差上可申と、諏方甚右衛門頃日到着仕、委細之御紙上逸ク承知仕ハ、於江府薩摩守ニ可申聞ハ、吳國人を始、右之者共于今地方ニ到着不仕ハ、渡海時分柄惡鋪ハ故及遲滯申ハ、着般次第早速差上可申ハ、右之御請旁爲可申上如此御座ハ、以上、

宋力キ  
寶永五年  
十月十五日

(種子島) 久時  
(新納) 久珍  
(島津) 久當  
(島津) 久輝  
(島津) 久明

2719  
全上

2721

駒木根肥後守様

別所播磨守様

參人、

吉貴公御譜中

正文在文庫

此方男子誕生之事、被伸嘉儀芳札落手、且目錄之通被贈

與、懇切之至令祝着外、謹言、

朱力キ

寶永五年 上冬十六

(近衛家懸)

(花押 No.4)

薩摩少將殿

2722

吉貴公御譜中

一筆啓上仕外、先達而申上置外薩摩守領内屋久島に见得

來外吳國人、警固之者相添、昨十九日當國之内坊津と申

(川忍郡)

所に無別條着岸仕外、且又右吳國人見付外百姓藤兵衛、

右携外者并阿波國之漁人共同前に到着仕外由申越外間、

吳國人一同に追付其御地に差上可申外、先右之段爲可申

上如此御座外、恐惶、

朱力キ

寶永五年

十月廿日

久時

久珍

2723

久當

久輝

久明

別所播磨守様

駒木根肥後守様

全上

一筆啓上仕外、先達而申上置外薩摩守領内屋久嶋に见得來

外吳國人壹人并所持之品警固之者申付、相良權大夫と申

(辰懸)

者相添、其御地に差上申外、此旨爲可申上如斯御座外、

恐惶、

朱力キ

寶永五年

十月廿二日

久時

久珍

久當

久輝

久明

別所播磨守様

駒木根肥後守様

2724

全上

一筆啓上仕外、薩摩守領内屋久島之内戀泊村ニ有吳國人見付外、百姓藤兵衛、其節携外者共、且亦阿波國之船頭市兵衛并水主之者、別紙名書之通到着仕外ニ付、警固之者申付、五代助大夫と申者相添、其御地ニ差上申外、此旨爲可申上如此御座外、恐惶、

朱力キ  
寶永五年  
十月廿二日

久時

久珍

久當

久輝

久明

別所播磨守様

駒木根肥後守様

参人、

2725

吉貴公御譜中

正文在文庫

猶以、永井謙岐儀(貞光)今月三日參府仕外ニ付、連名相除

申外、以上、

去六日之尊札拜見仕外、然者御領内大隅國之内屋久嶋江先頃怪者壹人相見外付、御城下江參着次第當地江可被送越旨、先達御家頼中申來承知仕外、依之右之段并上河

内守殿江今月六日被仰上置外旨、彼者之儀付、追々御用之儀表御座外者可申談旨委細御紙上之趣、被入御念御儀奉存外、恐惶謹言、

朱力  
寶永五年  
十月廿五日

駒木根肥後守

政方判

別所播磨守

常治判

松平薩摩守様

参貴報

2726

吉貴公御譜中

御連狀令拜見外、然者先達有御申聞外薩摩守殿御領内、屋久島之内戀泊村江見得來外異國人之儀ニ付、追々之御紙上之趣、且又阿波國より彼島江漁獵罷越居外船頭市兵衛、水主實兵衛・清左衛門・喜兵衛・休助・市十郎・藤兵衛并異國人見付外百姓藤兵衛、其節携外喜右衛門・五次右衛門・五右衛門・安兵衛、相尋外御用之儀表可有之外間、右吳國人一同當地江被送越外様ニと申遣外之段、被得其意外旨委細入御紙面之式承届外、右吳國人を始右之者共於于今渡海之時分惡鋪外故、地方江不致到着被及遲滯外由、着船次第早速可被差送之旨、御受御紙面之通令承知外、恐惶謹言、

朱力平  
寶永五年  
十月廿七日

駒木根肥後守(殺方)  
判

別所播磨守(常也)  
判

島津大藏様(久明)

島津中務様(久野)

島津將監様(久野)

新納市正様(久野)

種子島藏人様(久野)

全上

追而啓上仕外、屋久嶋に見得來外、吳國人書申外、繪圖之樣成物貳枚并文字共難相知物壹枚、此度屋久島より差越申外、且又右之者申候言葉之趣、申越外、依之右之旨別紙申上、異國人書申外物三枚差上申外、此等之段爲可申上如此御座候、恐惶、

朱力平  
寶永五年  
十月廿七日

久時

久珍

久當

久輝

2728

久明

永井讚岐守様

別所播磨守様

吉貴公御譜中

正文在文庫

重陽之 御内書可相渡外間、明日五半時 御城の家來可被差出外、以上、

朱力平  
寶永五年  
十月廿八日

松平薩摩守殿

秋元但馬守

2729

全御譜中

去ル廿日之御連狀令拜見外、然者最前申聽外、薩摩守殿御領内、屋久嶋に見得來外、吳國人、警固之者相添、當月十九日薩州之内坊津(介辺郡)と申所に無別條着岸之旨、且又吳國人見付外、百姓藤兵衛、右携外者共并阿波國之漁人とも同然令着津外之旨相達外ニ付、追付此表に可被送越外由、依之預示外通承届、入御念儀存外、恐惶謹言、

朱力平  
寶永五年  
十月廿九日

駒木根肥後守

判



別所播磨守判

島津大藏様

島津中務様

島津將監様

新納市正様

種子嶋藏人様

態飛脚を以申上候、

吉貴公御譜中

正文在文庫

猶々永井讃岐守儀致參府外ニ付、連名相除申外、以上、

去月二日之尊札拜見仕外、然者御領内水引(山内)と申所之者三人、去年於當地就熟事仕外奉窺、御下知之通先頃御仕置申付外、此段御國許御家頼衆迄申達外趣御承知、依之被仰下外段被入御念御儀奉存外、恐惶謹言、

寶永五年

十一月五日

別所播磨守

常治判

松平薩摩守様

尊報

吉貴公御譜中

2732

達外處、是又御受取被成外、

一天草御代官竹村太郎右衛門様御手傳、長崎江被詰居外

山路大右衛門と申人網場江差越、吳國人長崎江被差送

外付、何角御用之儀も外ハ、可承由、太郎右衛門様御

指圖之旨ニ由、吳人網場罷立外節、被出合外故相應ニ

挨拶仕置外、其篇ニ由差置外儀表如何存外間、被聞召

置被下度外、

右之通、首尾好御請取相濟、無殘所仕合、於私表安堵

仕外、委細之儀若罷歸外可申上候、先早々右之段爲

可申上如此御座外、宜御披露頼存外、以上、

朱力キ

寶永五年

十一月九日

相良權太夫（長惣）

猿渡喜右衛門殿

堀 甚左衛門殿

全上

御狀令拜見外、先達御申聞外薩摩守殿御領内、屋久島

江見得來外吳國人壹人并所持之品、警固之面々御申付、

相良權太夫被相添被差越之、無恙到着、吳國人并所持之

品無別條請取申外、委細權太夫へ相達外、恐惶謹言、

朱力キ

寶永五年

十一月九日

駒木根肥後守 判

別所播磨守 判

島津大藏様

島津中務様

島津將監様

新納市正様

種子島藏人様

御報

2733

吉貫公御誥中

正文在文庫

松姫君様就御入興、爲御祝儀如目錄被獻之外、首尾好遂

披露候、恐々謹言、

朱力キ

寶永五年

十一月十九日

喬朝判

松平薩摩守殿

秋元但馬守 喬朝

2734

忠將一流系圖

玄蕃忠直嗣子

小源太

寶永五年戊子十一月二十三日誕生、母名越右膳恒渡妹、

正徳元年辛卯十月三日忠依（自腕カ）無嗣子爲養子、

實 太守吉貴公之二男也、

2735 吉貴公御譜中

一筆啓上仕（カ）、薩摩守領内屋久嶋（カ）見得來（カ）吳國人壹人、此程其御地（カ）差上申（カ）處、去ル九日吳國人并所持之品共無別條被成御請取（カ）、依之被成下御紙上之趣、且亦相良權大夫被召出家仰（カ）旨承知仕（カ）、右之段者於江府薩摩守（カ）可申聞（カ）、到私共表別（カ）安堵仕（カ）、此旨爲可申上如此御座（カ）、恐惶、

朱カキ  
寶永五年 十一月廿六日

種子嶋藏人

新納市正

嶋津將監

嶋津中務

嶋津大藏

別所播磨守様

駒木根肥後守様

参人、

2736 吉貴公御譜中

正文在文庫

先頃滿姫所勞之節、依令問安否謝詞之趣、懇懇之楮而令披閱（カ）、早速被得驗氣之旨、悅之至（カ）、尚期後信（カ）、謹言、

朱カキ  
寶永五年 仲冬念七

薩摩少將殿

（花押 No.4）

2737 吉貴公御譜中

御狀令拜見（カ）、然者薩摩守殿御領内屋久嶋之内、戀泊村（カ）之吳國人見付（カ）百姓藤兵衛并其節携（カ）者共、且又阿波國之船頭市兵衛其外水主之者共、別紙名書之通其許就到着、警固御申付、五代助大方被相添被差越之、無恙着船（カ）付、右之者共遂吟味（カ）處、疑敷儀者無之、依之相構（カ）儀無之、右之者共不殘差返（カ）、委細助太方（カ）中達（カ）條可爲演述（カ）、恐惶、

朱カキ  
寶永五年 十一月廿九日

駒木根肥後守判

別所播磨守判

島津大藏様

島津中務様

吉貴公御譜中

一筆啓上仕候、薩摩守領内屋久島之内戀泊村ニ有吳國人

吉貴公御譜中

去月廿六日之御連狀令拜見外、然者薩摩守殿御領内屋久島見來外吳國人并所持之品共被送越外處、先月九日當地參着相替儀も依無之、無相違請取外付其節以書狀申入、且又相良權太夫方江申達外段相違、依之委細御使札之趣令承知、入御念儀存外、恐惶謹言、

朱力キ

寶永五年

十二月三日

駒木根肥後守判

別所播磨守判

- 島津大藏様
- 島津中務様
- 島津將監様
- 新納市正様
- 種子島藏人様

吉貴公御譜中

見付候百姓藤兵衛、其節携外者共并阿波國之船頭市兵衛其外水主之者共、此程其御地江差上申之處、御吟味被仰付、御疑敷儀も無御座外、依之御構之儀無之、右之者共不殘御暇被下外付、被成下御紙上之趣、且又五代助大夫被召出蒙仰外旨、昨日罷歸申聞忝承知仕外、右之段於江戸委細薩摩守可申聞外、至私共安堵仕外、此旨爲可申上如此御座外、恐惶、

朱力キ

寶永五年

十二月七日

- 種子嶋藏人
- 新納市正
- 島津將監
- 島津中務
- 島津大藏
- 駒木根肥後守様
- 別所播磨守様
- 参入、

御狀令拜見外、然者薩摩守殿御領内屋久嶋之内戀泊村ニ有、吳國人見出外百姓藤兵衛、其節携外者共并阿波國之船頭市兵衛其外水主之者共、遂吟味外之處ニ疑敷儀も無

之外間、不殘其元江差返外付、五代助大夫方江申達外段

相達、依之委細預示外趣承届、入御念儀ニ存外、恐謹謹

言、

<sup>朱力キ</sup>寶永五年 十二月十八日

駒木根肥後守判

別所播磨守判

鳴津大藏様

鳴津中務様

鳴津將監様

新納市正様

種子嶋藏人様

2741 吉貴公御譜中

正文在文庫

蜜柑二箱并御肴一種被獻之外、首尾好遂披露外、恐々謹

言、

<sup>朱力キ</sup>寶永五年 十二月十二日

政直判

松平薩摩守殿

土屋相摸守

政直

2742 全上

蜜柑二箱并御肴一種被獻之外、首尾好遂披露外、恐々謹

言、

<sup>朱力キ</sup>寶永五年 十二月十二日

長重判

松平薩摩守殿

小笠原佐渡守  
長重

2743 全上

大納言様御酒湯被爲掛外爲御祝儀、明後十五日 御本丸

<sup>(久)</sup>御禮過ニ西丸へ惣出仕可有之外、且又爲伺御機嫌小笠原

佐渡守殿江使者被差越外義、明日方無用外、右之趣可相

達旨、土屋相摸守殿被仰聞外條如此御座外、向寄江老御

通達可被成外、以上、

十二月十三日

松平薩摩守様

仙石丹波守<sup>(久)</sup>

2744 吉貴公御譜中

正文在文庫

吉貴公御譜中

於面丸 本ノマ、西丸カ

若君様御誕生被遊り、今度者爲御祝儀惣出仕并御祝儀物  
獻上無之、爲伺御機嫌老中に被相越り儀、使者被差越に  
も不及り、尤在國在所之面より届ニ不及り、

此御書付申出間、寫進之、向寄ニ者御通達可被成り、  
尤御用番御老中へも不及御勤り、以上、

朱カキ  
寶永五年

十二月廿二日

仙石丹波守 (欠尚)

松平薩摩守様

2745  
吉貴公御譜中

正文在文庫

爲歳暮之御祝儀、以使者如目錄被獻之、首尾好遂披露  
外、恐々謹言、

朱カキ  
寶永五年

十二月廿九日

本多伯耆守  
正永判  
小笠原佐渡守  
長重判

松平薩摩守殿

正文在島津玄蕃久典

宜稱 末川

寶永六

正月二日

朱カキ  
在日字之通

嶋津小源太とのへ

此末川秋号ノ事、全在四月十一日嶋津帶刀ヨリ佐多豊前殿宛書中、  
参照アルヘン

2747

全御譜中

正文在文庫

何もよく御心得りて申せとの御事ニ、かしく、

文いたされり、御てまへさま御不仕合の御事きかせられ、  
昨日は御悔としておほせの趣、誠ニ御懇の御事ニ、か  
たしけなく思しめさせられりよし、今日より忌あきりよ  
しにて、御禮おほせあけられ文のやう披露いたしまいら  
せりへハ、御念入まいらせられり御事と思しめしり、此  
よし、めてかしく、

朱カキ  
寶永六年

松平さつま守さま 御返事

まゐる

岩倉 梅その

お

吉貴公御譜中

寶永六歲在己丑春正月、吉貴以レ在レ叔母之喪、故不能レ登レ城也、而有下

綱吉公患<sup>レ</sup>麻疹<sup>ニ</sup>之聲上、同九日大目附傳<sup>ニ</sup>令于諸侯<sup>一</sup>曰、

將軍家之麻疹垂<sup>ニ</sup>快復<sup>一</sup>、明日將<sup>レ</sup>浴<sup>ニ</sup>御酒湯<sup>一</sup>、侯伯諸士

不<sup>レ</sup>殘登<sup>レ</sup>城賀<sup>レ</sup>之矣、各應<sup>ニ</sup>其令<sup>一</sup>、同十日執政列<sup>ニ</sup>座諸

黒書院<sup>一</sup>、大久保加賀守忠増謂曰、將軍家之不豫漸欲<sup>レ</sup>

歸<sup>ニ</sup>快愈<sup>一</sup>之處、今朝忽覺御<sup>御年六</sup>也、各宜<sup>下</sup>以<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>事<sup>ニ</sup>

綱吉公<sup>ニ</sup>勤<sup>中</sup>仕于

家宣公上、是 先君之遺誼也矣、吉貴聞<sup>ニ</sup>大故於芝亭<sup>一</sup>驚

慟矣、即以<sup>ニ</sup>使者<sup>一</sup>告<sup>ニ</sup>執政并上河内守正岑<sup>一</sup>曰、吾今在<sup>レ</sup>喪

訃音落<sup>レ</sup>耳而不<sup>レ</sup>忍<sup>レ</sup>居爲<sup>レ</sup>之奈何哉、正岑曰、雖<sup>レ</sup>未<sup>レ</sup>終<sup>レ</sup>

喪、到<sup>ニ</sup>于大久保忠増・間部越前守詮房<sup>一</sup>若御年當開啓而家宣公之體問也之亭<sup>一</sup>、

可<sup>レ</sup>伺<sup>ニ</sup>

家宣公愁歎<sup>ニ</sup>焉、吉貴如<sup>ニ</sup>其言<sup>一</sup>也、同十三日吉貴登<sup>ニ</sup>西

之丸<sup>ニ</sup>奉<sup>レ</sup>嘔<sup>一</sup>

家宣公<sup>一</sup>、同廿二日奉<sup>ニ</sup>

綱吉公之尊骸<sup>一</sup>殯<sup>ニ</sup>于東叡山<sup>一</sup>、二十八日奉葬、自三二月

朔日<sup>ニ</sup>至二十五日<sup>一</sup>所<sup>レ</sup>執<sup>ニ</sup>三行法會<sup>一</sup>

敕諭<sup>ニ</sup>

常憲院殿<sup>ニ</sup>贈<sup>ニ</sup>正一位大相國<sup>一</sup>、同二日吉貴拜<sup>ニ</sup>禮乎<sup>一</sup> 御靈

壇<sup>一</sup>、同十八日以<sup>ニ</sup>比志島隼人範房<sup>一</sup>時番頭格獻<sup>ニ</sup>上香奠銀五十

枚<sup>一</sup>、且復二月九日之夜 御臺君<sup>身淨光</sup>亦薨去、依<sup>レ</sup>之同十

一日吉貴登<sup>ニ</sup>西之丸<sup>一</sup>奉<sup>レ</sup>嘔<sup>レ</sup>之、其後獻<sup>ニ</sup>香奠銀二十枚<sup>一</sup>、

吉貴公御譜中

正文在文庫

今度於壇上寺御法事中火之番勤方之儀、四年以前戌年御

法事之節被勤<sup>レ</sup>衆被承合、家來を廻<sup>レ</sup>し可被申<sup>レ</sup>、尤馬ひ

かせ<sup>レ</sup>儀可爲無用<sup>レ</sup>、

在包紙

大久保加賀守様より若松彦兵衛被召寄御渡被成<sup>レ</sup>、

寶永六年 正月十七日

正文在文庫

吉貴公御譜中

正文在文庫

御檜重一組被獻<sup>レ</sup>之、遂披露候、恐<sup>レ</sup>謹言、

寶永六年 正月十八日

喬朝判

吉貴公御譜中

正文在文庫

御檜重一組被獻<sup>レ</sup>之、遂披露候、恐<sup>レ</sup>謹言、

寶永六年 正月十八日

喬朝判

2752

2751

松平薩摩守殿

宋カキ  
在口裏 秋元但馬守  
喬朝

吉貴公御譜中

正文在文庫

舊臘廿二日之貴翰拜見仕外、然者御領分屋久嶋江見來外  
異國人請取置、且亦右見出外者共之儀、當当地江招呼致吟  
味外處、疑敷儀無御座候付、差戻之、委細御家來衆江申  
達外趣、從御國元被成御承知外由、依之被示下外通被入  
御念外御事奉存外、恐惶謹言、

宋カキ 寶永六年

正月廿三日

駒木根肥後守  
政方判

別所播磨守  
常治判

松平薩摩守様

貴報

吉貴公御譜中

吉貴豫説三間部詮房二以三家老島津帶刀仲休二爲使、依二  
井上正岑一請下獻三起請文一顯中誠心上、同二月四日執政小  
笠原佐渡守長重月番呼三吉貴之留守居赤松甚右衛門則茂一  
謂曰、吉貴所レ獻之誓詞宜下踐二先蹤一而誌レ焉於二私亭一

2753

加二花押一、明且來三于長重之館二爲三血判一矣、因翌五  
日謁三長重之館二展三誓文一瀝三血於花押一、長重及大目  
附松平石見守乘宗在レ席見レ之也、而乘宗取三誓文二而  
捧三長重一矣、所レ獻之誓文若レ左、

扣正文在文庫

起請文前書

一奉對

上様忠勤之志專一奉存知、不可有表裡事、

一御一門方公家衆并親類縁者其外、挾野心族於有之者、

早速可致言上候、勿論一味同心仕間敷事、

一就于

御代替弥重 公義、御仕置等疎略不奉存可相守候、

附 琉球國之儀背仕置雖企邪儀候、荷擔仕間敷事、

右條々於致違背者、

宋カキ 熊野牛王

梵天帝釋四大大天王、總而日本國中六十餘州大小神祇、

殊伊豆箱根兩所權現・三島大明神・八幡大菩薩、天

滿大自在天、神部類眷屬神罰冥罰各可罷蒙者也、仍

起請文如件、



寶永己丑年二月五日 松平薩摩守判

土屋相摸守殿

小笠原佐渡守殿

秋元但馬守殿

本多伯耆守殿

大久保加賀守殿

井上河内守殿

2754 吉貴公御譜中

正文在文庫

爲新陽之嘉儀教墨落手、愈無吳超歲之事珍重思給外、此地同前外、仍如目錄被投與之、連年懇篤之趣祝着不少外、尚期永春外也、

朱子

寶永六年

令月初二

(花押 No.4)

松平薩摩守殿

在包紙

松平薩摩守殿

家瀬

2755 吉貴公御譜中

2756

吉貴欲<sub>レ</sub>教<sub>下</sub>令<sub>ニ</sub>中山王<sub>ニ</sub>從<sub>ニ</sub>先蹤<sub>ニ</sub>獻<sub>ニ</sub>使者<sub>于</sub>江都<sub>ニ</sub>賀<sub>中</sub>家宣公之繼立上、以下不<sub>ニ</sub>事之可<sub>レ</sub>措<sub>ニ</sub>之由上、苦<sub>告<sub>三</sub>告<sub>三</sub></sub>間部詮房、家老島津帶刀仲休爲<sub>ニ</sub>之使<sub>筆<sub>ニ</sub>其詞<sub>一</sub>以呈<sub>レ</sub>之若左、詮房曰、就<sub>ニ</sub>月番之執政<sub>一</sub>告<sub>レ</sub>之可乎、繇<sub>レ</sub>焉同二月六日馳<sub>ニ</sub>留守居赤松甚右衛門則茂<sub>于</sub>本多伯耆守正永之館<sub>ニ</sub>以<sub>ニ</sub>其事<sub>一</sub>請<sub>レ</sub>之、竟得<sub>ニ</sub>之許<sub>一</sub>也、便<sub>下</sub>令<sub>琉球國<sub>ニ</sub>云、明載獻<sub>ニ</sub>使者<sub>一</sub>若<sub>ニ</sub>先規<sub>一</sub>、</sub></sub>

松平薩摩守御内意申上外口上覺

一琉球國之儀者、薩摩守より十二代之先祖陸奥守忠國と申者手ニ入、普廣院義教卿より拜領仕、其以後薩摩守先祖共ニ從來外處、薩摩守高祖父中納言家久代ニ到、連々致懈怠、殊更

權現様に御禮可申上旨申付外得共、國司中山王領掌不仕外付、人數を差越可致退治旨言上仕、慶長十四年三月兵船を差渡、中納言事も山川<sub>(掛指那)</sub>と申湊迄致出馬下知仕、先琉球入口之嶋々手ニ入、同四月王居城に取懸外得者中山王降參仕外付、其段

權現様<sub>(合)</sub> 怠徳院様に言上仕外處、御感不斜、則御感狀を被下、琉球國永く中納言に被下置之旨被仰出、中納

言親宰相入道(義)惟新齋・祖父三位法印龍伯(義)に及御感狀被下置り、同五月中山王を薩州に召捕來り、

一 慶長十五年八月、中納言、中山王を召連、駿府に參着仕、同月六日中山王召連登城仕、中山王より土産品々獻上仕せり處、御代初ニ早速吳國を從、其國王を捕參り儀、中納言無比類働之由

上意ニ蒙御感り、同十八日御饗應被下御酒宴之上、常陸介様・於鶴様に御仕舞を被仰付、貞宗之御腰物大小拜領被仰付、同十九日御暇被下り、

一同月廿五日江戸に參着仕り處、段々上使を被下、同廿七日又上使を以御米千俵拜領仕、同廿八日中納言中山王を召連登

城仕、土産品々獻上爲仕

若君様に及獻上物仕せり、同九月三日中納言御城に被爲召御饗應被下、同七日又被爲召於御數寄屋(秀忠)台徳院様御手自、中納言に御茶を被下、同十二日又登城仕、同十六日又々被爲

召御饗應之上、加賀貞宗之御腰物并御馬拜領仕、且又櫻田に屋敷を被下、直ニ御暇拜領仕り、中山王召連參府仕りニ付る者道中之御馳走、朝鮮人來朝同前ニ被

仰付り由ニ有、殊之外結構御座り、

一 中山王事右之次第ニ有、

權現様 台徳院様に御目見仕、

(家光)大猷院様御若年之節獻上物表仕り付有、

(家綱)嚴有院様御誕生、又ハ御代替

(編吉)常憲院様御代替之節も、以使者獻上物仕、御祝儀申上

り、中山王自分繼目之節も三度使者差上御禮申上り、

權現様御代、慶長十九年中納言中山王を捕來り以來、

琉人最早六度御當地に參上仕り、

嚴有院様御誕生、御代替、又者自分繼目付有差上り

使者ハ、日光山に及前々三度參詣仕り、

一 琉球國者薩摩守先祖以來被下置、小國ニ有者御座り得共、大唐端國之内ニ有ハ朝鮮・琉球と座席之次第も宜

り付、大唐に三年ニ一度宛進貢之使者差越來り故、于

今大唐之北京に使者差遣申り、中山王繼目之節者、大

唐王より翰林學士之者を封王使ニ差渡、武官をも大勢

添遣、冠并官服其外品々遣、與<sub>(儀)</sub>屹規式執行、中山亡王

之廟所に及封王使差越、祭をも執行申、旁懇成仕形之

由ニ御座り、

一 琉球國者中山王居城迄薩州より之海路三百里程有之、

殊難海故、薩州より春二度、琉球よりハ薩州ハ夏一度之外、通路難成海路ニ御座リ、琉球より大唐ハ海路三百里餘有之、難海之由申リ得共、段々鳴飛續有之跡相聞得、薩州ハ渡リよりハ、いか様少々ハ海路自由成様子聞得申リ、右之通、薩州より數百里之難海を隔リ大唐之端國ニ御座リ得共、薩摩守先祖共以武威手ニ入置、猶又、從

權現様ハ薩摩守高祖父家久領地ニ被下置、家久事ハ中納言迄任官被仰付、以其威仕置申付置リ故、其以來聊氣任之色ハ見得不申リ、中納言事ハ琉國を手ニ入申程之者ニ、官位等も結構ニ被仰付置リ付、於日本者勝る御會釋々宜者之様ニ琉人共存爲罷有由リ、其子大隅守者中將迄ニ任官被仰付、其子薩摩守事ハ侍從ニ被仰付置、部屋栖ニ罷有リ内早世仕、其子故薩摩守も中將迄ニ被仰付置リ付、漸々薩摩守家之威も薄罷成リ歟と、琉人共相計リ哉と、前々心附リ儀なとも御座リ付、以其心得常々無油斷仕置申付事御座リ、將又曾祖父大隅守家督仕リ内、寛文十一年琉球より大唐ハ進貢之使者船、於唐地遭海賊リ付、其段大隅守より披露仕、長崎ニ被逐御穿鑿リ處、東寧船之輩海賊無紛

付、身命者被助、過料銀三百貫目東寧船より爲御出、

同十三年右銀子中山王に被下リ儀御座リ、御威光を以右之通被仰付爲被下儀ニ御座リ得共、此儀大隅守働故と琉人共存罷有リ付、其以後者御當地に使者差上リ儀猶以規模ニ奉存事リ處、先年御登君様ニ被仰出リ節之通、此節も先格ニ相替、使者差上リ儀無用之筋ニ被仰付リハ、薩摩守事先祖共ニハ相替、働々無甲斐付、有來リ儀をも爲勤リ儀難成、家格も連々輕成行リ歟と琉人積リ儀も可有之哉、若其通ニも積リハ、大國ハ通融仕事リ得者何とも氣之毒ニ可有御座リ、琉球國之儀段々右之譯ニ御座リ付、先規不相替、此度も中山王使者差上御祝儀申上リ筋被仰付度、薩摩守奉願事御座リ、右件者内々之心遣リハ者表立ルハ難申上事御座リ、然共薩摩守乍領國大唐にも通融仕國之儀ニ得者、御代替之御事リ故、從前々之次第、又ハ内々之儀迄御内意申上置度、薩摩守存申事御座リ、

一 中山王使者差上リ儀先規之通被仰付、來年杯參府仕リ筋ニも被仰付リハ、右ニ表申上リ通、琉球ハ者時節を以通船仕儀ニ御座リ間、當春中琉球ハ申越、當六七月中使者薩州ハ來着不仕リ得ハ、來夏使者參府仕リ儀

2758

吉貴公御譜中

正文在島津大學

其方娘夭亡之由、哀惜之程同意之事、爲其如此、謹

2757

吉貴公御譜中

正文在文庫

被伸陽春之賀辭教墨披閱、愈勇猛越年、由、玆重思給、此表同前之事、然、如目錄贈與之、幾久令悅納、謹言、

朱力年  
寶永六年

仲春十六

薩摩少將殿

(花押 No.4)

2759

全御譜中

正文在文庫

葛粉一箱被獻之外、遂披露候、恐、謹言、  
朱力年  
寶永六年 二月廿二日 長重判

言、

朱力年  
寶永六年 二月廿一日

島津周防殿  
(久辨)

吉貴 (花押 No.12)

2760

吉貴公御譜中

先是吉貴登レ營、二元服之法式家老島津仲休書レ之藏三官庫、今誌三于茲一矣、

松平薩摩守殿

在口裏  
小笠原佐渡守 長重

2761

正文在文庫

吉貴様御元服被遊外節之御作法之次第

(家稱)  
一殿有院様御代ニ若、御國持御元服付、御盃御頂戴之節

若、御手自之御着御頂戴被遊外處、

綱吉公御代ニテ御國持ニテ御着を御給不被成リ、依之  
吉貴様御元服之節者、御着御給被遊間敷ト之儀ハ處、  
御手自御着御給被遊リ、其以後松平陸奥守吉村様御元  
服付御目見之次第、吉貴様御直御尋被遊リ得者、  
陸奥守様御元服之節者御盃迄を御頂戴ニテ、御着者御  
給不被遊ト被仰リ、然者

吉貴様ハ者取分御懇成御事ニテ候間、

鍋三郎様御元服之節者、御先格仰立及可有之事リ、

一 吉貴様御元服之節者御黒書院ハ先御出、御禮被仰上リ、

其節者御奏者番より嶋津又三郎と御披露有之御禮被仰  
上リ處、其月之御當番戸田山城守忠昌様御中段ニ、御  
名字之御折紙と御諱之字之御折紙を硯蓋様之物ニ入、  
被爲持御出懸リ付、吉貴様御出被遊リ得者、折  
紙計を被爲取御渡被成付、御頂戴被遊、御退出ハ  
時、御次ニ御老中御列座山城守様より、從四位上侍從  
被仰付之旨被仰渡リ、左ハ、則御太刀目錄被獻、御  
禮被仰上リ、其節山城守様方松平修理太夫と御披露、  
御禮被仰上リと直ニ御着座御前ニ表  
吉貴様ニ表御引渡出御、御土器御前ニ被召上、  
則御頂戴御手自御着御給、御退被遊リ時、山城守

様を以御腰物御拜領御頂戴被遊リ付、御拜領之御腰

物と御土器を御次ニ御持下、則御腰物被指之、御禮被

遊、又御引入御刀を被爲脱、則最前御引渡有之ハ所ハ

御着座御引渡入リ時、又御禮被遊、御退出被成ハ事、

右之趣書留置 鍋三郎様御元服之節、前以其沙汰可

仕旨、嶋津帶刀ハ被仰付書記置リ、以上、

宋カキ  
寶永六年 丑三月

2762

寫正文在家老座

口上覺寫

此節御代替之御事ハ間、先例之通琉球國司中山王より、  
以使者御祝儀爲申上度ハ、此時節早々相伺ハ儀如何敷御  
座リ得共、琉球國ハ老海路難海故、此方よりハ春秋、琉  
球よりハ六七月之内ならテハ通船難成リ、先規之通被仰  
付、若來年なと使者參府仕儀も御座リハ、早速申越、  
當六七月之内薩州迄來着不仕リ得者、來年夏中なと琉  
人參府仕儀ハ難成御座リ、乍然別ハ不自由成海路ニハ  
ハ故、常ニ往來仕ハ時節ニテ依年風並惡敷ハ得者通船難  
成節も御座リ間、當分方申遣ハも一定當夏薩州迄來着  
可仕儀も難計ハ付、此時節不差扣相伺申事御座リ、從前

吉貫公御譜中

殿有院様御誕生之節者、中山王より以使者御祝儀申上り、  
右先例表有之候に付、當上様先年御養君に被仰出り  
節、中山王より以使者御禮可爲申上哉之旨御同被成り得  
共、不及其儀由被仰渡り、異國より御祝儀なと申候者

寫正文在家老座

口上覺寫

三月

松平薩摩守

中山王使者之儀者、先祖共參勤仕り節召列申り、  
常憲院様御代替之節も、使者亡父(續)召列參府仕り、以上、

此節 御代替付り、琉球中山王より先規之通以使者御祝  
儀爲申上度旨奉伺り處、來秋私參府仕り節可召列り、諸  
事先例之通可致旨被仰渡奉承知り、早々琉球に申遣り様  
に國元は可申越り、乍然最前申上り通、琉球は老通路難  
海故、常に老三月中を限通船仕り得共、依年風並悪敷り  
得老通船難成儀も御座り間、來春一定召連參府可仕、御  
請之儀老追り可申上り、以上、

朱カキ  
寶永六年

三月九日

松平薩摩守

朝鮮・琉球迄に、朝鮮老御隣國之好迄を以御挨拶申事  
に、琉球之儀老御先祖様御武威を以御手に被入置り付  
り、御禮申上來候、然老上様より八倍臣(マニ)に異國之王を  
御持被成り故、御禮を被爲請と申筋に、又此御方御威  
光表折々に相聞得事に、殊 御代替に老

台徳院様以來中山王より御禮申上來り得老、旁以此度老  
御同不被成りぬ不叶次第に、然共當分老御老中様方表  
古キ譯御存知なき御方而已に得老 御養君之節之通一  
通之御沙汰に、使者差上りぬ不及なと被仰出り  
老、此方御勝手之御物入老無之筈り得共、至琉球此御方  
之御威光表如何と積り儀表可有之哉と、旁御賢慮被遊旨  
も、且又

公義立り儀老何事表、先間部(詮)越前守様に御内意被仰、越  
前守様御内々御差圖之旨を以、御勤被遊事に頃日猶以成  
行り付り、琉球國御手に入今迄御禮申上候次第、又ハ至  
琉球國常々御心遣之趣、帶刀に被仰合被遣りとの御口上  
之趣書付に被仰付、二月十八日越前守様に帶刀被遣、  
御家老奥村治右衛門に相達り處、同廿四日越前守様より  
帶刀被爲呼、中山王に先例之通、此節表御禮御申させ被  
成度思召り由、依之帶刀に被仰合被遣り口上書等委細見

届申外、御内々之思召御尤至極奉存外、此節之儀ニ付得  
 老、琉球ニ老時節を以通路有之所之儀ニ付得老、不及御  
 遠慮御月番に被仰出可然奉存外、先規之通ニ可被 仰出  
 と存外由、治右衛門を以御返答ニ存外、左外由、治右衛  
 門申外老、帶刀口上書又老方角繪圖迄、とくと越前守見  
 届申候、此次第二付得老、さそ常ニ御心遣成事ニ付半、  
 琉球老朝鮮と老格別之譯ニ存、第一日本之御威光ニ罷成  
 事ニ付間、先規之通不被仰付外由不叶事ニ付、繪圖迄被  
 遣外故委細譯相知外、内々存外より老、扱々御心遣成御  
 領國ニ存外と、吳々越前守申外と、治右衛門申外、左外  
 由琉球御手ニ入り以來之書付、琉人江戸に參外年間書并  
 薩州より琉球方角繪圖老彼方に被留置候、勿論御内々ニ  
 由爲被達 高聞事之由ニ付、口上書計被差返候、琉球由  
 緒書老此節差越外、被差出外繪圖老扣を寫せ、追可差  
 越外、

右之次第ニ付由、先比申遣外通、御月番本多伯耆守様  
 に被伺、先規之通中山王使者來夏可被召列と爲被仰渡  
 事ニ付、此件此方にも委書留置外様ニと被仰付外、其  
 元ニ由委書留置、ケ様之儀老御記録所に委書留置外  
 様可申遣旨 御意候、以上、

朱力本  
 寶永六年

三月十二日

嶋津帶刀

嶋津大藏殿  
 嶋津中務殿  
 嶋津將監殿  
 新納市正殿  
 種子嶋藏人殿

2765

吉貴公御譜中

今茲、吉貴寄ニ進曼荼羅壇一基・什器一部及舍利塔於南都  
 東大寺大佛殿、事詳見ニ于左一矣、

2766

寫正文在文庫

寫

一筆啓上仕外、然老此節大佛殿落成之由、薩摩守承知仕  
 外、大佛殿付由老存寄旨表候故、今度曼荼羅壇一基・什  
 器一部并舍利塔新構申付、各銘を記、殿内ニ納置外、此  
 段私より可申上旨薩摩守申付如此御座外、恐惶、

朱力本  
 寶永六年

三月十四日

嶋津帶刀

仲休判

龍松院公盛上人様

御同宿中

2767

正文在文庫

南都東大寺大佛寶殿者、天平勝寶四年聖武天皇敕願成就之伽藍也、爾後四百三十二年、高倉院治承四年十二月二十八日爲<sub>レ</sub>平重衡<sub>二</sub>所<sub>レ</sub>焚、安德天皇養和元年醍醐俊乘坊重源始發<sub>二</sub>大勸進之願<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>後鳥羽院文治三年四月<sub>一</sub>後白河法皇命<sub>二</sub>鎌倉右幕下源賴朝卿<sub>一</sub>再<sub>二</sub>造之<sub>一</sub>、仍令<sub>二</sub>重源<sub>一</sub>掌<sub>中</sub>其事<sub>上</sub>、建久六年其功全就、三月十二日主上行幸、賴朝參詣<sub>先是<sub>二</sub>月上落<sub>一</sub></sub>以落<sub>二</sub>慶之<sub>一</sub>、自<sub>レ</sub>是而<sub>レ</sub>又<sub>二</sub>三百七十三年<sub>一</sub>、正親町院永祿十年十月十日再擢<sub>二</sub>松永久秀之兵變<sub>一</sub>、爾來百四十餘年、貞享之初東大寺龍松院上人公慶奉<sub>二</sub>敕許台命<sub>一</sub>以張<sub>二</sub>勸進之勢<sub>一</sub>、遂終<sub>二</sub>脩復之功<sub>一</sub>、實寶永五年六月二十六日也、明年三月有<sub>二</sub>供養之儀<sub>一</sub>今之<sub>二</sub>上人公盛修<sub>レ</sub>之云、吉貴辱<sub>二</sub>右幕下之後裔<sub>一</sub>、領<sub>二</sub>薩隅日之三州<sub>一</sub>、祖先之志不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>繼、子孫之福不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>祈、追<sub>レ</sub>遠計<sub>レ</sub>久思而弗<sub>レ</sub>措、於是命<sub>レ</sub>匠新構<sub>二</sub>曼荼羅壇一基<sub>一</sub>製<sub>二</sub>什器一部<sub>一</sub>、別鑄<sub>二</sub>舍利塔<sub>一</sub>以納<sub>二</sub>殿內<sub>一</sub>、以表<sub>二</sub>心哀<sub>一</sub>、上則助<sub>二</sub>祖先之冥業<sub>一</sub>、下則期<sub>二</sub>子孫之永福<sub>一</sub>云、

寶永六年三月十四日

鎌倉右幕下二十二代苗裔、薩隅日三州主兼領琉球國從四位下行左近衛權少將兼薩摩守源朝臣吉貴識、

2768

正文在文庫

南都大佛寶殿重修新成有、故獻<sub>二</sub>曼荼羅壇并什器<sub>一</sub>別納<sub>二</sub>舍利塔一基<sub>一</sub>、以示<sub>二</sub>久遠<sub>一</sub>事具<sub>二</sub>於壇之記<sub>一</sub>云、

寶永六年三月十四日

薩摩少將源吉貴

2769

吉貴公御譜中

正文在加治木家跡

芳札令披見<sub>レ</sub>外、先頃於奧麻疹就相仕廻、爲歡紙面之趣、且又舊冬小源太出生之爲祝儀、別札之趣入念儀欣然之至<sub>レ</sub>外、謹言、

朱力年

寶永六年

三月廿一日

吉貴御判

鳴津<sub>(久幸)</sub>兵庫殿

2770

總豐公御譜中

○御實名

本命火

忠 御通字

忠休<sub>ヤヌ</sub>

忠字願火局而與命宮火相爲比、並休字願<sub>レ</sub>局是爲火生土吉之吉者歟

執

歸納



寶永六年三月廿六日 臣菊池武昭謹考

同三月二十五日、本田伯耆守正永月呼留守居、赤松甚右衛門則茂候乎夫亭、正永書其旨以授與焉、其詞云、吉貴之妻欲獻諸品物于

家宣公并 御臺君、向來以ニ女使一獻レ之、須下就ニ大奧女中一諧申詢之上矣、吉貴便誦正永泊間部詮房之館一謝レ

之也、四月朔日井上河内守正岑月番召ニ赤松則茂一謂曰、

吉貴之妻女獻ニ黃金酒肴于

家宣公、縮緬・酒肴于 御臺所ニ可也、同二日以ニ上藤女

岡村ニ爲レ使捧ニ黃金一枚・御肴一種・御酒一荷一獻ニ

家宣公、以ニ縮緬五卷・御肴一種・御樽一荷一進ニ上 御

臺君一也、辱岡村奉レ饋ニ

家宣公之嚴顔ニ蒙ニ 恩言ニ而退レ席、於ニ御客部屋一拜ニ領

白銀十枚一焉、然后奉レ見ニ 御臺君一頂ニ戴御小袖一重一、

去於ニ御客部屋一復給ニ白銀五枚一而歸矣、是女使進上之

初例也、

上様 御臺様は、妻女方より向後以女使、献上物等可被致外、大奥女中衆ニ可被相談外、

朱力キ 寶永六年三月二十五日 口裏在撰紙 朱力キ 松平薩摩守家來に

朱力キ 在包包 本多伯耆守様より御浪被成り御書付

此よし御序ニよろしく仰られ被下りへくり、かしく、さつまの守様より別して文下され、かたしけなくそんしまいらせり、

上様

御臺様へ 御おく様より、向後女中御使をもつて御けん上物被成りやうこと、本多伯耆守殿より仰わたされりよし、夫ニ付、こなた御さほう不案内ニ御座りまゝ、萬事御差圖申りやうこと仰被下、御ふみのやう誠に御念入らせられり御事、相心えまいらせり、かしく、

寶永六年

鳴津將監さま

ひて

吉貞公御譜中

同 帶刀さま

返事

つほね

川しま

正文在文庫

正文在文庫

なおく

上様への御ふミ上書、右之通にて御さり、以上、

四月朔日 御ふミに

とよ原

常盤井

たか瀬

とみ岡

川しま

此よしよろしく御申入外へくり、さつまの守さまお  
ふしに御座被成り事、めてたくそんしまいらせり、  
かしく、

さつまの守さまより文下されり、まつく 御ふた御所  
様御機嫌よくならせられりまゝ、御心易思しめしりやう  
に御申入外へくり、さては

上様 御臺様に御おくさまより、向後女使をもつて御獻  
上物被成りやうこと、本多伯耆守より 仰渡りて、さつ  
まの守さまかたしけなく思しめしりよしにて、御ふミの  
やうひろう申まいらせりへくり、かしく、

朱力年  
寶永六年

お

嶋津 將監殿

川嶋

同 帶刀殿

御返事

2776

此とおりに御ふミ上書御かゝせ被成りへくり、爲念申入  
り、以上、

岡むらさま

つほね

御つほねさま

る申給へ

一筆申入参らせり、まつく

御ふた御所様御機嫌よくならせられ、御めてたさ 其御  
ふた所様にも御機嫌よく御座被成、めてたく存まいらせ  
り、さてハ來月二日に御使御あけあそはしりて、こゝも  
とへ四ツ半に御あかり被成事りて、いよくかもしまゆ  
御つくりりて、あわせはしめてにて御さりまゝ、地黒の

あわせにて御あかり外へくり、御使の衆方御臺様へ御し  
うき御あけ被成り外へくり、御使の衆方

御臺様へ御しうき御あけ被成り外へくり、御使の人はかり  
御上にてよく御さけり、めてかしく、

猶く御めてたき、萬々年も御あけあそはしりやう

こといわる入まいらせり、御越り時分ハ四ツ半ここ

なたへ御あかり被成り外へくり、何もく御めにかゝ

り申入へくり、かしく、

岡むらさま

つほね

る申給へ

御局さま

栄カキ  
寶永六年

右三月卅日ニ参り

2777  
正文在文庫

おつて、そもしさま方まで申入まいらせり、二日ニハ岡

むら殿御壹人御使に御あけ被成りやうニ御申あけり外へ

り、二日ニハ四ツ少過ニ御使ニ御あかり外やうことそん

しまいらせり、さて又、二日ニハ岡村との御壹人にてよ

く御さけりか、重ての御使御あけり時分、岡村との一人に

て御手かわり御さなくりてハ成申ましくりまゝ、今壹人

岡村との手かわりニ御使御つとめり方、御申つけあそは  
しりやうニ御申あけり外へくり、これハ御心へさまのため  
申入まいらせり、かしく、

此よし、よろしきやうニ御申上り外へくり、此返事ニ

ハおよび不申りまゝ、さやうニ御心へ被下へくり、

栄カキ  
寶永六年三月晦日

岡むらさま

西之丸

御つほねさま

つほね

る申給へ

(表紙)

追 録 舊 記 雜 録 卷 四 十 二	吉 貴 公	寶 永 六 年	自 四 月
	繼 豐 公	至 九 月	

吉貴公御譜中  
正文在文庫

松平薩摩守  
(吉貴)  
妻

上様江

黄金壹枚

一種一荷

御臺様江

縮緬五卷

一種一荷

右之通明二日以女中使可被差上江、

朱力キ  
寶永六年  
四月朔日

朱力キ  
口裏在表紙  
松平薩摩守家來江

朱力キ  
件上包  
井上河内守様より御渡被成江御書付

正文在文庫

御城江女中使被差上江御衆

八重姫君様

松姫君様

尾張中納言様  
(寺通)

水戸中納言様  
(綱悠)

尾張姫君御方

サ子  
眞宮御方

スエ  
季君御方

水戸中將様

松平加賀守様  
(前田綱紀)

松平攝津守様  
(義行)

松平薩摩守様  
(島津吉貴)

(伊達吉村)  
松平陸奥守様

(淺野吉長)  
松平安藝守様

(池田吉泰)  
松平右衛門督様

朱力平  
寶永六年

2780

吉貴公御譜中

正文在文庫

御肴一種被獻之候、首尾好遂披露外、恐く謹言、

朱力平

寶永六年

四月朔日

正永判

松平薩摩守殿

在口裏

本多伯耆守

正永

2781

吉貴公御譜中

正文在文庫

先刻者御出被仰聞外之趣越前守に委細爲申聞外之處、被

入御念外御儀奉存外、然者井上河内守様は御禮之儀内證

承外處、先達本多伯耆守様は被仰渡外砌、御禮者相濟

外儀御座外間、今日之儀河内守様迄御禮被仰達外に及

申間敷旨被申外、且又此已後御祝儀事之節

2782

御奥方様は御女中使被差上外儀御用番様迄御伺に表可

有之哉之事、私迄被仰聞外付、乍序相尋外處、御窺に及

申間舖と申外、尤左様之節者御女中使を以 大奥迄御伺

之筋可然由被申外付、如此御座外、已上、

朱力平  
寶永六年 四月二日

在口裏

鳴津帶刀様

奥村治右衛門

寫正文在家老座

一 去月廿五日御月番本多伯耆守様より御留守居御用之由

被仰下外付外、赤松(前茂)甚右衛門罷出外處

上様 御臺様は妻女方より向後以女使獻上物等可被致

外、大奥女中衆に可被相談之由御書付を以被仰渡外、

御家門其外從前、御臺様は女中使被差上外御方者各

別外、御當代早々表立外右之通被仰渡外儀 御臺様

は之御由緒之一筋を被思召分段、別外御外聞實儀難有

被思召外付外、

太守様早速伯耆守様・問部越前守様は御見廻御禮被仰

上、御老中様は御留守居以御使者御禮被仰遣、勿論

西之御丸御輿は御文御禮被仰上、且又翌々日段々

難有被思召外段、帶刀御使者に越前守様は被仰遣外、

然處一昨朔日御月番井上河内守様を御留守居被召呼ひ付り甚右衛門罷出り得り者、以御書付

上様に黄金一枚・一種一荷

御臺様に縮緬五卷・一種一荷御献上可被遊旨以御書付被仰渡り、段々表立る被仰渡り儀結構成御仕合に御座り、

一 今月二日西之丸御老女衆依御差圖、四ツ半時分西之丸に岡村罷上、御廣座敷と申御客部屋に相詰居り處、大御年寄豊原様御出逢いつれもへ御挨拶有之、左りの御客あひしらいの御女中衆差引こゝ

上様に御目見被仰付り、八重姫様・松姫様・御上臈を先 御目見被仰付、其外御三家を初前くを被差上來り女中使、此方御使迄十六人有之を二段に被召出 御目見被仰付り、何れも出揃り節皆に能言へと 上意有之、跡より順々退出仕、左りの御客部屋に引取居り處、又豊原様御出、銀十枚之御目録被下、豊原様御當座にの御雜煮・御吸物被下、豊原様銘々御盃事相濟、其後 御臺様に最前之通二段 御目見被仰付、御次迄引取り節、一人ツ、御上段涯迄被 召出、御側に御詰被成りおまち御方と申り御上臈へ到、此御方様より之

御口上申上り時、御進上之御目録おまち様より披りの被懸 御目、左りの御側に被爲召 御臺様御手自御慰

斗昆布被下、幾久目出度と 上意有之のり由、岡村致頂戴此御方與この御作法之通御上臈・御つほねなとへ御禮申、下段に下り節、御目通この御客あひしらいの衆より御小袖一重拜領被仰付旨被申渡り、頂戴仕最前之御客部屋に參罷居り時、又豊原様御局御出

御臺様より被下り銀五枚之御目録致頂戴、引次に御部屋様より被下り銀二枚之御目録致頂戴下り申り、

一 右御禮御二方様より以御文則日被 仰上り、

一 右之使に被仰付難有思召り、使差上候儀且又献上物之儀御月番に及御禮可被仰上哉之旨、即刻帶刀御使この間部様に御尋被遣り得者 御城に被成御座り付る御家來より西之丸に相伺り處、折節御月番井上河内守様に越前守様より御尋被成り得者、先月女中使之儀御月番本多伯耆守様より被仰渡り節、太守様御出御禮爲被仰事り問、此節御月番に御禮に者及問敷旨、河内守様被仰り問其通に御心得可被成り、向後從 御前様之御進上物表に被相伺に不及り、大奥に被相尋差圖之筋に御勤被成り様に被仰り由、夜入りの越前守様御家老

奥村治右衛門より申遣り故、表に御禮者不被仰上り、

一岡村事ハ、今日爲御禮罷上り様こと昨日與御年寄衆よ

り御差圖付る、今日罷上り外、

右之段各爲承知申越り、以上、

寶永六年

四月三日

種子島彈正(伊時)

鳴津帶刀(仲休)

鳴津中務殿(久理)

鳴津將監殿(久寛)

新納市正殿(久珍)

種子嶋藏人殿(久時)

繼豊公御譜中

寶永六年己丑四月二日元服武州芝第一號又三郎忠

休一、吉貴爲加冠乃以三來國光長三尺三寸 代三百五十貫・相州秋廣

長尺二寸一分半 代金二十枚之二寶刀一授レ之、家臣島津帶刀仲休役二

理髮一獻ニ上諱之字一也、

吉貴公御譜中

自今年四月二日至同五日

嗣君大納言家宣公家光公之令弟甲府守相繼重公之嫡男而先レ是爲ニ御養子 出ニ御于大廣

間有ニ御代替之拜禮、(在左)左府之侯伯登レ城矣、因レ之  
同三日吉貴着貞登レ營獻ニ上御太刀一腰備前國綱代 金十五枚・御馬  
一匹代金、從ニ官位之列ニ着座、御老中井上河内守正岑  
奉レ伸ニ賀儀、一同拜禮既而退去、到ニ執政并間部詮房  
之館ニ述ニ祝詞ニ餽レ之以ニ太刀目錄、同六日以ニ若松彦  
兵衛久龜留守 居役爲ニ使者ニ進ニ上白銀三十枚・箱肴一種于  
御臺君、白銀二十枚于 竹姫君一也、

2785

寫正文在家老座

一上様御代替之御禮昨日より相始り、御出仕之面々正  
月三ヶ日之通御登 城被成、御太刀・御馬代被獻り様  
こと此程被仰渡り付る、

太守様今日六時過御直垂ニ御登 城、

上様大廣間ニ 出御、眞之御太刀并御目錄御持參、直

御着座、御同列之御方々、何れも御持參御着座被成揃

り節、御月番井上河内守様より御代替之御禮申上りと

御披露之節、一同ニ御禮被仰上御退出被遊り、御太刀

者備前國綱代十五枚、此節者箱黒ぬり縁鑄懸御太刀之

銘書計時繪、外箱者白木ニ可調旨前以御差圖有之其通

被仰付り、先年

2784

2783

(綱吉)  
常憲院様御代替之節 寛陽院様より十五枚之御太刀被

獻<sup>レ</sup>先例故此節右之通<sup>レ</sup>、御馬代老大判金一枚<sup>ニ</sup>あり、

一御城御退出櫻田御屋敷<sup>ニ</sup>被爲入、左<sup>外</sup>右御老中様・間

部越前守様<sup>ニ</sup>御見廻御太刀目録被遣<sup>レ</sup>、若御年寄中<sup>ニ</sup>

老御留主居御使<sup>ニ</sup>あり御太刀目録被遣<sup>レ</sup>、

右之通 御代易以後初<sup>レ</sup> 御目見被遊<sup>レ</sup>處、御禮首尾

好被仰上恐悦之至奉存<sup>レ</sup>、各爲承知此旨申越<sup>レ</sup>、便之

時分以書狀御祝儀可被申上<sup>レ</sup>、以上、

朱カキ  
寶永六年

四月三日

種子嶋彈正

嶋津帶刀

嶋津中務殿

嶋津將監殿

新納市正殿

種子嶋藏人殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

覺

吉貴公思召之旨有之、小源太殿御名字を新被稱末川と御  
折紙被遣<sup>レ</sup>、於御國許其御元迄遣、其御許より小源太殿

御頂戴<sup>レ</sup>様可申越旨、於江戸當寶永六年丑正月二日私<sup>ニ</sup>

被仰付<sup>レ</sup>故、同日式日之御使三宅奎兵衛・武市郎兵衛使

ニ御折紙爲持差下<sup>レ</sup>付<sup>レ</sup>、同月廿一日其御許より被相達、

右御折紙小源太殿御頂戴被成<sup>レ</sup>、右之譯御記録ニ惱記置

外様可有御申付<sup>レ</sup>、右御折紙之扣糸相渡申<sup>レ</sup>、是又御記

録所<sup>ニ</sup>納置<sup>レ</sup>様御申付可被成<sup>レ</sup>、此段達 貴聞件之通御

座<sup>外</sup>、以上、

朱カキ  
寶永六年

丑四月十一日

嶋津帶刀印

(久遠)  
佐多豊前殿

吉貴公御譜中

吉貴之夫人養<sup>ニ</sup>病疾<sup>一</sup>、欲<sup>レ</sup>浴<sup>ニ</sup>于相州湯本之温泉<sup>一</sup>、訴<sup>ニ</sup>

執政井上河内守正岑<sup>一</sup>、而獲<sup>ニ</sup>之容<sup>一</sup>也、吉貴就<sup>ニ</sup>于御用

人<sup>一</sup>告<sup>ニ</sup> 御臺君<sup>一</sup>云、期<sup>ニ</sup>將軍 宣下之賀儀<sup>一</sup>、而後雖<sup>レ</sup>

應<sup>レ</sup>促<sup>レ</sup>行、當<sup>ニ</sup>今時<sup>一</sup>宜<sup>ニ</sup>乎湯治之節<sup>一</sup>、仰請<sup>レ</sup>被<sup>ニ</sup>恩許<sup>一</sup>

遣<sup>レ</sup>焉、御臺君聽<sup>レ</sup>焉、同四月十一日 御臺君餞<sup>レ</sup>之賜<sup>ニ</sup>

御拾十・干鯛一箱<sup>一</sup>、同十三日發<sup>ニ</sup>江府<sup>一</sup>、同二十日到<sup>ニ</sup>

于湯本<sup>一</sup>、三雲新兵衛定恒<sup>一</sup>、野村源兵衛<sup>一</sup>、長谷場

源助・有馬次右衛門<sup>一</sup>、能勢仁右衛門・愛甲次右衛門



共納、税所次郎右衛門新番監、醫師木村元達・小田宗信・

川越

野本玄固其外至三于輕士二都四十餘人、足輕六十八人從レ行、浴三療三十日于茲二、五月二十日辭湯本一同二十五日歸江府一、

2768 正文在文庫

なをく御ふみの通御つゐてに申上まいらせりへく  
り、めてたくかしく、

御ふみ下されり、まつく

上様 御臺様御機嫌よく御座被成めてたくおほしめしり  
由御尤ニそんしまいらせり、さては此たひをくさま湯治  
被成り付、御餞として

御臺様より御拾・御さかなまいらせられり御事、御禮仰  
上られ御ふみのやう御つゐてよろしく御さた申上まい  
らせりへくり、めてたくかしく、

朱カキ  
寶永六年四月十一日

豊原

ときハ井

嶋津 監物殿

たかせ

同 帶刀殿

とミ岡

御返事

川しま

2789 正文在文庫

なをくよく申せと仰られり、めてたくかしく、  
御ふみ下されり、まつく

御ふた御所様御機嫌よく御座被成り御事、めて度おほし  
めしり由、さては此たひをくさま御湯治なされり付、  
御臺様より御餞と御座りて御拾御もくろくのことくまい  
らせられり御事、御禮御ふみのやう則披露いたしりへ考、  
御ねん入せられり御事ニ覺しめしり、よく申せとの御事  
にて御さり、めてたくかしく、

朱カキ  
寶永六年四月十一日

嶋津 監物殿

ひて

同 帶刀殿

つほね

御返事

2790 全御譜中

前大將軍家康公者、文武相總寛猛兼濟、撥レ亂反レ正而  
領、扶柔一、諸侯畏レ之、兆民戴レ之、應レ謂二天下草創之  
君也、垂三靈蹤于下野州日光山一奉レ崇三

東照大權現宮<sup>一</sup>、舉<sup>レ</sup>世皆崇國悉敬<sup>ニ</sup>於當家<sup>一</sup>、公之恩德大山不<sup>レ</sup>高大洋不<sup>レ</sup>深、更無<sup>レ</sup>據<sup>レ</sup>謝<sup>レ</sup>之、祖父光久・父綱貴雖<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>宮殿造立之思<sup>一</sup>、有<sup>レ</sup>事不<sup>レ</sup>遂、由<sup>レ</sup>是吉貴繼<sup>ニ</sup>父祖之志<sup>一</sup>、豫使<sup>下</sup>家老島津帶刀仲休<sup>ニ</sup>議<sup>中</sup>事于吉野山學頭願王院權僧正智周<sup>上</sup>、告<sup>ニ</sup>東叡山御門主輪王寺准三宮一品公辨親王<sup>一</sup>乃蒙<sup>ニ</sup>之恩免<sup>一</sup>、今茲寶永六年己丑四月相<sup>ニ</sup>攸于廐城大手口<sup>一</sup>、欲<sup>レ</sup>再<sup>ニ</sup>興薩州鶴田郷紫尾山大願寺<sup>一</sup>往昔為天台宗此年廢其号正昭矣于茲<sup>一</sup>為<sup>ニ</sup>別當寺<sup>一</sup>經<sup>中</sup>營

東照宮並代代之 御牌殿<sup>上</sup>、於<sup>レ</sup>是親王改<sup>ニ</sup>廢號<sup>一</sup>、曰<sup>ニ</sup>大雄寺<sup>一</sup>曰<sup>ニ</sup>佛日<sup>一</sup>院曰<sup>ニ</sup>南泉<sup>一</sup>、且教<sup>ニ</sup>權僧正智周<sup>一</sup>為<sup>ニ</sup>開基之僧<sup>一</sup>命<sup>中</sup>常院室之良家<sup>上</sup>、以<sup>レ</sup>之故以<sup>ニ</sup>仲休<sup>一</sup>為<sup>ニ</sup>總監使<sup>一</sup>令<sup>下</sup>比志島隼人範房<sup>一</sup>副<sup>上</sup>之、用人市來次郎左衛門家賢・相良權太夫長規・町田八右衛門忠堯、普請奉行谷山角太夫忠和等關<sup>レ</sup>之、其外預<sup>レ</sup>事之士數人也、同年五月十五日始<sup>ニ</sup>經營之事<sup>一</sup>、六月九日始運<sup>ニ</sup>三斤斧<sup>一</sup>、同十三日大起<sup>ニ</sup>丁夫<sup>一</sup>築<sup>ニ</sup>御牌之屋地<sup>一</sup>、八月十二日吉貴如<sup>ニ</sup>彼地<sup>一</sup>見<sup>レ</sup>之、既而定<sup>ニ</sup>宮地<sup>一</sup>、同二十五日 御牌殿立柱、翌日上棟、九月朔日築<sup>ニ</sup>宮地<sup>一</sup>、十月十五日立柱上棟、

大雄山

佛日寺

南泉院

2792

吉貴公御譜中

正文在文庫

陽春之吉兆雖事舊<sup>外</sup>啓<sup>一</sup>輪<sup>外</sup>、愈可為平安<sup>外</sup>、此邊無恙<sup>外</sup>、仍御太刀一腰・馬一疋并調合保之<sup>ニ</sup>香合贈<sup>外</sup>、尚屬口上<sup>外</sup>、謹言、

朱力年

寶永六年

孟夏十三

薩摩少將殿

(近衛家忠)

(花押

No.4)

2793

全上

改年之嘉儀雖事舊<sup>外</sup>啓<sup>一</sup>簡<sup>外</sup>、弥可為堅固<sup>外</sup>、此邊無恙<sup>外</sup>、仍御太刀一腰・馬一疋并調合之薰物<sup>ニ</sup>香合贈<sup>外</sup>、尚屬口上<sup>外</sup>也、

朱力年

寶永六年

初夏十三

松平薩摩守殿

基淵

吉貴公御譜中

正文在文庫

如來論今度東行、依之到途中飛札殊兩種被贈與、懇篤之  
模様令感悦外、愈其許平安之事珍重思給外、今夕無難嶋  
田驛令來着外、尚於江府期面謁可申謝外條不能多端外、  
謹言、

朱力キ  
寶永六年 孟夏十七

(近衛家久)  
花押  
No.10

薩摩少將殿

全上

御香具品々并御看一種被獻之、首尾好遂披露候、恐々

謹言、

朱力キ  
寶永六年 四月廿一日

正岑判

在口裏  
松平薩摩守殿  
井上河内守  
正岑

吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく御機嫌よく御さなされ御にきくの御事に

てひとしほめてたくそんしまいらせ外、めてたくか  
しく、

御ふミ下され外、まつく

御ふた御所様弥御機けんよく御座なされ、めてたく思し  
めされ外由御尤ニそんしまいらせ外、さては

左大將様此度はしめて御旅行にて御座なされり處ニ、御  
道中御さゝハリもあらせられ外ハて、こん日御着あそハ  
し外御事、めてたく思しめし外よしにて御ふミ下され、  
則ひろういたし外へは御まんそくに思しめし外、めてた  
くかしく、

朱力キ  
寶永六年四月廿三日

鳴津將けん殿

ひて

同 帶 刀殿

つほね

御返事

吉貴公御譜中

同年五月朔日

大納言家宣公轉ニ任正二位内大臣征夷大將軍兼右近衛大

將ニ爲ニ右馬寮御監ニ補ニ源氏長者淳和獎學兩院別當一也、

吉貴 東帶乘レ騎懸ニ大尉於馬一 登レ城、自同十一日至十三日、  
派レ之職ニ番ヲ於柳萬一持レ之

2798

在府諸侯登 城拜禮、十二日吉貴<sup>東登</sup> 城獻<sup>二</sup>御太刀一  
腰・御馬代<sup>二十</sup> 黃金<sup>二</sup>奉<sup>三</sup>拜禮<sup>一</sup>、同十五日因<sup>二</sup> 將軍  
宣下之賀儀<sup>一</sup>有<sup>二</sup>猿樂<sup>一</sup>吉貴應<sup>レ</sup> 徵見<sup>二</sup>物之<sup>一</sup>矣、

正文在文庫

御念入まいらせり御事ニ御座り、何もひろういたし  
りへくり、此よし宜御申入まいらせり、かしく、  
さつまの守さまより御ふみ下されり、まつく  
御ふた御所様御機嫌よくならせられりまゝ御心やすく思  
しめしりやうニ御申入りへくり、さては昨日  
御臺様よりおくさま御湯治の御留守御たつねあそハしり  
御事迄ニ、御もくろくの通  
さつまの守様 満姫さまへまいらせられりへ者、かたし  
けなく思しめしりとの御事にて御禮御ふみのやう、かし  
く、

朱力キ  
寶永六年五月朔日

鳴津將監殿  
同 帶刀殿  
御返事  
とよ原  
常盤井  
たかせ  
とミ岡

2799

全御譜中  
正文在文庫  
爲端午之祝儀帷子單物數十到來欲覺候、委曲大久保加賀  
守可述り也、

朱力キ  
寶永六年  
五月二日  
家宣公  
墨印

薩摩少將殿

2800

吉貴公御譜中  
正文在<sup>六</sup>庫  
尚く明後日ハてんきもよく入せられりハんと一しほ  
めてたくそんしまいらせり、かしく、  
御ふみ下されり、

公方様 御臺様弥御機嫌よく御座なされ、めてたく思し  
めさせられり由御尤そんしまいらせり、さては、此内御  
ねかひあそハしり通  
左大將様明後十三日そこ御ほとへ入せられり半よし、け  
さほとおほせ出されかたしけなく思しめされり由、それ

川 嶋

ニ付御ふミ下され、御懇入せられ御事申上りへく、  
めてかしく、

朱カキ  
寶永六年五月十一日

豊原

とき八井

嶋津將けん殿

たかせ

同 帶 刀殿

とミ岡

御返事

川しま

2801  
吉貴公御譜中

正文在文庫

誠ニハ御ねん入られ御事ニそんしまいらせり、文の  
やうひろういたしまいらせり御事ニ御さり、十三日  
ニハてん氣も入らせられ半と一入めてたくいわる  
入まいらせり御事ニ御さり、此よし御申入りへく、  
かしく、

薩摩守さまより文下されり、まつく

公方様

御臺様御氣けんよくならせられりま、御心易思しめしり  
やうに御申入りへく、さてハ此うち御ねかひ被成り通  
左大将様明後十三日入らせられりよし、左大将様より御

申入り御事忝りよし

御臺様まで 仰上られたきよし文のやう、めてかしく、

朱カキ  
寶永六年五月十一日

あ

嶋津將監殿

ひて

同 帶刀殿

つほね

御返事

2802  
吉貴公御譜中

正文在文庫

猶以御禮ニ者今日 西丸に可被罷出り、以上、

爲今度之御祝儀明後十五日御能被 仰付り間、可致見物

旨被 仰出り條、着長袴五時 御本丸に可有登 城外、

以上、

朱カキ  
寶永六年 五月十三日

井上河内守

大久保加賀守

本多伯耆守

秋元但馬守

小笠原佐渡守

土屋相摸守

松平薩摩守殿

## 全御譜中

嚮是

將軍家宣公於<sub>二</sub>武城<sub>一</sub>有<sub>二</sub>將軍宣下<sub>一</sub>、以故 近衛左大將家久公發<sub>二</sub>京師<sub>一</sub>來<sub>二</sub>武城<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>青松寺<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>旅館<sub>一</sub>祝<sub>二</sub>將軍家之敘任<sub>一</sub>也、近衛家者忠久以來之由致至<sub>二</sub>于今<sub>一</sub>、因以 家久公渡<sub>二</sub>御吉貴之芝第一、豫達<sub>二</sub>間部越前守詮房<sub>一</sub>、且就<sub>二</sub>執政井上河内守正岑<sub>一</sub>窺<sub>レ</sub>之乃所<sub>二</sub>恩免<sub>一</sub>也、詳開<sub>二</sub>於後<sub>一</sub>、2804  
全御譜中寶永六年丑五月十三日四時分芝御屋敷<sub>レ</sub> 近衛左大

將家久様入御御饗應之次第

一 近衛様御事ハ此度

將軍宣下御祝儀付<sub>レ</sub>御下向被遊<sub>レ</sub>、就夫先爲御饒於京

都銀百枚・蠟燭千挺・七嶋鏝節一箱御進上、諸大夫中

ニ<sub>レ</sub>銀子廿枚ツ、被下<sub>レ</sub>、就夫 御成之儀者 御先祖様以來之御由緒<sub>レ</sub>有之、當時之御縁も御座<sub>レ</sub>付<sub>レ</sub>、此節御下向之序ニ御成被下度<sub>レ</sub>、我享居古<sub>レ</sub>得共其段ハ屋敷も差迫<sub>レ</sub>間、宜御取成ニ預度之旨 御意之由、先達る諸大夫中<sub>レ</sub>嶋津帶刀方申越<sub>レ</sub>處ニ達 御聽御幸被思召<sub>レ</sub>、御逗留間も有之<sub>レ</sub>ハ、御成被成度被思召<sub>レ</sub>由御託之趣諸大夫衆方帶刀迄申來<sub>レ</sub>、右ニ付<sub>レ</sub>ハ御成之儀、且又交野宮内卿様も御由緒御座<sub>レ</sub>付<sub>レ</sub>、右被爲入候節被相招度之由、四月廿日帶刀を以間部越前守様<sub>レ</sub>御内意被仰達<sub>レ</sub>處、格別之御由緒ニ候間御用番ニ御申可然<sub>レ</sub>、交野様御事<sub>レ</sub>御尤ニ被思召<sub>レ</sub>由御返事有之<sub>レ</sub>ニ付、御用番井上河内守様<sub>レ</sub>御留守居赤松甚<sub>レ</sub>右衛門<sub>レ</sub>以被相伺<sub>レ</sub>處、御勝手次第可被成<sub>レ</sub>由御返事有之<sub>レ</sub>、但 右御伺之節 太守様<sub>レ</sub>御旅館<sub>レ</sub>兩三度御參被成度之旨被相同、是又如其相濟<sub>レ</sub>付<sub>レ</sub>、四月廿五日九半時方御參緩<sub>レ</sub>御對顔有之、禁裏方御拜領之御すそ分之由ニ<sub>レ</sub>五色紙御給、七時前御歸被成<sub>レ</sub>、又五

月十二日御登 城御歸ニ御參、又十五日御登 城

御歸ニも御參被成<sub>レ</sub>、此時御對顔之上ニ<sub>レ</sub>末廣貳本御給被遊<sub>レ</sub>、一 右御成之儀被相同<sub>レ</sub>、前以御臺様御用人堀源左衛門様・早川勝七郎様<sub>レ</sub>も内意被仰上<sub>レ</sub>處、無餘儀御間柄ニ候間御次次第被成<sub>レ</sub>様ニと之御事<sub>レ</sub>、一 御願之通相濟<sub>レ</sub>付<sub>レ</sub>者弥御招請被成度<sub>レ</sub>由、帶刀御使

者こゝ 左大將様に被仰上り處、必可被爲成り、御隙

之時日被相考彼御方方可被仰遣之由御返答こゝり、其後も段々御引合被成り儀有之、帶刀事御旅宿に被遣居間にも被召出り付 御直之御返答も被仰遣り也、

一 五月十一日從 左大將様に御使者來十三日此御方方可有 入御旨被仰遣候付、早速御家老嶋津帶刀殿御使者こゝる御禮被仰上候、翌日 太守吉貴様御參上御禮被仰上り、

但 御旅館愛宕下青松寺也、從 公儀御馳走人鍋嶋甲（信）斐守様・大田原飛彈守様也、

一 十三日之朝、弥今日被爲成度由帶刀殿御使者こゝる被仰上、四時分 入御り、其前晚 御臺様に老御年寄衆迄御文、御月番御老中様・秋元但馬守様にハ御留守居を以右御案内御口上となしに取次御用人迄被仰遣置り、

一 御屋敷前御留守居附并足輕張番手桶出之、  
一 入御之節御門前に御家老・若年寄・御番頭・御用人・御留守居つくはい居り、御玄關脇之傍こゝ物頭又老御廣間御番人つくはい居り、

但 帶刀事ハ御式臺迄見廻り様こゝと被仰付り故御殿内

二 罷在り、

一 五時過交野宮内卿様御先達り御出り、櫻井少將様ハ四時前御先こゝ御出被成り、

但 宮内卿様ハ此節之御祝儀こゝ付り准后使として御下向、櫻井様ハ 近衛様之御かたらいにて御下向也、

一 御中門之内御書院寄附之間縁こゝ新こゝ御輿寄を被設り、左大將様四時過被爲 入り、則御輿寄迄御輿被爲 召り、御裝束紅之御直垂被爲 召り、

但 御輿ハ白木也、  
一 御玄關石壇薄縁之外迄 太守様御狩衣こゝる被遊御出迎、御互こゝ御倉こゝ不及 太守様被御先立御輿寄之所ハ御待詰御輿之戸を被爲明、直こゝ御案内大御書院上段御褥之上こゝ被請り、

但 被爲成り付りハ御老中様に被相伺り上、何れも御勝手次第こゝと被仰渡り旨、御高家衆品川豐（伊氏）前守様・織田能登守様（信門）ハ五月十一日御届有之り、

一 白木臺三方敷紙敷之長御裝斗上り、御配膳、櫻井少將様御手長諸大夫衆、御勝手之御手長、此方御小性相勸之、  
一 御薄茶上り

一 御たはこ盆上ル

一 此後 左大將様も御拜領物

一 御太刀・御馬代黄金十兩

一 縮緬十巻

一 昆布一箱

一 干鯛一箱

一 御樽一荷

右太守様江御給、披露諸太夫進藤刑部大輔

一 御太刀・御馬代黄金十兩

一 昆布一箱

一 干鯛一箱

一 御樽一荷

右又三郎様江

右御拜領ニ付御太刀ハ 太守様御出御頂戴也、此外之

御拜領物ハ御勝手江相通り外、御家中迄之被下物、左

印、

一 綸子十端紅白

一 昆布一箱

一 干鯛一箱

一 御樽一荷

右御前様江(吉貞室)

一 綿三十把ツ、

一 干鯛一箱ツ、(元久緒巻)

右陽和院様・信證院様江(續賢則室)

一 白銀十枚單幣子式

一 白銀五枚單幣子式

一 白銀三枚單幣子式

一 白銀三枚宛

若年寄

嶋津(仲林)帶刀殿江

御番頭格二而御副詰 種子嶋彈正江

御用人 比志嶋隼人江

御御御用人 市來次郎左衛門

御用人 菱刈新五兵衛

御用人 平田清右衛門

右同格御留守兼兼役 赤松甚右衛門

御用人 三雲新兵衛

又三郎様御守 相良奎之助

右同 後醍院喜兵衛

御留守居 若松彦兵衛

同 森川理右衛門

右之通拜領被仰付外、支度長袴着之、

御内證之御拜領物

一 耕作圖一卷櫛笥中將隆成朝臣筆

一 御良嵩入十ヲ



太守様に

一 釣香爐一箱

一 御筆一箱

御前様に

一 御印籠一箱

一 音羽焼作物一箱

又三郎様に

一 折枝

一 御香之具一箱

陽和院様に

一 哥仙色紙一箱

一 御袖扇一箱

信證院様に

右左大將様に

一 御碗箱一箱

一 御哥書御白筆一箱

右關白様より

太守様に被遣御拜領

一 紗綾五卷紅白

陽和院様御上臈おくう

一 白銀五枚ツ、

太守様

御局

御前様

御局

又三郎様御守

澤井

御前様年寄

淺野

陽和院様年寄

梅野

同

野村

同

竹野

一 同貳枚ツ、

右太守様に

一 御太刀・銀馬代一枚ツ、

諸大夫五人

一 扇子一箱

高木英淳

一 御肴一種

木村隼人

右之通左大將様より被下り、

左大様御供之人數(將脱カ)方此御方様へ進上物

一 御太刀・銀馬代一枚ツ、・御肴一種ツ、

諸大夫

進藤刑部大輔(長之)

同

今大路治部少輔(考在)

同

進藤修理大進(長寛)

同

佐竹主税助(義方)

同

齋藤右衛門尉(房薄)

醫師

高木英淳

一 扇子一箱

布衣

木村隼人

一 御太刀・銀馬代一枚

御近習

立野安尉

一 扇子一箱ツ、

此六人ハ當日御屋敷江御供ニ而被參下

吉見靱負

佐久間織部

吉村喜内

松井主殿

木村主膳

一 扇子一箱ツ、  
右又三郎様に

一 御看一種ツ、・御樽代貳百疋ツ、

諸大夫五人銘々

一 金子貳百疋ツ、  
木村隼人

右御前様・陽和院様・信證院様に右之通進上之外、

一 御雑煮・御吸物・御肴・御土器等上ル、

御土器  
・御皿数の子

御雑煮 大へき  
餅こんぶ  
串焼  
串柿  
御吸物 ひれ  
御肴 さしひ鯛

右同  
御皿ゆへし

御吸物 ひれ  
御肴 さしひ鯛

右二獻被 召上外後御進上之御刀 備前國行包長貳尺  
四寸三分代金廿枚・御脇指

來國俊七寸九分  
半代金十五枚

太守様御持參、御上段敷居涯に進上之躰交野様に被  
相伺御様子に被成り處、

左大將様より御會釋有之り付る、直に御前に御持參被

成被差置り、太守様御退去中段に御着座り處、御手自

御取左之御脇に被召置御喜悅之由御挨拶有之り、左外

の御上段に被相扣御土器・御肴被進、其御土器被差上

御肴をも被差上、夫より御土器交野様・櫻井様と御銚子  
巡りに相納ル也、

但右被獻り御太刀へ前以御納戸奉行山口五大夫持出

御末席より御取被遊り、

御肴 焼たいらき  
杉やうし

御盃 下ル

御獻納り外後 又三郎様御幼稚故

太守様御同道に御出、御太刀・御馬代黄金十兩諸大

夫刑部大輔披露に則り御下り、其後左之通御進上物刑

部大輔披露在之、

一 白あや十たん 一 白ねり十たん

一 御樽代千疋 一 箱肴貳種

御前様より 一 白羽二重十疋ツ、 一 箱御肴貳種ツ、

陽和院様・信證院様に

右終り爲御慰御進上物左之通に有之、諸大夫刑部大輔

披露、

一 御掛物二幅 鶴之繪 邊墨筆  
鶴之繪 雪舟筆

一 唐屏風一雙 雲台 國淡洲 國影刻

太守様より

一 唐繪卷物一軸 羅萊國伊英史父製

一 瑪瑙人形壹鉢 閩羽之像

又三郎様方

一 銀釣香爐壹

御前様方

一 蒔繪御料紙御硯箱一通

陽和院様方

一 唐籠飯一通

信證院様方

一 右之後嶋津帶刀殿・種子嶋彈正・比志嶋隼人・市來次

郎左衛門・菱刈新五兵衛・平田清右衛門・赤松甚右衛

門・相良李之助・後醍院善兵衛・若松彦兵衛・森川理

右衛門壹人ツ、被召出、中敷居下一枚目ニ有帶刀殿、

彈正・隼人其外ハ一枚目半ニ有 御目見被仰付外、

諸大夫衆披露、左ハ白木三方ニ御土器三、白木三方

御肴、白木八寸御銚子錫瓶ニ有上り、帶刀・彈正・隼

人被召出御土器被下御上段ニ被召呼、御手自御押被下

之外、

但御用人三雲新兵衛ハ東之澤ニ御前様御供ニ有不在

合外、

右三人外ハ 御目見迄也、

一 御臺様方堀源左衛門殿奥御用人御使ニ有檜御重一組ツ

、御肴一折ツ、 太守様・御前様ニ御給被成、右之

御菓子右引次ニ上ル、

一 右終の依 御錠 太守様御長袴ニ被改、

一 右之後御伺之上御能始り外、此時交野三位様を以難方

之者共床机可有御免哉之旨被相伺、則御免故樂屋より

御免之段申通、翁相仕廻樂屋ニ入り節ハ床机ニ懸り外、

御能組左ニ記、

翁

面千箱  
三番神 嘉清 仁右衛門 六助

難波丸次郎

權右衛門

三方衛門 惣右衛門 長右衛門 又 八

但觀世三十郎相勤善外へ共俄病氣故喜内勤之、

八嶋喜内

利兵衛

兵右衛門 伊兵衛

權三郎

檜垣觀世太夫

利左衛門

市郎兵衛 清 六

庄兵衛

道成寺 宝生太夫

新次郎

庄九郎 清五郎 又八 左吉

祝言喜内

利兵衛

兵右衛門 伊兵衛 松三郎 伝七

三本柱 仁右衛門

比丘貞 八右衛門

道成寺間 仁右衛門

八嶋那須間 八十郎

一 右御會釋等相濟御附書院に渡御、此間ニ御翠簾を卷、御上段方三間程下中段之御座中ニ兩面之御屏風を以、

下段より不見入様ニ立之、御見物被遊り也、

一 右御見物之御座構相濟外後御上段ニ被爲成り、則御縁

下ニ前置之御歩行十人ツ、替々相詰り、

但 御家中之面々棧敷之間方御能見物被仰付り、

一 御たはこ盆上ル難波御能濟上ル御菓子 一一 玉水かん 住吉餅

一 泡盛砂糖・泡盛砂糖漬色々上ル、

八嶋相濟上ル

煮染物 あわび 干椎茸 焼き出しも

湯取餅

御吸物 大鯛子込 わり山升

御肴 たいらき しゃうか酢

白木三方御土器一重御銚子錫ニあ上ル、

一 檜垣御能相濟御中入附書院に渡御、此間ニ上段之簾構

しつらい、其後上段ニ出御御料理上ル、

太守様御本膳并御引物御持参、

御本膳但三汁十菜外ニ御引物三

御土器 一塩鯛 同わり山升 塩引銚子込 よりふし はなゆ

御汁 はな茄子 はつ茸 かわ午房

御小角

御漬物 いろいろ 山升

御食

御京目 はた白 同すりミ 大かき 漬松露

御二

梶焼箱 むし鮑 赤かいたけ わさびみそ

御海鼠桶

御酢

御汁 すゝき 青山升

御小茶碗 いり鳥小鴨 わり山升

御三

御地物皿 煮ひやし 丸はんへん くしこせみ 銀なん

冷もつく  
御汁 はしかみ  
すりいも  
かさいのり

御中皿 焼交ミそ漬鱒  
かはやく  
かまぼこ

御よつ目

扇子形 鯛かきだい  
さきより  
わさひ

糸花かいしき

いり酒

からし酢

御五ツ目

御大皿 さぬき小鯛

御引の但三品皿老ツニ盛交 太守様御引被成り

一焼鮎いろ付ふりしほ 一焼鳥ばん 一甘鯛一日ほし

御引土器一重

御肴魚でん

御吸物 雪たまこ  
小あひ  
くこ

三邊目

御盃臺嶋台蓬菜

御肴三方作物梅ニ竹御肴結のし

右御配膳諸大夫中御手長御近習中、御勝手御手長此方  
之御小姓役也、

御膳具白木三方、地物ハ惣様焼物金作を以御紋を  
書、

一御相伴交野三位様・櫻井少將様、

一御膳之上ニ御獻之納ニ蓬菜之御盃臺上ル、

太守様ハ御盃事有之、左ノ御附後段、

砂糖 うき駄

朝漬

一御湯上ル、御本膳 太守様御下被成り、

白木八寸ニ中椀すへ 太守様へ差上り御湯御試御目通ニ而  
有之、

御茶菓子 翁餅  
小きい  
水くり

御濃茶上ル、

御皿

御後くわし 筋水  
電取内  
ひわ

一御膳 太守様御下け被成り、

道成寺囃子出外節

御問菓子 まされ美無  
苺まんちう

右之後

一檜御重一組 御前様御進上 御使納戸奉行  
清水彌兵衛

一千御菓子一箱 陽和院様御 御使納殿役人  
税所小右衛門

一批把一籠 信證院様御 御使納殿  
是枝喜兵衛

右何れも諸大夫衆披露御使之人無御目見、

一能御見物之内、

山川酒・保命酒・桑酒 但 三色腰高盆・踊ふた茶わんニ小梅漬・みかん・ゆへし武ワニ入相添

一八嶋之能相濟り節 御家ニ被持傳り名香之内十文字・

白菊此兩種香合ニ被入淺黄ふくさに包青貝盆ニ載、早

川勝七郎殿を以被獻之、御滿悦之御事也、

但 勝七郎殿ハ奥御用人ニあり、御成ニ付此方ハ御頼

被成 御臺様達 高懸り上、今日御末席ニ被相詰

り、

一御能相濟り以後狩野養朴并悴如川繪被備 御覽り、此

時、

御間菓子上ル いちご さとう

一右終る夜入時分 御居間書院ニ被爲入 陽和院様 御

目見被成り、

但 陽和院様御支度紫綸子御單物・御腰巻紅梅之厚板

織・御下ケ帶厚板御着用也、信證様系 (院脱丸) 御目見可

被仰付由被仰出り得共、隠居之躰ニ最早年來別

る穩便ニ罷在、其上當分ハ少々痛有之、乍憚御斷

奉存り由遮る御申候ニ付る、不及 御目見り、御

前様御事老湯治ニ御越ニる御留守也、

一御たはこ・御菓子・御茶上ル、交野様・櫻井様抵候、

早川勝七郎殿も御末席ニ被相詰り、

一御土器御抑上ル、御配膳櫻井様御手長被召仕り年寄中

勤之、御茶ハ少女上之、

一御盃 陽和院様に御給、夫ハ被召上 太守様ハ御給相

納ル也、

奥御座之間御揃御人數

一近衛様 白木御供行焼物御碗御道具御紋付、

一交野様 白木御供行但少下ケ焼物御碗道具、

一櫻井様 白木御膳切足焼物御碗道具、

一陽和院様 白木御供行少下ケ塗御碗道具、

一太守様 白木御膳切足塗御碗道具、

一御菓子 梅干 柚子餅

一御茶

一御吸物 ひらき白魚 小まる

一御肴 和敷 梅干 花よし 一御三方御土器一重

一三方押鮎白干

一御酒鈴瓶 (錫丸)

右御寄合之後被召仕り女中 御目見、

おくう

太守様 御局

御前様 御局

右御目見御盃被下り、

澤井

嶋彈正被差上、早速之御禮被仰上り、

淺井

一猿渡藤右衛門事家筋之譯付可被遊御覽旨依御説、還

梅野

御之節御通懸之御目見被仰付り、

野村

一御庭之御茶屋にも段々御饗應之品々被設置り得共渡

竹野

御無御座り、

右ハ 御目見計被仰付り、

一翌十四日 太守様爲御禮御旅館に御參上被遊り、

一鳥井播磨守様も右御次ニ御詰被成候、早川勝七郎殿者

一右御成付る十三日 御城に御獻上物

御末席ニ被相詰り、

一檜御重一組宛 一御肴一種宛

一右終る表に被爲成御蕎麥切・御吸物・御肴等段々上ル、

公方様 御臺様に 太守様・御前様を銘々

御供之諸大夫衆に 太守様御盃事被遊、其外之御近習

一御肴一折ツ、

之面々には御逢被遊り、

右之通御文被相添りる被獻之、

一吉野山學頭願王院權僧正被爲召御座に被相詰り、

一還御之後即日以御使者左之通ニ被下物被仰付り、

一近衛様・交野様御跡乘鍋嶋甲斐守様・太田原飛彈守様

一紗綾十卷ツ、 一銀廿枚ツ、諸大夫五人

料理被下、是又棧敷方能見物被仰付り、其外座敷にも

高木英淳

段々御供中之様子を以不殘御料理被下り也、

木村隼人

一暮六半時過 還御 太守様御興寄迄被奉送、是ハ最前

一金子千疋ツ、 御近習役九人

之通ニ被奉送筈ニ得共依御説如此り、其外御家中之

一同五百疋ツ、 青侍十人

面々罷出り所 入御之節ニ同、

茶道壹人

一從 太守様御使者嶋津帶刀殿從 又三郎様御使者種子

佐脇清右衛門

此兩人元之銀子ハ、  
十枚ノ、ニ被相減

一 同三百疋ツ、 仕丁頭 兩人

一 同五百疋ツ、 御料理方一人

右之外翌十四日以御使者被進り、

三幅對御掛物 中欄音 両脇纏 探幽筆

右交野宮内卿様江

同御掛物 中福政壽・左轟・右驚 探幽筆

右櫻井少將様江

一 御座敷御飾

一 取付之間 此御座敷之縁迄御輿被爲召り、

床

一 掛物花鳥之繪宮燈筆

一 砂之物

一 表御書院 縁通ニハ翠簾を掛落縁ニハ 狸、皮敷之

床

一 掛物二幅對 山水之図 高然唯筆

一 立花貳瓶

棚

一 香爐腰高堆朱盆載

一 香合堆朱揚茂作

一 香匙火箸

右何れも青貝盆載、

一 石榴一帖菊亭遺蹟

一 大御書院上段 上段ハ三方ニ翠簾を掛御褥を設置、中段以下 八左右ニ翠簾を掛、落縁ニハ狸、皮敷之

床

一 掛物三幅對 中 壽老人 兩脇 鶴 月舟筆

一 大卓三具足

立花一瓶 香炉かね之仙人

香合曲輪長清作 香匙火箸竊臺

一 兩脇立花

棚

後小松院宸筆

一 和漢朗詠集二軸かね之覆載

一 重印籠 堆失 諸筥右同

一 料紙硯箱文臺詩繪

一 塵壺染付

附床

一 古今集 後京極良經公御筆 文鎮唐子

一 硯未央宮 一 硯屏かね

一 筆軸象牙 一 墨丸

一 筆架九仙八海之躰 一 筆洗青磁



一 水入かね之鯉

一 喚鐘

一 執木

一 拂子

一 御附書院御褥設置落縁ニハ紺之懸敷之

床

一 掛物一休和尚墨跡

一 活花花入白焼

棚

一 香爐焼物赤繪黒塗四方盆載

一 香合存星作 一 香匙火箸

右何れも曲輪盆載

右次之間床

一 掛物八々鳥牧淺筆

一 料紙硯匣青貝

一 御勝手之間此間ニ御合子仕懸外

床

一 懸物瀧之繪古法眼筆

一 活花花入古銅

棚

一 料紙硯箱籠

一 御居間御褥を設置

床

一 掛物壽老人雪舟筆

一 花瓶ニ立松

棚

一 撰句集為家卿筆  
文鎮かね之欄子

一 籠飯紅之網を懸青貝盆載

一 料紙硯箱文臺

右次之間床

一 懸物七賢之圖趙仲穆筆

一 中央卓

一 香爐かね 香合鎌倉彫

一 御庭之茶屋御褥設置落縁ニハ白羅紗敷也

一 掛物菓子之繪趙昌筆

一 硯伊勢海

水入・墨入かね後藤祐乘彫之臺に藻貝之蒔繪、其

間所々ニ藻貝之和歌正親町院宸筆金具を以置之、

筆軸珊瑚樹、

右次之間床

一 白木卓ニ色紙・短冊・色奉書・卦算

一 香爐青磁  
口寄

一 香合堆米  
張器作

右いづれも青貝益ニ載、

以上

2805 吉貴公御譜中

正文在文庫

なをくめてたさ幾萬々年もと、いわる入まいらせ  
外、此よしよろしく御申入りへく外、何もよく心え  
まいらせて申せとの御事ニ御さり、かしく、  
さつまの守さまより御ふミ下されり、まつく

御ふた御所様御機嫌よくならせられり御事御めてたさ、  
こん日は

左大將様其御ほとへ入らせられ御めてたさ、夫ニ付

御臺様方堀源左衛門にて 上意之趣御もくろくの通参ら  
せられ、忝思しめしりとの御事にて、御禮御ふみのやう、  
御念入まいらせられり御事ニそんしまいらせり、かしく、

朱力キ  
寶永六年五月十三日

鳴津將監殿 ひと  
同 帶刀殿 つほね  
御返事

2806 吉貴公御譜中

正文在文庫

申あけまいらせりへく外、なをく御機嫌よく御め  
てたさの御事ニり、いわる入まいらせり、めてかし  
く、

御ふみのやうまつく今日はそこ御ほとへ

左大將様入らせられりニ付

御臺様より 上使堀源左衛門にて御もくろくのとおりま  
いらせられりへハ、かたしけなく思しめしりよし、おく  
さまへも御もくろくの通まいらせられりへハ、數々かた  
しけなく思しめしりよしにて文のやう、めてかしく、

朱力キ  
寶永六年五月十三日

豐原 ち  
常盤井 たかせ  
鳴津將監殿 とみ岡  
同 帶刀殿 川しま  
御返事

2807 全上

返く御懇入せられり御事にそんしまいらせり、かし

く、

御ふみ下され、まつく

公方様

御臺様御機嫌よく御さなされ、めてたく思しめされゆよし御尤にそんしまいらせり、こん日

左大将様御手前様御宅へ入せられ、忝思しめされり由御尤こそんしまいらせり、それニ付御もくろくのことくしん上なされ、則ひろういたしりへは御まんそくに思しめしり、よく心得申せとの御事ニ御さり、めてたくかしく、

朱カキ  
寶永六年五月十三日

鳴津將けん殿

ひて

同 帶 刀殿

つほね

御返事

全上

なをくめてたくかしく、

御ふみ下されり、まつく

公方様 御臺様御機嫌よく御座被成、めてたく思しめし

り由、昨日考

左大将さま初る其元へ入せられ處、緩くと御座被成り

よし、色々御馳走にて御慰被成り御事

御臺様にもきかせられて、かすく御満足に思しめしり、御ねん入せられり御ふみのやういかほともよく申せとの御事にて御座り、めてたくかしく、

朱カキ  
寶永六年五月十四日

鳴津將けん殿

ひて

同 帶 刀殿

つほね

御返事

全上

返くなにもく御懇入せられり御事こそんしまいらせり、以上、

御ふみ下され、昨日をくさま御めしつかいの人御あけあそハしり處ニ

公方様

御臺様へ 御目見仰付られ、そのうへ 御ふた御所様よりはいろいろ物仰付られ、忝御仕合に覺しめしり、

御臺様をくさま・おみつさま・やう和院さま・しん證(近衛家久室・吉貞)

院さままでも御たつね、たんく御懇の御事、かたしけなく思しめしり由、何もく御禮の御事ひろういたしま

いらせり、めてたくかく、

朱力キ  
寶永六年五月十四日

とよ原  
ときハる

嶋津將けん殿

たかせ

同 帶 刀殿

とミ岡

御返事

川 嶋

全上

なをくめてたくかく、

御ふみ下されり、まつく

公方様

御臺様御機嫌よく御座被成、めてたくおほしめしり由、

昨日は

左大將さまそこもとへ初ゐ入せられり處、ゆるくと御

座被成りよし、色々御馳走共にて御なくさみ被成りハん

とめて度そんしまいらせり、御ふみのとをりよろしく申

上まいらせりへくり、めてたくかく、

カ

朱力キ  
寶永六年五月十四日

豊原

ときハる

2811

します將監殿

たかせ

同 帶刀殿

とミ岡

御返事

川しま

全上

返く何もく御懇入せられり御事こそんしまいら  
せり、かく、

御ふみ下されり、まつく

御臺様より陽和院さま・信證院さまへ御尋たんく御懇

の

上意にて御めいくに御もくろくのことくまいらせら

れ、忝思しめさせられりよし、則御禮の通ひろういたし

りへは御まんそくに思しめしり、よく心へりて申せとの

御事にて御さり、めてたくかく、

カ

朱力キ  
寶永六年五月十六日

とよ原

ときハる

嶋津將けん殿

たかせ

同 帶 刀殿

とミ岡

御返事

川しま

吉貴公御譜中

正文在文庫

誠ニ幾まんく年もといわる入まいらせり、御表向  
ニハ御禮ニ御出被成りへ共、なを御禮仰上られり  
の御事御念入り御事ニそんしまいらせり、御ふみの  
通ひろういたしりへくり、此よし御申入りへくり、  
かしく、

さつまの守さまより御ふみ下されり、まつく

公方様

御臺様御機嫌よくならせられりまゝ、御心易思しめしり  
やうに御申入りへくり、さてはこん日將軍 宣下の御し  
うき

公方様より上使久松太郎左衛門<sup>(定)</sup>左衛門

御臺様より早川勝七郎にてまいらせられり御事、かたし  
けなく思しめしりよし、奥さま御湯治の御留守故、さつ  
まの守さまを御禮仰上られりとの御事御尤ニ存まいらせ  
り、めてかしく、

朱カキ

寶永六年五月十八日

とよ原

常盤井

お

嶋津將監殿

たかせ

同 帶刀殿

とミ岡

御返事

川 嶋

全上

誠ニ幾萬年までの御事ニ御さり、御禮の通何もよろ  
しくひろういたしりへくり、此よし御申入りへくり、  
かしく、

さつまの守さまより文被下り、まつく

公方様

御臺様御機嫌よくならせられりまゝ、御心易思しめしり  
やうに御申入りへくり、さてハこん日 將軍宣下の御し  
うき

公方様より上使久松太郎左衛門

御臺様より早川勝七郎にて御もく録の通奥さまへつかハ  
されりへハ、かたしけなく思しめしりよし、御禮仰上ら  
れ文のやうひろういたしまいらせり、めてかしく、

朱カキ

寶永六年五月十八日

嶋津將監殿

ひて

同 帶刀殿

つほね

御返事

お

2814

吉貴公御譜中

正文在文庫

飛札之趣令披閱外、愈無吳之事玆重思給外、連日快晴大井川無難今夕金屋驛令止宿外、杏路被問安否兩種贈與不淺怡悅之事外、餘期後信外、謹言、

朱力キ

寶永六年

仲夏廿一

(近衛家久)

(花押) No.10

薩摩少將殿

2815

全上

芳簡披閱、暑氣之節弥清健之由玆重、今度左幕下在府中無異事、殊其館に請招丁寧之饗應令祝着外、早々示給之趣悦入外、謹言、

朱力キ

寶永六年

仲夏廿二鳥

(近衛家久)

(花押) No.4

薩摩少將殿

2816

吉貴公御譜中

正文在文庫

華簡落手、今度左幕下在府中無吳、殊被請招其亭慰勤之(勲力)饗應先達相聞、彼是丁寧之模様不淺悦入外也、

朱力キ  
寶永六年  
仲夏廿三鳥

松平薩摩守殿

基熙

2817

吉貴公御譜中

寫正文在文庫

今度於薩摩國南泉院、東照宮造營神躰彫刻之事如家傳可致存知之旨、准三宮一品宮御氣色之所也、仍執達如件、

內藏權頭保孝判

寶永六年六月四日

大佛師康傳

在包紙

大佛師康傳

內藏權頭

2818

扣正文在文庫

一筆致啓上外、然者 英光院殿爲詞堂此節黃金五枚薩摩守より差進之外聞、永無怠慢樣御計可被下外、依之如斯御座外、恐惶謹言、

朱力キ

寶永六年

六月五日

嶋津帶刀

仲休判

嶋津大藏

久明判

大徳寺

御役者中

2819 吉貴公御譜中

同年六月六日 上使本田伯耆守正永來于櫻田亭傳

嚴命云、宜錫告歸國、且恩給乎御時服百領・白銀千

葉一矣、翌七日吉貴登高營奉謝之、家宣公徵之親

述而惠諸御腰物一腰三條吉家長二尺四寸六分、當黃金六十枚、是公治世始

賜告之故也、並拜領龍蹄一匹、恩遇頗懇篤也、以下吉

貴豫所庶幾之由、家老島津大藏久明從登而取拜謁

焉、爲令久明留守邸館也、時執政列居于白書

院縁類、招吉貴、土屋相摸守正直言曰、琉球中山王所

獻使者隨先例來年參覲之期可帥來焉、蓋琉國者悠海

舟航不自由之地也、難定期臻者歟、縱雖述職後時

違期、卿勿爲疚、吉貴敬報曰、命是行而已、

大藏久明謹中

寶永六年久明在江府守三芝之華亭、故丁

歸國之暇之時上、久明拜三調

將軍家奉獻御太刀・馬代一枚・時服三矣、

2821 助之丞久白譜中

寶永六年秋爲吉貴公歸國之禮使馳江府勉使事、

奉拜三謁 大樹家宣公這時拜戴時服三・羽織、

2822 吉貴公御譜中

正文在文庫

參らせり御事御さけ、誠こめてたさ幾度も御いとま

つかはされけりやうこといわる入參らせられけり御事

御さけ、かしく、

さつま守さまより文下されけり、まつく御二御所様御

機嫌よくならせられけりま、御めてたく思しめしけりやう

こ御申入りへけり、扱ハ此度御國元への御いとましゆひ

よく仰出されけり御事にて

御臺様より早川勝七郎にて御目錄の通まいらせられけり御

事、誠こ御ねん比の御事とも有かたく思しめしけりよし、

御禮仰上られ文のやうひろういたし、めてかしく、

宝永六年六月七日

鳴津將監殿

同 帶刀殿

御返事

ひて

つほね

全上

尚々御ふみのやう御ねん入まいらせり御事にそんし  
まいらせり、めてたくかしく、

御ふミ下されり、さては御手前さま此度御國への御いと  
ま 仰出されり付

御臺様より御使早川勝七郎にて御もくろくのことく被成  
り、かたしけなく思召りよし御禮御ふミのとをり申あげ  
まいらせりへくり、めてたくかしく、

朱カキ  
寶永六年六月七日

豊原 右  
ときハる

嶋津將監殿

たかせ

同 帶刀殿

とミ岡

御返事

川しま

全上

なをくよく申せとの御事にて御座り、めてたくか  
しく、

御ふミのやう則披露いたしまいらせり、まつく  
公方様 御臺様いよく御機嫌よく御座被成めてたくお

ほしめしり由、御尤にそんしまいらせり、さては 近衛

關白様此たひ攝政

宣下御座り御事

御臺様御よろこひあそはしりハんと、御めてたさ 仰ら  
れて、御もくろくのことく進上被成、則披露いたしり得  
者かすく御満足に思しめしり、めて度祝入せられり、  
めてたくかしく、

朱カキ  
寶永六年

嶋津將監殿

ひて 右

同 帶刀殿

つほね

御返事

なをくよろしく披露いたしまいらせり御事にて御  
座り、以上、

御ふミ下されり、まつく

公方様 御臺様いよく御機嫌よく御座被成めて度おほ  
しめしり由、御尤にそんしまいらせり、さては此度近衛  
關白さま攝政

宣下御座り御事、めてたく覺しめしり由、御祝儀 仰上  
られ御目録の通進上被成、則披露いたしまいらせり得者



御機嫌におほしめし御事にて御座り、めてたくかしく、

朱カキ  
寶永六年

豊原

ときハる

嶋津將監殿

たかせ

同 帶刀殿

とミ岡

御返事

川しま

2828

朱カキ  
寶永六年 六月十一日

吉貴御判

嶋津周防殿  
(久徳)

吉貴公御謄中

正文在文庫

貴札致拜見り、

公方様益御機嫌能被成御座恐悅御事り、然去去六日 上  
使以本多伯耆守御國元江之御暇被仰出之、品々拜領難有  
思召り、且亦御代替之爲御祝儀、例之通從琉球國中山王  
使者來朝之儀、願之通來年被召列可有參府由被 仰渡之  
旨、依之御紙面之趣入御念儀御座り、恐惶謹言、

朱カキ  
寶永六年

六月十五日

松平紀伊守

信庸判

松平薩摩守様

御報

2829

吉貴公御謄中

正文在南泉院

2827

正文在島津大學

來札令披見り、今度又三郎元服名替之爲祝儀、以使如目  
録被相贈之、入念り儀欣然之至り、於其方表弥無異之由

珍重り、謹言、

大雄山佛日寺者薩摩太守源吉貴朝臣於其國府所創建也、  
然請余以勸請

東照宮大權現而屬東叡山之末派、故應其請命權僧正智周

開其寺法司其僊儀、且以南泉之院號永爲當門之良家、能可令顯密兩業弘通其國者也、

寶永六年六月十七日

輪王寺准三宮一品親王判

信解院

惠順判

楞伽院

貫通判

薩州大雄山南泉院

上包

薩摩國南泉院權僧正

2831

吉貴公御譜中

正文在文庫

2830 吉貴公御譜中

正文在南泉院

條制

琉球布十卷并砂糖漬天門冬一器・泡盛酒二壺・御肴一種被獻之外、首尾能遂披露外、恐々謹言、

朱力<sup>キ</sup> 寶永六年 六月十八日

政直判

一專守一宗之法式、神前之勤行・神事・祭禮不可有怠慢事、

一天下安全・檀越榮久之祈願可抽丹誠事、

一寺中之輩可受學頭差圖、若寺法相背族於有之者速可令

沙汰之事、

一精修顯密之學業於山門法曼院灌頂可相勤事、

一不可背國主之制法致私檢斷事、

右條々堅可相守之旨准三宮一品宮御氣色之所也、仍下

知如件、

寶永六己丑歲六月

惠恩院

懋潤判

2832

吉貴公御譜中

正文在文庫

松平薩摩守殿

在口裏 土屋相摸守 政直

今度 御營様御紋位付、爲御祝儀兩種御櫛代被獻之外、各申談首尾好遂披露候、恐々謹言、

朱力<sup>キ</sup> 寶永六年 六月廿一日

政直判

松平薩摩守殿

土屋相摸守  
政直

全上

なをくめてたくかしく、

御ふみ下されり、さては此たひ

御臺様御叙位の御しうきとして　をくさまお御あげ被成  
り女中使へ御部屋さまお御祝儀御座り事、御禮御ふみの  
通申傳まいらせりへくり、誠にお御ねん入せられり御事に  
そんしまいらせり、めてたくかしく、

朱力キ  
寶永六年

しまつ將けん殿

豊原

お

同　帯　刀殿  
御返事

つほね

古貴公御譜中

同六月二十三日辭江府取路於中仙道、七月九日到  
伏見、同十三日棹三川流下大坂、十七日發大坂歷三播  
磨路、二十日至三室津、駕松翌日開帆、二十五日著于豊  
前田之尻、其夜過三陸路一次三大理、二十六日發、  
八月七日入三薩出水、同十三日歸三鹿城也、家老島津帶

吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく早く御悦仰上られり事御満足の通、何も  
よく申せとてり、かしく、

文くたされ披露いたし參らせり、おほせのことく時分か  
ら次第二ひへくしく御座りへとも、

一位様御機嫌よく御座あそはされりま、御心易思しめ  
し被成へくり、

右府様御道中御機けんよく去月十六日御歸京遊ハしり事  
御聞被成、めてたく思しめし被成りよし、御悦仰あけら  
れ御ふみのやう披露いたしまいらせりへハ御満足と思し  
めしり、御てまへさまも御ふしの御事數めてたく思し  
めしり、めてたくかしく、

朱力キ  
寶永六年

吉貴公御譜中

松平薩摩守殿

基瀬

林鐘晦日

寶永六年  
朱力キ

速丁寧之嘉義不淺令祝着外、謹言、  
無異事外、然者今度 御臺敍位之事同前日出思給外、早  
華簡披覽、如來示雖酷暑之節外弥康安之由珍重外、此方

全上

薩摩少將殿

(花押  
No.10)

季夏廿九

寶永六年  
朱力キ

餘期後慶外、謹言、  
御臺御方御敍位之事畏悦不少外、早速被伸賀事令祝着外、  
如來教酷暑之節愈安穩之事珍重外、此邊無異外、然亦

吉貴公御譜中

正文在文庫

松平  
さつま守様  
岩 倉  
梅その  
人、申給へ

正文在島津大學

兩通之來簡令披閱外、今度歸國之被下御暇難有仕合外、  
且又先頃 近衛左大將殿江府宅に被爲入、緩く被成御座  
大悦之至外、依之爲祝詞示諭之趣令愉快外、謹言、

寶永六年  
朱力キ  
七月十五日

吉貴御判

嶋津周防殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

貴札致拜見外、薩州公益御機嫌能御入國可被成と目出度  
奉存外、然者此度就大佛殿成就曼荼羅壇一基・什器一部  
并舍利塔 御記文等 御寄附即殿内 莊嚴仕遂供養御祈禱仕  
外、誠寺門之規模一山之慶不淺奉存外、御序之刻宜奉  
頼外、恐惶謹言、

寶永六年  
朱力キ  
七月廿日

龍松院上人  
公成御判

嶋津帶刀様

吉貴公御譜中

正文在文庫

爲八朔之御祝儀以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻  
之、首尾好遂披露候、恐々謹言、

朱カキ  
寶永六年 八月三日

井上河内守 正岑判

大久保加賀守 忠増判

本多伯耆守 正永判

小笠原佐渡守 長重判

土屋相摸守 政直判

松平薩摩守殿

2841 吉貴公御譜中

正文在文庫

御めてたさのミかきりあらすといわぬ入まいらせ  
外、さつまの守さまも御ふしニ御座被成、めてた  
く存まいらせ外、何もよろしく御申入外へく外、よ  
く申せとの御事ニ御座外、めてかしく、

御臺様より申せとの御事ニ御座外、いまたことのほか成  
暑さにて御座外得共、

御ふた御所様御機嫌よくならせられ外御事御めてたさ、

さてハ此度上方にて

近衛關白様攝政の 宣し參らせられ外御事御めてたさ、  
御祝儀として此御もくろくの通參らせられ外、誠ニ幾千  
とせ萬世も御機嫌よく御長久御はんしやう被遊、めてか  
しく、

朱カキ  
寶永六年八月七日

鳴津將監殿

同 帶刀殿

人、

ひて

つほね

2842 吉貴公御譜中

同年七月十二日夜琉球中山王尚貞卒、城代越來按司、三  
司官幸地親方・識名親方・池城親方以ニ森山親雲上ニ爲レ  
使、飛ニ扁舟ニ先捧ニ書於新納市正久珍ニ監ニ琉球  
之事一告ニ大故于  
國老一、八月二十日稻嶺親方處見府  
在番携ニ森山ニ來ニ島津將監  
久當當之宅ニ告レ訃、

2843 全上

正文在文庫

御札令披見外、

2845

吉貴公御譜中

同九月十四日 琉球國司繼目願之使者今歸仁按司登城、  
就堀甚左衛門興昌以三所含來之旨告久當曰、仰願  
以三故國司尚貞之繼目補中城王子尚益、故以使者偏

2844

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様御機嫌之御様躰被相伺之、益御安全之御儀、  
可御心易、隨御看一種被獻之、紙面之通得其意、  
恐、謹言、

朱力キ  
寶永六年

八月廿三日

松平薩摩守殿

間部越前守

詮房判

朱力キ  
寶永六年

八月十九日

松平薩摩守殿

小笠原佐渡守

長重判

公方様御機嫌之御様躰被相伺之、益御安全御儀、  
御心易、隨御看一種被獻之、各申談首尾好遂披露  
、恐、謹言、

2846

全御譜中

正文在文庫

願三國老之吹舉云爾、吉貴見二使者、今歸仁獻異域  
之方物琉球之產物一取三拜謁、

爲重陽之祝儀小袖五到來歡覺、委曲小笠原佐渡守可述  
候也、

朱力キ  
寶永六年

九月七日

薩摩少將殿

2847

吉貴公御譜中

正文在義岡彈正

此紋ヲ可付、  
左平太忠守と可名乘、

朱力キ  
寶永六年

九月九日

義岡源右衛門へ



吉貴公御譜中

同九月十六日吉貴投レ書咄ニ中城王子尚益ニ贈ニ香奩白銀五十枚、令ニ球國在番中神七右衛門賴常ヲシテ授ニ之於尚益、加旃遣ニ使富山藩右衛門義方勳之于琉球ニ訊ニ居レ喪之安否、贈丹青二軸坂求袋・同三十斤木村探元國・花瓶一雙薩州制、金襴手、伯圖之

正文在琉球國國司

國司所勞之處養生不相叶卒去由、絶言語其許愁傷之程令察ハ、爲悔如此ハ、恐々不宣、

朱力キ

寶永六年 九月十六日 少將吉貴御判

謹上 中城王子

全上

正文在琉球國國司

寫

琉球に他國船漂着之時素日本船ニ由リハ、於其所船中相改、從御當地罷渡居ハ船之内上リ船便有之ハ節、船頭之内髓成者を見合案内船ニ申付地方迄差越、着船之所より早々鹿兒嶋に可申越ハ、萬一大清其外吳國ニ參ハ日本船歸朝之節漂着ハ、就中入念相改髓ニ地方に可送届旨

琉球に可被申渡者也、

朱力キ

寶永六年 丑九月十六日

御家老座印

琉球方

吉貴公御譜中

正文在文庫

先月中旬海陸無難歸國弥平安之由目出思給候、此邊無吳ハ、早速懇懃之紙面祝着不淺ハ、謹言、

朱力キ

寶永六年 季秋十八日

基熙

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃 聖堂 御參詣之儀被承之恐悦旨尤ハ、紙面之趣各申談及 高聽ハ、恐々謹言、

朱力キ

寶永六年 九月十九日

大久保加賀守

忠増判

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

今度御臺被位、因茲先頃以行李聊表佳義候處、謝儀之趣  
懇懃之至<sup>レ</sup>、弥勇健之由玆重<sup>レ</sup>、愚老無吳事<sup>レ</sup>、謹言、

朱力キ

寶永六年

季秋廿二日

基熙

松平薩摩守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見<sup>レ</sup>、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃 聖堂 御參詣之儀被  
承之恐悦旨尤<sup>レ</sup>、紙面之趣得其意<sup>レ</sup>、恐々謹言、

朱力キ

寶永六年

九月廿三日

間部越前守

詮房判

松平薩摩守殿

全上

正文在琉球國司

今年歸帆大唐船方寄物之儀付<sup>ル</sup>者、先達<sup>ル</sup>琉球方より假  
屋へ到來有之被聞召置<sup>レ</sup>處、一番・二番・三番用物那覇

に相届<sup>レ</sup>分不殘帳面二冊に相認、唐船改奉行七月廿八日

差出<sup>レ</sup>付<sup>ル</sup>、越來按司・三司官八月三日與書之上書付を

及相添、假屋方へ被申越紙面帳内之趣を及委細致披露<sup>レ</sup>

處、乍尤當年之儀八日和後<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>ハ、一番用物之儀及差登

難成筈<sup>レ</sup>間、一番用物之儀ハ此以後寄來<sup>レ</sup>品物も格護被

申渡置、來夏御當地へ可被差上<sup>レ</sup>せ<sup>レ</sup>、二番・三番方品物ハ

此方へ御構無之<sup>レ</sup>條琉球方へ被受取可然<sup>レ</sup>、此旨ハ在番

奉行中神七右衛門方へ及此節被仰渡<sup>レ</sup>條承達可有首尾

外、右之旨趣越來按司・三司官方へ可被申越旨市正殿御

差圖<sup>ニ</sup>あり、被差出<sup>レ</sup>帳面貳冊・書付一通相返<sup>レ</sup>、以上、

朱力キ

寶永六年

丑九月廿四日

堀甚左衛門印

全上

正文在琉球國司

渡唐船歸帆之節依風並本琉球に老難乘着<sup>レ</sup>節ハ、乘方能  
所<sup>レ</sup>に乘行<sup>レ</sup>様ニ可相心得<sup>レ</sup>、就中大嶋に老取付能時節及  
可有之儀<sup>レ</sup>條、向後之儀右躰之節ハ大嶋に表乘着<sup>レ</sup>様ニ  
被申付置可然<sup>レ</sup>、大嶋に致着御當地御用物、取分け代官  
上切封<sup>ニ</sup>る差登事<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>者、本琉球より差登<sup>レ</sup>ニ及何そ相



替儀及無之筈外、尤渡唐船乗組役人中難儀ニ懸り外儀及無之事外、海上表間近諸事宜方ニ表外、菟角首尾好着船外儀專一之事外、依之大嶋代官に申渡置外書付寫相渡外條、渡唐船役人中へ此旨令納得外様ニ得と可被申渡外、以上、

朱力平

寶永六年

九月廿五日

御勝手方

正文在琉球國國司

寫

一琉球渡唐船歸帆之節大島へ致漂着外儀共有之外、就中此已後之儀者依順風大島へも着船外様可仕由、琉球方へも申渡置外、渡唐船積荷之儀者別る被入御念御事外間、令着船外者早々着船之所へ差越、萬端無緩様差引可有之外、右之通外得者島中之者共致其覺悟居、渡唐船致着船外ハ、其所之役人共早速罷出引船餘多出之、湊能所へ引入可申外、左外用事爲可達又者嶋人共不近寄様番船付置、代官方へ早々申出外様役人其外島中之者共へ兼々可被申渡之事、

但荷物積入出船場宜湊に、挽回置外方可然考も外ハ、日和静之節見合を以可挽回外、時宜次第可被

申付外、

一番船二艘ニ造成掟役之者、一艘一人宛主取可相附置外、左外水薪其外何角用事可相達外、積荷物取分無之内者互爲念外間、渡唐船乗組人數猥ニ陸卸無之様才荷方へ可被申達候、唐船繫居外陸へ與人・横目之間相詰居、渡唐船方何角用事可承外、唐船乗組之内陸に不卸外不叶儀有之外ハ、與人・横目に相斷用事相達外様有之可然外、尤嶋人共渡唐船ニ不近寄様稱敷可被申渡外事、

一渡唐船致着船外者以便船先達る其趣委曲可被申越外、尤本琉球在番方へ及嶋次を以其旨可被相達外事、一才付其外役者中ニ致相談御當地御用物之儀取分之させ、彼方切封之儘請取之、其上を代官切封之可被差登候、積船之儀者爲御米漕罷下居外船之内、吟味之上年數近キ慥成船ニ可被積入外、渡唐船二艘着外節ハ船四艘、一艘着外時者二艘ニ積入可被差登外事、一宰領之儀者渡唐船ニ乘來役人宰領ニ可被差登外、先年者附役人宰領ニ差登外儀及有之外得共、琉球より仕出之節も彼方宰領迄ニ外間、大嶋より被差登外節も其通可相濟外、自然附役不罷登外不叶子細有之外

者、時宜次第可有之外事、

一 荷物積入様之儀船付ニ者御米を積入、其中ニ荷物積入上を牛之皮ニ覆、其上者御米を以積堅メ可被差登リ、牛之皮之儀嶋中へ兼ミ申渡、死牛可有之刻ハ無緩諸所御藏へ相納させ置、渡唐船着リ時分者諸所より持寄リ御用可相調リ、牛之皮之儀者御買入ニ可差登由兼而申渡置リ、右之通ニ皮集リハ、御用分相考置、其外者漸ク御買入ニて差登リ可然リ、若皮不足者渡唐船ニ者牛皮有之由リ間、借物ニて差登リハ、於御當地琉球に可相返リ事、

附 浦ニニ挽船又者着船之相圖之爲、洞之貝壹艘ニ

一 ツ宛可相渡リ、

一 御當地御用分取分渡唐船役人より差出リ節、荷數書付相調させ請取之、船より差登送狀銘ニ相附可差登リ、琉球方用物之内當地に差登ニも可有之、其分ハ可爲同前リ、其外何そ無構リ間渡唐船役人方へ猶更堅固致置、時分見合出船有之様可被相達リ、尤出船時節之儀地下人共よりも相考申談リ様可被申付置リ、渡唐船滯船中無緩様隨分堅固可被申渡置リ事、

一 自然荷物之内濡リ表有之者見合を以潮抜申付可被差

登リ事、

一 右荷物差登リ儀時分後ニ成リ者如何ニリ間、着船リハ、隨分諸役人出精積移旁々相仕舞、日和相待居令出船、隨分入念致通船リ様船頭方無緩可被申付リ事、

右之趣を以附役人中へも申談宜様可被相動リ、尤向後代官代合之節者件之趣堅固繼渡有之様可被相心得者也、

朱力キ  
寶永六年

丑九月廿五日

御勝手方印

大嶋代官

富山傳内左衛門殿

2858

吉貴公御譜中

同月二十五日徵ニ今歸仁、家老新納市正久珍・島津帶刀仲休・種子島藏人久時列居、若年寄種子島彈正伊時・肝付主殿兼柄、大目附島津内膳久兵・佐多内記久武・桂織部久祐・北郷作左衛門久嘉、側用人伊集院用之助久當、表用人仁禮仲右衛門賴常・黒葛原源左衛門忠雄、側目附鎌田六郎太夫政直候ニ于席一、仲休代久齋傳ニ吉貴之命ニ曰、尚貞死去故使ニ中城王子尚益連ニ續之ニ琉國之政宜レ盡レ心云云、

正文在文庫

一封披覽、冷氣之節愈無事、且海陸安穩歸國之由、早速被示聞懇切之事令怡悦外、此表無恙外、尚期後音外、謹言、

朱力キ  
寶永六年 季秋廿五

(花押 No.4)

薩摩少將殿

芳翰披閱、冷氣之節愈勇猛、且海陸無事歸國之由、早被示聞懇篤之事悦思給外、此地無恙外、尚期後音外、謹言、

朱力キ  
寶永六年 季秋廿五

(花押 No.10)

薩摩少將殿

正文在琉球國國司

扣寫

一琉球國王繼目相續付、來年江戸に使者被差上儀相究外

ハ、

公方様御代替御祝儀被申上外使者可爲同列外、就夫ハ國王繼目之使者ハ供人陸分可有減少、分格之使者ハ外得共兩使同列之事外間、兩人役之例者壹人、四人役之例者貳人程之減少ニ由、尤座樂人一通リニ召列ニ及間敷哉、乍然小姓兩人迄ハ繼目之使者供之列ニ相加江、自然樂人之内病氣差合等之節、代リニ成外様器用可有見合外、且又路次樂人別格不及兩様、兩使者之眞先ニ一通リ相備、兩使者者追付備外ハ、規式之備可相濟哉と存躰ニ外、乍尤副使已下供人之頭々及同勢減少外様ニ分ク格々ニ應シ可有其心得外、

一道中宿幕之儀日本向之幕ニ由者不相應ニ外、何ぞ爲替幕地ニ由仕立表替江外様ニ有之度外、繻珠たひい類之物ニ切入なと可然哉、

一長刀拵様、錦物付外儀能ク可有吟味外、

一鐘表大清之鉦之様ニ拵様可有之、歸朝之琉球人ハ吟味之上可被相調、

一右之外海陸旅立之諸具、吳朝之風物ニ似外様ニ可有之、日本向に不紛敷様ニ可相調、

一雨具右同斷、

右之通市正殿・帶刀殿被仰談<sub>レ</sub>間此旨可申渡由御差  
圖ニ面<sub>レ</sub>外、以上、

朱力キ  
寶永六年 九月廿六日  
(興)  
堀甚左衛門

吉貴公御譜中

正文在文庫

歸國御禮之使者嶋津助之丞、朔日五時過西丸江可差出  
外、且又自分御禮爰可申上<sub>レ</sub>間可存其趣<sub>レ</sub>、以上、

朱力キ  
寶永六年 九月晦日  
(本多正水)  
本伯耆

松平薩摩守殿

留守居